

# 地域の教育資源を活用した中学校美術教育のシステム開発

2015 年 3 月

新潟大学大学院

現代社会文化研究科

志藤 浩仁

## 目次

### 序章 …1

- 第1節 本研究の目的
- 第2節 研究の特色
- 第3節 先行研究と本研究の新規性
- 第4節 本研究の構造

### 第1章 地域連携からみる中学校美術教育の歴史的変遷と現状 …11

- 第1節 研究の目的と研究の方法
- 第2節 学習指導要領の変遷
- 第3節 地域の教育資源を活用した中学校美術教育の現状
- 第4節 考察
- 第5節 残された課題

### 第2章 物的資源を活用した事例（中学校美術科と事業所の連携）…36

- 第1節 研究の進め方
- 第2節 地域の教育資源を活かした造形活動の現状と課題
- 第3節 実践題材「地域の服飾店におけるディスプレイ・コーディネート」
- 第4節 実践結果
- 第5節 考察（成果と課題）

### 第3章 情報的資源を活用した事例（中学校間の連携） …44

- 第1節 問題の背景と研究の進め方
- 第2節 実物の美術作品活用の意義と学校所蔵美術作品の可能性
- 第3節 学校所蔵美術作品活用の実際
- 第4節 中学校所蔵美術作品の調査と結果
- 第5節 調査結果の考察
- 第6節 残された課題



## 第4章 人的資源を活用した事例（教員と美術館学芸員の連携） …63

### 第1節 学校と美術館の連携の概観

### 第2節 実践題材「体育祭マッチフラッグの制作と鑑賞」の概要

### 第3節 実践題材「体育祭マッチフラッグの制作と鑑賞」の検証

### 第4節 考察

### 第5節 残された課題

## 第5章 複合的資源を活用した事例（中学校美術科と地域の自治組織の連携） …82

### 第1節 研究の目的と方法

### 第2節 公共の場における美術作品制作の概観と実践の方向性

### 第3節 実践題材「中学生によるトンネル壁画制作」の概要

### 第4節 実践結果

### 第5節 実践題材の成果と意義

### 第6節 残された課題

## 終章 …101

### 第1節 全体を通しての結論

### 第2節 今後の展望

## 序 章

### 第1節 本研究の目的

#### 1. 美術に対する生徒の様相

中学校入学直後の段階ですでに美術に苦手意識を持つ生徒が毎年存在する。小学校在学時に抱えていた図画工作に対する苦手意識を引きずっているのだ。理由を聞くと「絵を描くのが下手だから」、或いは「手先が不器用だから」と述べる。

また、生徒が美術作品に接するとき「うまい」、「へた」の単語を使うことが多い。形や色彩、発想の良さや面白さを観点とし、独自の視点で作品を評価する生徒は稀である。また、自分が描いた作品に対する評価（評定）を聞いてくる生徒がいる。その生徒にとって美術の表現活動は良い評定をもらうための手段となっている。中学生による自分が制作した美術作品の価値判断は技能的観点に偏っており、他者の評価に左右されやすい。生徒は美術作品を制作するためには専門的な知識・技能を要すると捉える傾向にある。そのような生徒の中には、美術の授業で自分の表現が他者に認められることで自信へとつながり、美術に対する苦手意識が払拭されることがある。美術が嫌いという生徒は技能的稚拙さがコンプレックスの要因となり表現意欲をなくしているのではなく、実はコンプレックスの直接的要因は周囲の評価である。

社会心理学では、オペラメント条件付け「人間の行動は人からの評価に影響される」<sup>1</sup>という考え方がある。それは「ある行動が当事者にとって肯定的な結果をもたらすと、その後、似たような場面で、その人がその行動を行う傾向が高くなる」<sup>2</sup>、逆に「行動が当事者にとって否定的な結果をもたらすと、その後、その行動を行わなくなる」<sup>3</sup>とされる。すなわち、行為の価値判断は社会的評価に左右されるという考え方である。生徒それぞれが、自分の表現が周囲の人間に認められたと実感できるかどうかは重要な部分であり、美術教育が大事にすべき点であるとともに、美術教育だからこそできる部分ともいえる。それは生徒にとって自信をもって自己表現する力（生きる力）と密接に関係する。

美術教育は生徒に何を育てているのか問われたとき、学習指導要領の中に根拠を求めると、造形要素や美的感性ということになる。はたしてそれだけでよいのか。筆者を含め、我々中学校美術教員は授業中だけでなく日常生活のさまざまな場面で生徒個々の表現又は鑑賞活動から生まれてくる個々の良さを見つけ、生徒に還元する必要があるのではないか。

美術は美術館や専門書の中にだけでなく、日頃から我々が身につけている衣服、登下校で見かける建築物、風景、授業で使う教科書の表紙、地域や学校行事など無数に存在している。私たち中学校美術教員はそのことに着目する必要がある。生徒とともに身近な場所で息吹いている美術に視線を向けることで、美術の学びが日常生活につながり、生徒の美術への関心の高まりや学習意欲を引き出すきっかけになると考えるからである。さらにいえば、日常生活の問題解決となる題材設定は、生徒が生きることと学ぶこととのつながりを実感し、美術を学ぶことの良さの発見、身近な美術文化の認知へつながる。地域の教育資源を活用した中学校美術教育のシステム開発はそのための手立ての一つである。

中学校と地域の連携の必要性を教育関連法規にみると平成18(2006)年改正教育基本法第13条<sup>4</sup>、平成20(2008)年告示中学校学習指導要領<sup>5</sup>がある。国の施策に目を向ければ、内閣府発行2010年版『子ども・若者白書』<sup>6</sup>の中に「地域や学校教育の場において、子どもたちが文化活動に参加し、優れた芸術文化や歴史的な文化の所産に触れることにより、豊かな心や感性をはぐくむよう、学校、地域社会や文化施設等の相互連絡を密にし、学校の内外における文化活動や鑑賞の機会を確保することは重要である」<sup>7</sup>と記されている。前年度まで発行されてきた『青少年白書』（『子ども・若者白書』の前身）では、同記述が学童期の施策としてのみ示されていたが『子ども・若者白書』では中学生を含む青年期の施策にも位置づけられるようになった。これは、青年期における芸術文化活動の重視の表れといえよう。地域と学校の連携の必要性が法制度、施策に明確に位置づけられて数年しか経っていない。全国各地ですでに実践が行われ始めているが、中学校美術教育における学校と地域の連携に関する研究と実践は発展途上にある。

## 2. 地域における生徒の様相

2009年にベネッセ教育研究所が実施した「第1回放課後の生活時間調査ー子どもたちの時間の使い方〔意識と実態〕速報版」<sup>8</sup>によると、部活動の時間にしめる割合は1学年が最も多く91.8%、2学年が89.7%となっており、3学年を除くと1日約100分とされる。民間のスポーツ教室や塾通いの生徒も含めると、ほとんどの中学生が放課後は部活動の練習又は習い事に時間を費やしており、日常生活の中で地域と関わる場面がほとんどない。地域住民でもある中学生が行事等を通して自分の住む地域と関わる場面設定が必要である。中学生と地域住民のつながりを生み出すことは、コミュニティの文化の推進、興隆に不可欠な要素と考えるからである。

なお、本研究では特別な但し書きが無い場合「地域」とは中学校を設置する市町村の範囲とする。

### 3. 中学校美術科の現状

中学校美術科の3年間の総授業時数を文部大臣により告示された中学校学習指導要領で見ると、昭和33年告示中学校学習指導要領 140 時間、昭和44年告示中学校学習指導要領 175 時間、昭和52年告示中学校学習指導要領 175 時間、平成元年告示中学校学習指導要領 140~175 時間+選択教科0~70時間、平成10年告示中学校学習指導要領 115 時間+選択教科0~70時間、平成20年告示中学校学習指導要領 115 時間である。昭和52年告示中学校学習指導要領以降、改訂の毎に美術の授業時数削減が続いている。

今後中学校美術科の授業時数が増えるとは考えづらい。前文部科学省教科調査官村上尚徳によれば「平成18年頃から中学校3年生の美術は必修教科ではなく選択教科でもいいのではないかと中教審中学校部会で発言している人がいる」<sup>9</sup> のことである。中学校美術教育に携わる者だけでなく、多くの人に対し美術科教育の意義が認知されなければ、さらなる授業時数削減の恐れがある。それを避けるためには中学校美術教育の意義が多くの人々に理解される必要がある。地域の教育資源を活用した中学校美術教育は、地域の人、もの、場に働きかけるものであり「美術教育は生徒に、地域の人や物に影響を及ぼしているか」の問いに対峙した実践と研究となり得る。

## 第 2 節 研 究 の 特 色

新潟県教職員名簿<sup>10</sup> で新潟市が設置する中学校<sup>11</sup> をみると、美術教員1人以下配置学校数は1991年60校中18校（市立中学校の約30.0％）、2001年59校中34校（同約57.6％）、2011年58校中48校（同約82.8％）である<sup>12</sup>。図0-1はその推移をグラフで表したものである。中学校美術科教員1人配置の割合が10年毎に約20%ずつ上昇している。その背景には授業時数減少と少子化に伴う学級数減少があると推察できる。単純に考えると2021年頃にはほぼ全ての中学校が美術教員1人配置となる可能性があるといえよう。これは新潟市のみならず我が国の多くの地方公共団体でも類似した様相にあると考えられる。

教材研究する上で、日常的に相談、意見交換できる相手がいるのは、より良い授業作りを目指す上で有効である。近隣校の美術科教員間で協力することも可能だが日々のやりとりは困難である。教材研究は1人で進める方がやりやすいと感じる中学校美術科教員がいるかもしれない。だが、それは授業のマンネリズム化の危険性と隣り合わせである。生徒にとって魅力的な題材を開発し実践するには、他の機関、他者との協力や連携がますます必要となる。

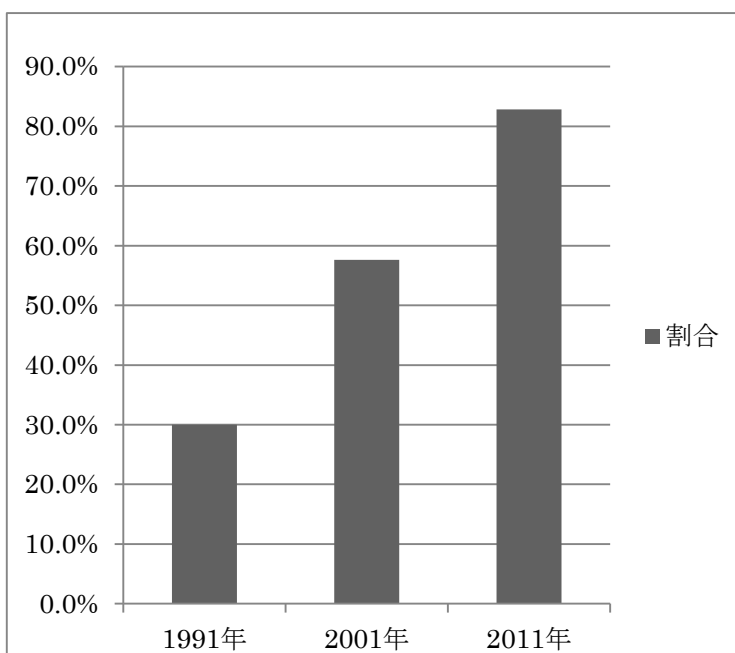


図 0-1 新潟市立中学校美術科教員 1 人配置校の推移  
(出所 新潟県教職員名簿をもとに作成)

前節で述べた「中学校美術科は生徒に、地域（人や物）に影響を及ぼしているか」の問いに対峙するとともに、中学校美術科教員が1人配置になる問題を解決する手立ての一つとして、地域の人的・物的・情動的資源を活用した美術教育のシステム開発がある。また、美術科の標準授業時数は中学校3年間でわずか115時間である。地域の教育資源を活用した美術教育を美術科の授業のセクションだけで考えるには物理的限界がある。そこで、地域の教育資源を活用した中学校美術教育のシステム開発を教育課程全体の中で実現しようとするのが本研究の特色である。

### 第3節 先行研究と本研究の新規性

#### 1. 地域の教育資源

地域の教育資源を活用した美術教育を語る前に、地域の教育資源をどのように捉えるのか整理する必要がある。

学校を取り巻く外部環境要因リストとして2005年文部科学省発行『学校組織マネジメント研修 ～すべての教職員のために～（モデル・カリキュラム）』の中で以下のものが示された<sup>13</sup>。

保護者 同窓会 地域住民 地域の自治会 公民館 議員 警察 消防 交通安全協会 病院 塾 予備校 保育所 学童保育所 幼稚園 小学校 中学校 高等学校 盲・聾・養護学校 専修学校 短期大学 四年制大学 他の学校 企業 ハローワーク 商工会議所・商工会 図書館 総合教育センター 教育研究所 子ども会 集会所 適応指導教室 児童相談所 補導委員会 社会福祉協議会 保健所 農業改良普及委員 農業共同組合 民生委員 市町村長 市町村教育委員会 教育長 教育事務所 県教育委員会 教職員組合 知事 文部科学省 マスコミ 業者 交通産業 スポーツ少年団 青少年育成会議 高体連 高文連 中体連 地域のサークル 歴史・文化 自然・風土 地域の産業

美術教育を考える上で不可欠な美術館が抜けているが、さまざまな要因が事例として挙げられている。これらの外部要因を分類すると、人的資源（保護者，地域住民，各種事業所職員，他校教員など），物的資源（民家，公共施設，各種事業所，他の学校，景観など），情動的資源（歴史・文化，祭礼・行事，自然・風土，人的・物的資源に関する情報など）の3つのカテゴリーに分けることができる。

本稿における教育資源とはこれら3つの資源を対象とする。

## 2. 学会誌における先行研究

美術科教育学会が毎年発行している学会誌『美術教育学』には過去10年（2005年～2014年）で学術論文が368編発表された。それらの中から地域の教育資源を活用した題材を扱った学術論文は8編掲載されている。「学校間の連携」，「学校と社会教育施設との連携」，「その他」を視点としながめると以下の通りとなる。なお，第28号（2007年）では35編の論文，第35号（2014年）では39編の論文が掲載されたが該当する論文はない。

### (1) 学校間の連携を題材とした研究

第26号（2005年）には30編の論文が掲載された。学校と地域の連携に関する研究はそのうち1編で，橋本忠和「幼小連携におけるカレンダーづくりの教育的効果の研究」<sup>14</sup>がある。幼稚園と小学校低学年児童の表現活動の交流によるプラス面とマイナス面を明らかにし，活動を改善する学習活動の視点を示した。幼・小間におけるカリキュラムの構成を課題として示している。小・中学校間の連携，中・高間の連携，幼・保・中学校間の連携

など異校種間の表現活動の交流によるプラス面とマイナス面を明らかにすることも今後の課題として考えられるが、本研究では同一校種間の連携に焦点を当てる。

第27号（2006年）では34編中1編、上浦千津子の研究「社会に拓かれた美術教育の可能性 3：高大連携を基軸としたアート・ワークショップの実践事例を通して」<sup>15</sup> がある。地域の商店街の活性化を目的とし、高校生と大学生が連携し、小学生を対象として実施したワークショップの実践である。美術を通しての児童・生徒・学生の社会参加によって高校生が達成感、自己肯定感、満足感、充実感を得ることができた成果を述べた。生涯学習社会を展望し今後はさらに異年齢での学びあいを一層深めていくことを今後の課題として提示している。学校教育が地域活性化に果たす役割の検討も課題として残っている。

第29号（2008年）では54編中1編が該当する。小・中学校間の連携に関する研究である宇田秀士の「図画工作・美術科教育における〈小中連携／一貫教育〉の現状と課題」<sup>16</sup> がある。美術教育における小・中学校間連携の現状と課題を学習指導要領関連出版物や文科省研究開発学校実践、美術教育実践に関する民間教育団体、研究サークルなどの出版物をもとに整理し「小・中の独自性が強調され〈連携／一貫〉意識が後退していると考えられること、研究開発学校では、この弱点を克服すべく『造形遊び』『鑑賞活動』を活かそうとする実践が試行されていること、民間教育団体の研究蓄積をふまえ、小研究グループで構想が生まれつつあること、カリキュラムの枠組み作成上の留意点として大綱化と題材配列の併記がある」<sup>17</sup> ということを示した。美術教育における小・中連携のための具体的な手立てはどうあるべきか方向性を示すことを課題に残した。

## (2) 学校と社会教育施設の連携を題材とした研究

第31号（2010年）では35編中1編、鳥賀陽梨沙の「思想を伝える視覚メディアとしての現代美術 教育的アプローチ：龍谷大学・滋賀県立近代美術館連携事業『福岡道雄プロジェクト』についての一考察」<sup>18</sup> と題する、大学と美術館が連携して行った実践題材を分析した研究がある。学生とアーティスト、学生と美術館の間でどのようなコミュニケーションが行われたのか、同時代性のある現代美術の関与が学習者の思考態度にどのような影響を及ぼすか、認知的視点から事象を描出し、教育的意味や現代美術への教育的アプローチを考察している。鑑賞教育における「アートと見る者の思考態度の関係」と「現代美術のもつ教育的・社会的見地からの可能性や発展性」について理論と実践からさらに探ることを課題として残した。この研究における実践題材は、良い偶然が重なってこそ生まれた

ことと、仕組まれていないプログラムだからこそ上限がなく発展できたとしている。教員と学芸員の協力関係を生かした題材開発の可能性を示唆している。

第33号（2012年）では、34編中1編、奥本素子による「つなげる鑑賞法を用いた博学連携の実践と評価：美術鑑賞における事前学習の効果と館内学習の効果の分析」<sup>19</sup> がある。学校による美術館訪問の事前学習のプログラム開発とその効果検証について述べられている。「鑑賞法を学ぶことで、児童は見る視点を把握し、観察という鑑賞行動が促進され、美術館では、実物を観察し、さらに実物からの発見を受け鑑賞を深めている」<sup>20</sup> とした。また、美術館での実物鑑賞への動機づけは、印刷物を使った事前学習ではなく美術館での実物の作品に接したことにより誘発されたことも示された<sup>21</sup>。鑑賞体験における美術作品の果たす役割の重要性を示唆している。美術館以外で実物を使った美術作品を活用できるようになれば、美術館訪問の事前学習がより充実したものとなる。

### (3) その他

第30号（2009年）では38編中1編、津屋有李の研究「滋賀県におけるNPOがつなぐ美術館・芸術家と学校の連携」<sup>22</sup> がある。NPO法人が学校と美術館と芸術家の橋渡し役となり実践した連携授業の意義について述べた。津屋は学校と美術館の「連携授業は美術館や美術作品という『物』との出会いだけでなく、学芸員や芸術家や文化ボランティアなどの『人』との出会いによる交流に大きな意義がある」<sup>23</sup> との見解を見出している。学校と美術館の連携事業を担当するコーディネーター養成を今後の課題とした。

第32号（2011年）では、40編中1編、柳沼宏寿による研究「シネリテラシーの教育的意義：シネリテラシーフェスタ in 新潟の取り組みを中心に」<sup>24</sup> がある。大学が地域の映画館と連携し中学校、高等学校を巻き込んだ映画祭「シネリテラシーフェスタ in 新潟」を企画運営し、映像表現発表の場を設定した。「映画のメディアとしてのメッセージ性が子どもの社会的自我形成に関与していることや、子どもの表現を学校・家庭・社会の三者が支えている構図に教育学的意義がある」<sup>25</sup> とした。美術科の学びとしてのリテラシー構築を今後の課題とした<sup>26</sup>。

過去10年間の美術科教育学会の学会誌『美術教育学』に掲載された地域の教育資源を活用した題材を扱った学術論文については、学校間の連携（異校種間の連携）、学校と社会教育施設の連携、学校とその他の機関との連携に関するものというようにわけられる。



### 3. 専門書・研究紀要における先行研究

美術科教育学会学術誌『美術教育学』以外にも地域の教育資源を活用した研究が書籍として発表されている。それぞれがどのような研究成果をあげ、課題を残しているか、本研究とどのような関連を持つか記す。

木岡一明編集『学校を取り巻く環境の把握と地域協働』<sup>27</sup> では学校での教育活動全般を念頭に置いた地域資源の発掘、開発、活用をはかる上での留意点や課題点が松本敏<sup>28</sup> や五島政一<sup>29</sup> らによってまとめられている。美術教育に特化したものではないが地域の教育資源を活用した中学校美術教育を考える上で示唆に富むものである。

『地域文化と美術教育』<sup>30</sup> では、美術教育における地域と学校の連携に関する理論的研究として山田一美「地域文化の個性と交流を秘めた造形プログラム」がある。地域が持つ文化や素材を小・中学校の美術教育に取り入れることの意義を示した。山田は地域の教育資源を活用した題材開発やシステム構築を今後の課題として提示している。それを踏まえ、本研究では中学校美術教育における題材開発やシステム構築に焦点を当てた具体的な提案を行う。

歴史的研究として、学校と美術館の連携に関するものがある。ふじえみつるは「美術教育を軸とした学校と美術館の連携について」<sup>31</sup> の中で1980年代後半からの学校が美術館に寄せる関心の高まり、1990年代から名古屋市美術館などで始まった小・中学生を対象とした学校と美術館の連携事業をもとに学校と美術館の連携の歴史的変遷を概観している。実践的な部分での歴史的変遷だけでなく、戦後の教育法制度や政策からみた学校と美術館の連携に関する位置付けを整理し、今後の学校と美術館の連携のあり方を探る必要がある。

実践的研究として法本智明「地域素材を活かした美術教育」<sup>32</sup>、黄瀬重義「『わたしらしさ』を支える地域文化と造形活動」<sup>33</sup> がある。法本は地域と隔絶化してしまった学校や生徒を、地域にもどすことをねらいとし島根県溝口町にある法本の勤務していた中学校で、地元で親しまれてきた伝統的な遊びや伝説をもとにした題材開発と実践を行った。住民が語り継いできた伝説や遊びなどの情動的資源をもとに題材開発する際に学習のねらいをどこに置くか、活動を通してどのような成果がもたらされるか述べている。小学校における地域の教育資源を活用した美術教育の可能性について「地元の風景」、「地元につながる伝統的絵画」、「地域の問題」、「地元の産業」をもとにした自身の実践的研究を報告している。小学校における地域の教育資源を活用した美術教育の可能性に触れた研究であり、中学校でのシステム構築を考える際の手がかりとなる。本研究では、政令指定都市

など人口移動の多い地方公共団体や民話などの言い伝えのない都市部等の中学校で情動的資源を活用した題材の実現の可能性を探る。

#### 4. 本研究の新規性

先行研究では，どのようにすれば地域の教育資源を活用した美術教育が可能となるのか，その方法や題材が成立する要因を示した研究が管見の限り見当たらない。また，1つの学校における複数の題材の開発を提示したものもない。そこで，本研究では1つの中学校を中心に据えたときの，地域の教育資源を活用した中学校美術教育の多様な題材開発の可能性を探ることとする。そのことを通して地域の教育資源を活用した中学校美術教育が成立するための方法と要因を明らかにする。これが本研究の新規性である。その際，汎用性を高めるため多くの予算をかけることなく，また新たな行事を増やしたり校内の組織を立ち上げたりせずとも実現できるよう留意する。

### 第4節 本研究の構造

本研究の構造を図で示すと図 0-2 となる。

第1章では，学習指導要領や新潟市内の実践例と現行教科書をもとに地域の教育資源を活用した中学校美術教育の歴史と現状を探り研究の方向性を示す。

地域の物的資源のひとつである事業所を活用した事例として，第2章（研究その1）では地域の事業所との連携を服飾店における実践を通して考察する。生徒が美術を身近なものと感じるようになるとともに，ここでの体験を通して美術の授業とどのようなつながりが生じるのか検討する。

地域の情動的資源である各中学校が保

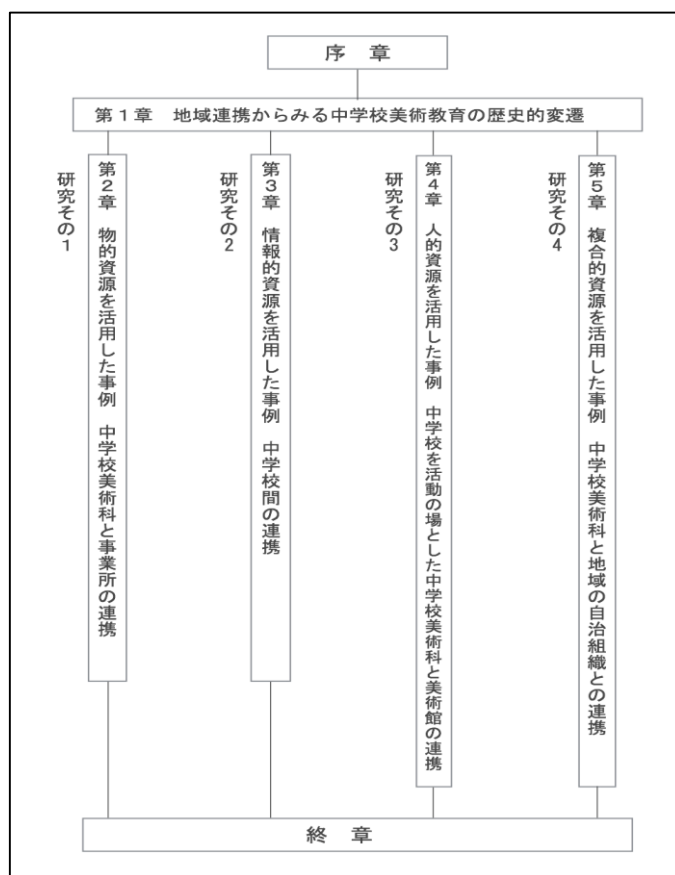


図 0-2 本研究の構造図  
（出所 筆者作成）

有する美術作品に関するデータを活用した事例として、第3章（研究その2）では、同一地方公共団体内の中学校が所蔵する美術作品に関する情報共有がもたらす可能性を示す。

地域の人的資源である美術館学芸員を活用した事例として第4章（研究その3）では、中学校美術科教員と学芸員の人的ネットワークを活用した題材開発の可能性を検討する。中学校美術科教員が持つ強みと美術館学芸員が持つ強みを活用した題材開発の可能性を探る。

複合的な地域の資源（人的資源として地域住民，物的資源として美術活動の場である地域，情動的資源として地域が抱える問題）を活用した事例として第5章（研究その4）では、中学校と地域の自治組織が連携した活動を通してどのような意義があるのか考察する。地域の美的環境が改善されるだけでなく，地域の問題が解決され地域の人と人のつながりが深まるのかどうかということに焦点を当てる。

最終章では全体を通しての結論として地域の教育資源を活用した中学校美術教育のシステム構築の方法と要因，その際の生徒の学びと中学校の教育課程の構造はどのようなものが想定されるのかとともに，今後の展望を提示する。

# 第1章 地域連携からみる中学校美術教育の歴史的変遷と現状

## 第1節 研究の目的と研究の方法

平成18(2006)年改正教育基本法第13条，平成20(2008)年告示中学校学習指導要領等で中学校は教育目標を達成するために開かれた学校づくり，地域とともにある学校づくり，地域の教育資源の活用が求められている。学校，家庭，社会教育施設など地域のさまざまな組織が連携・協力すればより良い教育活動が実現するのは容易に予想できる。それは中学校美術教育においても同じである。だが，中学校美術教育と地域の関連を踏まえた学習活動のあり方はまだ手探りの状況にあり，現段階ではシステム構築が喫緊の課題である。

地域の教育資源を活用した中学校美術教育のシステムを考える上で，まずは我が国の中学校美術教育が地域とどのような関わりを求めてきたのか（或いは求められてきたのか），歴史的変遷を確認する作業が必要である。そこで，本章では中学校美術科が地域（美術館等の社会教育施設を含む）とどのような関わりを求められてきたかということをもとに，両者の今後のあり方を示すのを目指すこととする。

具体的には昭和22年学習指導要領図画工作編・試案（以降，昭和22年版と記述），昭和26年改訂版中学校高等学校学習指導要領図画工作編・試案（以降，昭和26年版と記述），昭和33年告示中学校学習指導要領第2章第6節美術（以降，昭和33年版と記述），昭和44年告示中学校学習指導要領第2章第6節美術（以降，昭和44年版と記述），昭和52年告示中学校学習指導要領第2章第6節美術（以降，昭和52年版と記述），平成元年告示中学校学習指導要領第2章第6節美術（以降，平成元年版と記述），平成10年告示中学校学習指導要領第2章第6節美術（以降，平成10年版と記述），平成20年告示中学校学習指導要領第2章第6節美術（以降，平成20年版と記述）を概観し，学習指導要領にみる地域を活用した中学校美術教育の歴史的変遷をたどる。その後，美術館・博物館を含む地域と連携した中学校美術教育のあり方を提示したい。

昭和22年版，昭和26年版は試案として示されたものであるため現在の指導要領のような法的拘束力がなかった。だが，その後の学習指導要領が作成される上で起点となったものであるため研究上取り上げることとする。

また、学習指導要領では地域の範囲を示していないが、本章では中学校を設置する地方公共団体の範囲内とする。

## 第2節 学習指導要領の変遷

本節では、各学習指導要領における根幹となる学習の方法、地域との関連、美術館・博物館との関連を視点とし分析する。学習指導要領を概観した後に「地域との関連」、  
「美術館・博物館との関連」を、それぞれの学習指導要領がどのように扱ってきたのか述べることにする。結果を表としてまとめたものが表 1-1 である。

表 1-1 各学習指導要領の構造 (筆者作成)

学習指導要領	学習方法	地域との関連	美術館・博物館との関連
昭和22年版	問題解決学習	地域活用提案期	先・美術館・博物館活用期
昭和26年版			美術館・博物館活用提案期
昭和33年版	系統学習	学校と地域隔絶期	学校と美術館・博物館隔絶期
昭和44年版			
昭和52年版			
平成元年版	問題解決学習	地域連携模索期	美術館・博物館活用始動期
平成10年版			
平成20年版			

### 1. 学習指導要領の概観

昭和22年版は、戦後間もなくアメリカ合衆国バージニア州のコース・オブ・スタディーの影響を受け作成された<sup>34</sup>。全教科を通じ経験主義や単元学習が重視された内容となっているのが特徴である。それを、さらに精緻化したものが昭和26年版である<sup>35</sup>。先に述べた通り両者とも試案として提示されたもので、現行の学習指導要領と違い法的拘束力が無く、各学校・教員の裁量の幅が大きかった。

昭和33年8月学校教育法施行規則の一部が改正され、学習指導要領は教育課程の基準として文部大臣が告示するものとなり、昭和33年版以降の学習指導要領に法的拘束力が生じた。昭和33年版は経験主義（単元主義）への偏り過ぎ、地域間学力差の問題、基礎学力や

科学技術教育の振興の必要性を踏まえ系統性を重視した内容となる。

昭和44年版は科学技術の発達，経済・社会・文化などの急激な進展の影響を受け，昭和33年版よりもさらに高度な学習内容となった。

昭和52年版は「学校生活を全体としてゆとりのあるものにすることが必要である」<sup>36</sup> との答申を受け，教科の学習内容が削減されたが，それまでの系統学習を踏襲している。

平成元年版では，個性をいかす教育を目指し改訂された。教科の学習内容がさらに削減され，「道徳教育の充実」や「社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成」の文言が登場する。

平成10年版は「自ら学び自ら考える力」，「各学校が創意工夫を生かし特色のある教育，特色ある学校づくりを進めること」などを改訂のねらいとして示された。「総合的な学習の時間」が新設され，問題解決学習が再び登場する。学校完全週5日制の実施に伴う学習内容と授業時数の大幅な削減があり，それまで選択教科とされてきた英語が必修教科となるとともに，美術や音楽など一部の必修教科の授業時数削減，選択教科の授業時数増加があった。

平成20年版はいわゆる『ゆとり』か『詰め込み』ではなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成の両方が必要<sup>37</sup>，『生きる力』を育むため、学校だけではなく、家庭や地域など社会全体で子どもたちの教育に取り組む<sup>38</sup> を改訂の基本的な考え方とし作成された。「総合的な学習の時間」は大幅な時数削減がなされ，国語，数学，理科，社会，英語，保健体育の時数が増えた。平成10年版で削減された必修教科の美術の時数は回復することなく，選択教科の美術は消滅したため，美術科は実質的な授業時数減となった。

戦後我が国の中学校学習指導要領は問題解決学習から系統学習へのシフトが起こり，約40年の系統学習の期間を経た後に再び問題解決学習が見直される動きが出ている。

## 2. 地域との関連について

### (1) 昭和22年版

昭和22年版における美術の教科名は第1学年から第9学年の中で図画工作として位置づけられている。そのうち第7学年から第9学年が現在の中学校第1学年から第3学年に該当することとなる。

昭和22年版では地域（学校外）を活動の場とする題材例として「日本間の室内設備・洋間の室内装飾・教室その他の室内設備・住宅の間取りと、敷地内の諸施設との計画・作品展覧会の施設計画・その他の展覧会の施設計画・学校博物館の施設計画・郷土室の施設計画・屋外の諸展示計画・商品の陳列・ショーウィンドの計画展示など」<sup>39</sup> が示された。ポスター制作など美術作品そのものに特化した制作にとどまるのではなく、美術作品も含め空間全体を総合的にデザインする題材となっているのが特徴である。「住宅」，「郷土室」，「商品の陳列」，「ショーウィンド」の文言に象徴されるように学校外での活動を意識している題材が少なからず存在する。

また第9学年（中学校第3学年に相当）の生活と美術の関わりでは「現在のわれわれの家庭生活や，社会生活において，絵画・彫刻その他の造形芸術がいかに関係されており，生活とどんな関係をもっているかについて調べ，われわれの生活から，いっさいの美術を取り去ったならば，その結果はどうなるであろうかについて研究する」<sup>40</sup> と記されている。ここでも，美術作品そのものを取り上げて学習するのではなく，学校，家庭，地域の実生活場面を構成する一部として美術作品を位置づけ，その存在意義について探求的に学習を進めるよう構成されている。高度な学習内容といえるが，義務教育最終学年で生活と美術の関わりを探求的に学ばせようとしている点は興味深い。

## (2) 昭和26年版

昭和26年版でも教科名は図画工作とされた。教育課程上の位置付けは現在と同じ中学校第1学年から第3学年となる。昭和26年版では地域の活用を求める記述を昭和22版よりさらに多く見つけることができる。

中学校図画工作科の教育目標は2つ設定されており「生徒を個人としてできるだけ完成する助けとして」<sup>41</sup> と「生徒を社会人および公民としての完成の助けとして」<sup>42</sup> とした。後者の目標にはさらに具体的な諸目標が示され，その中の一つとして「創造的な表現力を，社会生活に活用する技能を発展する」<sup>43</sup> した。ここでは「創造的な表現力を，家庭生活の美化・改善に活用する技能を発展すること」<sup>44</sup> ，「創造的な表現力を，地域社会の美化・改善に活用する技能を発展すること」<sup>45</sup> とし，家庭，地域社会を場とした美術の表現活動の具体的な目標が提示された。

絵画表現の学習のねらいは「描画の学習によって得た表現力を，個人生活や社会生活に役立てるようにする。たとえば描画能力を余暇を有効に過ごす助けとするとか，描画によ

って養われた美的情操を、家庭生活・学校生活・社会生活などの環境の美化・改善に役立てるようなものをさす」<sup>46</sup> とされ、ここでも家庭・学校・地域での実生活との関わりを求める記述がある。

図案の学習のねらいは「だれにでも必要な程度の図案の技能を発展させ、それを实际生活に適用する能力を発達させる」<sup>47</sup> である。第3学年では地域の公共の場をデザインするとともに、地域に活動の場を求める題材として、「小公園緑地帯などの設計」<sup>48</sup> ，「地域社会の美化改善などの中から地域の実情に応じて選ぶ」<sup>49</sup> が提示された。

昭和26年版に示された「配置配合」では生活を美化するための物の配置のあり方を学習するものがある。生活場面の中で効果的な美術作品の配置を考えるだけでなく、会議のための座席配置及び花の展示について、生活場面における機能と美の両立をめざした配置のあり方を探求する。第3学年では「地域社会の環境の改善美化のために、いろいろな施設や道路・住宅その他のものをどのように配置配合するかの研究」<sup>50</sup> が設けられている。題材例として「小公園や緑地帯，こども遊園地などの計画，できればその模型」<sup>51</sup> ，集落の「環境の改善のための計画，できればその模型」<sup>52</sup> が挙げられている。ここでも、地域と関連した題材が設定されている。

昭和26年版の義務教育最終学年ではそれまでに習得した美術に関する諸能力を活かし地域社会を美的観点で改善するための学習で締めくくられる。

### (3) 昭和33年版

昭和33年版では第3学年の目標の一つに「地域社会の環境美化について関心をもたせる」<sup>53</sup> の記述がある。だが、地域を活動の場とする学習，或いは美的観点で改善する学習はほぼ消滅した。わずかにA表現の「美術的デザイン」の物の配置配合の中に「展覧会展示の配置配合，地域社会の環境美化など，適宜選んで指導する」<sup>54</sup> や指導上の留意事項に「地域社会の環境の実態の上に立って，これらを美化する基本的な事項を説明したり，できればこれに関する模型などを共同製作させたりして，指導することも考えられる」<sup>55</sup> の記述があるのみである。

昭和33年版では問題解決学習から系統学習への転換と，技術・家庭の「技術」分野の創設により，美を学ぶ教科（美術）と機能や技法を学ぶ教科（技術）へ細分化された。

### (4) 昭和44年版



昭和44年版では昭和33年版以上に地域との関連の薄い内容となっている。第2学年の鑑賞の中の「郷土の美術品に関心が高まること」<sup>56</sup> にかろうじて地域との関連をにおわせる記述を見つけることができる。昭和33年版まで存在した地域を活用したり、題材としたりする学習は消滅し、系統学習の影響がさらに色濃く反映されている。

#### (5) 昭和52年版

昭和52年版では昭和44年版の第2学年の鑑賞に記された「郷土」の文言も消滅し、目標及び内容の中において、地域との関連に関する記述が完全に消滅した。昭和44年版よりもさらに地域と中学校の距離が開き、美術室内で活動が完結できる学習内容となった。

#### (6) 平成元年版

平成元年版では昭和52年版同様、目標及び内容の中には地域との関連に関する記述がない。ただし、指導計画の作成と内容の取り扱いの中に「表現のための材料などについては、地域にある身近な材料なども取り上げるようにすること」<sup>57</sup> に地域の文言が表れ、学区内で石や植物の実などを採集し表現材料とする事例が出てきた。中学校と地域のつながりが再現する兆しがみえる。

#### (7) 平成10年版

第2学年及び第3学年A表現では「身近な環境について、安らぎや自然との共生などの視点から心豊かなデザインをすること」<sup>58</sup> と記された。地域の文言は使用されていないが、「身近な環境」を地域ととらえることも可能である。

さらに、指導計画の作成と内容の取り扱いでは「表現の材料や方法などについては、地域の身近なものや伝統的なものも取り上げるようにすること」<sup>59</sup> とされた。平成元年版では表現材料にとどまっていたが、地域を活動の場や題材などとして活用することが示される。

また、選択教科としての美術（以降、選択美術と表記）では「生徒の特性等に応じ多様な学習活動が展開できるよう、第2の内容その他の内容で各学校が定めるものについて、課題学習、伝統工芸など地域の特質を生かした学習、表現の能力を補充的に高める学習、創造的・独創的な芸術表現を追求する発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする」<sup>60</sup> とあり、地域を活用した学習の必要性が明示された。

選択美術は実質的に授業者の裁量により指導計画を立案，実践することが可能となった。

平成元年版では必修教科の美術は第2学年で年間35～70時間であったものが，平成10年版では35時間となった。それでも美術をより多く学習したい生徒は必修と選択を合わせ，第2・3学年で週あたり最大で3時間学習できた。

## (8) 平成20年版

第1学年B鑑賞では「身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し，そのよさや美しさなどを感じ取り，美術文化に対する関心を高めること」<sup>61</sup>（下線，筆者加筆），第2学年及び第3学年B鑑賞では「美術作品などに取り入れられている自然のよさや，自然や身近な環境の中に見られる造形的な美しさなどを感じ取り，安らぎや自然との共生などの視点から，生活を美しく豊かにする美術の働きについて理解すること」<sup>62</sup>（下線，筆者加筆）に地域と関連した学習を求める文言を見いだすことができる。

A表現では「表現の材料や題材などについては，地域の身近なものや伝統的なものも取り上げるようにすること」<sup>63</sup>と記された。平成10年版では「表現の材料や方法」とされていた部分が「表現の材料や題材」へ変更され，地域を題材に取り上げることが加わる表記がなされた。

## 3. 美術館・博物館に関する記述

地域の活用，連携・協力を考える上で社会教育施設である美術館・博物館が果たす役割は大きい。本項では中学校学習指導要領第2章第6節美術（昭和22年版・昭和26年版は学習指導要領図画工作編（試案）第七・八・九学年）の中で，中学校美術科が美術館・博物館とどのような関わりを持つことが求められてきたか探る。

### (1) 昭和22年版及び昭和26年版

昭和22年版には美術館・博物館に関する記述がない。美術館・博物館の文言が登場するのは昭和26年版以降となる。

昭和26年版第Ⅱ章，第2節図画工作科では，美術館・博物館に関する記述がみられるようになる。

教育課程を編成する上で留意することとして「美術館・博物館をなるべく多く見る機会を与えるように，また適切な鑑賞指導が行われるように努めなければならない。ことに地

方で鑑賞指導に不便なところでは、遠足・旅行などを利用して、これらの施設を生かして鑑賞の指導をすることがよい」<sup>64</sup> が示された。また、付録4には美術館・博物館その他に東京国立博物館、京都国立博物館、国立博物館附属美術研究所など22の美術館・博物館その他（その他には神社、寺院などの宗教施設）が所在地とともに紹介されている。

## (2) 昭和33年版

指導計画の作成および学習指導の方針には「美術館、博物館、美術展覧会などの見学などに便利のよい地域や機会があるときは、適当にこれらを利用することが望ましい」<sup>65</sup> とされた。「望ましい」の表記があるので、ここでは積極的な美術館・博物館の活用を求めている。

地方中核都市の一つ新潟市内を例に過去の美術館の設置状況をみると新潟市美術館開館が昭和60年、新潟市新津美術館開館（開館当時は新津市美術館）が平成9年、新潟県立万代島美術館開館が平成15年である。昭和33年当時、新潟市内には公立美術館が存在せず、美術館を活用した授業実践は困難な状況であった。これは、新潟市内だけでなく我が国の多くの地方都市に当てはまるといえよう。美術館を活用した中学校美術の授業が可能だったのは東京都心部や京都市など都市部にある学校に限定されていた。美術館・博物館の積極的活用が求められなかったのは、我が国の美術館・博物館の設置状況が乏しかったからである。

## (3) 昭和44年版

指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱いに「第2学年と第3学年においては、我が国および諸外国のすぐれた絵画、彫刻、工芸、建築などの作品から、両学年を通して計画的に選ぶこと」<sup>66</sup> と記された。昭和44年版では、美術館・博物館の文言が消滅しており、教科書や副教材に掲載された印刷物やスライドを使うことで効率的な学習を行うことを目指した。

## (4) 昭和52年版

昭和44年版同様、昭和52年版でも美術館・博物館の文言は無い。学習の内容として、美術作品を大切にすることや、関心をもつこと、時代、民俗、風土などの違いの良さや美しさ、国際理解や親善に果たす役割について理解することが記された。だが、そのための手

だてとして美術館・博物館の活用は言及されていない。

#### (5) 平成元年版

過去2回（昭和44年版，昭和52年版）と同様，平成元年版も美術館・博物館の文言は登場しない。指導計画の作成と内容の取り扱いに「校内の適切な場所に鑑賞作品を展示し，随時，鑑賞できるよう配慮する必要がある」<sup>67</sup>とされた。美術作品を鑑賞する場を美術館等の社会教育施設に求めるまでには及んでいないが，実物の作品を活用した教育活動を求める動きが出て来た。昭和44年版と昭和52年版にはなかった点である。

#### (6) 平成10年版

平成10年版の特徴として各学年とも適切かつ十分な授業時数を「B鑑賞」の指導に配当することが求められた。指導計画の作成と内容の取扱いでは「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」<sup>68</sup>とされた。「総合的な学習の時間」の新設に象徴されるように，体験的な学習が重視されるようになったことの影響が美術科にも及んだものと考えられる。学習指導要領に美術館・博物館の文言が登場したのは昭和33年版以来となる。

#### (7) 平成20年版

平成10年版同様，平成20年版でも指導計画の作成と内容の取扱いにおいて「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」<sup>69</sup>とされた。記述内容は平成10年版と同じだが，平成10年版での記載順位が5個あるうちの5番目だったものから平成20年版では5個あるうちの2番目へと上位へ移動した。これは，中学校美術の授業において美術館・博物館等の活用をより重視する動きととらえることができる。

### 第3節 地域の教育資源を活用した中学校美術教育の現状

本節では，近年，地域の教育資源を活用した中学校美術教育でどのような実践が行われているか探るために，新潟市に目を向けた事例として新潟市中学校教育研究会美術部会が発行している『指導のアイデア集』<sup>70</sup>から2010年～2012年の3年分，全国に目を向けた事例として教科書（光村図書出版，日本文教出版）に掲載された事例をもとに探る。

## 1. 新潟市の事例

(1) ～ (3) は2010年，(4) ～ (9) は2011年，(10) ～ (11) は2012年に『指導のアイデア集』に掲載された事例である。

### (1) 事例1「ふるさと新潟を題材にした切り絵版画 ～身近な美しさを発見しよう～」

#### 新潟市立葛塚中学校 3学年美術

自分たちの住む地域の風景に目を向け，休日等を活用し生徒各自が美しいと感じる風景を写真で撮影し，それをもとにステンシル版画で表現する題材である。物的資源（地域の風景）を活用した題材。

### (2) 事例2「ふるさと矢川での灯籠流し」 新潟市立岩室中学校 全校生徒，総合的な学習の時間

地域観光協会（岩室温泉観光協会）の依頼により，校区内を流れる矢川に生徒たちが作った灯籠を流したインスタレーション活動を行った。1年目は全校生徒による活動を行い，2年目は地域住民や観光客も巻き込み実施した。物的資源（地域の風景・場）を活用した題材。

### (3) 事例3「蛸祭りの案内灯籠作り」 新潟市立岩室中学校 美術部

事例2同様，地域の観光協会の依頼により，美術部が制作した灯籠を林道の通り道に設置する。物的資源（地域の風景・場）を活用した題材。

### (4) 事例4「地域の風景のスケッチ」 新潟市立横越中学校 美術部

自分たちの学区のいいところをスケッチで表現する。物的資源（地域の風景）を活用した題材。

### (5) 事例5「木津のサンバイシ神楽（地域の祭り）をテーマにした絵画制作」 新潟市立横越中学校 美術部

学区内の祭りをテーマとした絵画制作。情動的資源を活用した題材。

**(6) 事例 6 「揚水機場のPR看板制作」 新潟市立横越中学校 美術部**

新潟県新潟地域振興課から新しく完成した揚水機をPRするための看板制作の依頼が美術部にきた。そこで、部員で亀田郷（地元）の農産物について調べ、揚水機場に出かけ取材をした後に、部員でアイデアを出し合い制作した。情動的資源（地域の農産物に関する情報）を活用した題材。

**(7) 事例 7 「いわむろのみらい in 矢川バージョン」 新潟市立岩室中学校 美術部＋有志生徒**

学区内を流れる矢川を題材とした共同制作。矢川を「ニジマスの住める川に」をテーマにしたニジマスをモチーフとした巨大なオブジェの制作。教師がデザインしたものをもとに美術部を中心とした有志の生徒たちで完成させ矢川に展示する。情動的資源を活用した題材。

**(8) 事例 8 「体育祭マッチフラッグの制作と鑑賞」 新潟市立大形中学校 3 学年美術**

本稿第 4 章参照。地域の物的資源（地域住民から寄付してもらった布）と人的資源（美術館学芸員）を活用した題材。

**(9) 事例 9 「大風 T シャツのデザイン」 新潟市立白根第一中学校 2 学年美術**

大風合戦（地域の伝統行事）を題材とし、以下の 3 種類の中から各生徒が自分の興味のあるものを選択し T シャツのデザインをした。

①「チームで着る T シャツのデザイン」

②「観光 T シャツ」

③「その他、自分の思いを表すもの」

デザインしたものは白地の T シャツにプロジェクターでデザインを映し出し、実際に着た場合の様子をイメージ、鑑賞活動を行う。情動的資源を活用した題材。

**(10) 事例 10 「土からの記憶、そして再生」 新潟市立亀田西中学校 美術部＋有志生徒**

水と土の芸術祭 2012 市民プロジェクトの一環として地域のボランティアの方々の指導を受けながら、地域の歴史をテーマとして制作した。土や藁を使ったオブジェの制作をした後に旧町役場に展示された。その後、町役場とともに取り壊される。物的資源、人的

資源を活用した題材。

#### (11) 事例11「うちワッショイプロジェクト」 新潟市立関屋中学校 美術部

新潟を元気に，新潟の祭りと残したい自然をイメージしたものをデザインし，うちわに描いた。情報的資源を活用した題材。

## 2. 全国の事例

本節では全国に目を向け，地域の教育資源を活用した事例を教科書から探ることとする。

(1) ～ (12) は光村図書出版株式会社の中学校美術の現行教科書，(13) ～ (20) は日本文教出版株式会社の中学校美術の現行教科書に掲載されている事例である。

#### (1) 事例12「心安らぐわたしの場所」<sup>71</sup>

自分の好きな場所を探してスケッチする。教科書に紹介されている生徒作品は校地内のスケッチのみ紹介されている。だが，地域に目を向けスケッチすることも可能である。物的資源（地域の環境）を活用した題材となりうる。

#### (2) 事例13「見つけた，触れた，ひらめいた！」<sup>72</sup>

地域内で拾った材料（流木，貝殻，葉っぱなど）をもとに，彫刻作品に仕上げる題材。5種類の生徒作品が紹介されている。物的資源（自然物など）を活用した題材。

#### (3) 事例14「体験しよう！ 美術館」<sup>73</sup>

美術館の事業や企画展などを通して，美術館とはどのような場所なのかについて説明している。長崎県美術館（長崎県）や金沢21世紀美術館（石川県）のように地方の美術館も紹介されている。美術館を活用した授業の事前学習として活用できる内容となっている。物的資源（美術館）を活用した題材となりうる。

#### (4) 事例15「ともにつくる喜び」<sup>74</sup>

校地内や地域を活動の場とした共同制作である。制作手順は下絵をみんなで検討し，その後着色するところを分担し完成させる。物的資源（地域の環境）を活用した題材。

**(5) 事例16「メッセージを伝えるポスター」<sup>75</sup>**

ポスターを通して、社会（地域）に対し、自分のメッセージを伝える題材。地域が抱える課題や問題などの情動的資源を活用した題材となりうる。

**(6) 事例17「環境とともに生きる造形」<sup>76</sup>**

野外彫刻（作品）制作についての題材である。実際に設置するのは予算的にも時間的にも困難であるため、教科書には生徒によるアイデアスケッチが掲載されている。物的資源（地域の環境）を活用した題材。

**(7) 事例18「情報を整理して伝える」<sup>77</sup>**

校地内や地域のさまざまな施設や案内をピクトグラムで表示する題材。さまざまな公共施設をイメージできるデザインで表現する。教科書には生徒の理科室を表すピクトグラム作品が事例として掲載されている。情動的資源（地域のさまざまな建物物に関する情報）を活用した題材となりうる。

**(8) 事例19「暮らしやすい町づくり」<sup>78</sup>**

建築物のデザイン、幼稚園の園庭のデザイン、公共交通機関のデザインの鑑賞を通して、暮らしやすい町づくりについて考える題材。物的資源（建築物等）を活用した題材。

**(9) 事例20「いろいろなスケッチ」<sup>79</sup>**

校地内や地域に目を向けスケッチする題材。地域の風景をスケッチした生徒作品が事例として掲載されている。物的資源（地域の風景）を活用した題材。

**(10) 事例21「美術館へ行ってみよう」<sup>80</sup>**

美術館とはどのような場所なのかについて解説している。美術館を活用した授業を実施する事前学習として活用できる。物的資源（美術館）を活用した題材。

**(11) 事例22「『和風』を味わう」<sup>81</sup>**

日本の伝統的な文様や装飾について学ぶ題材。身近な地域に目を向け風土に根ざした和



の美的文化を探ることも例示している。情報的資源（祭り，行事）を活用した題材。

**(12) 事例23「環境を演出するアートたち」<sup>82</sup>**

さまざまなパブリックアートを紹介している。地域に存在するパブリックアートに目を向け、その場所がどのように演出されているか考えることを提案している。情報的資源（地域の情報）を活用した題材。

**(13) 事例24「風景に思いを込めて - 身近な風景を見つめ，表わそう -」<sup>83</sup>**

身近な風景を題材とした絵画表現である。自分たちの住む地域に目を向けた作品が掲載されている。物的資源（地域の環境）を活用した題材。

**(14) 事例25「心触れ合う場」<sup>84</sup>**

公園や広場など公共の空間に目を向ける題材である。その空間をデザインし，紙粘土や発泡スチロールなどの材料を使い，模型を制作する。情報的資源（地域の情報）を活用した題材。

**(15) 事例26「心に響く形や色」<sup>85</sup>**

公共の場を美しく演出する環境デザインの学習である。病院の壁を飾る絵画や壁自体に絵画が描かれている事例が紹介されている。物的資源（地域の場）を活用した題材となりうる。

**(16) 事例27「伝え合うかたち」<sup>86</sup>**

校地内や地域のさまざまな施設や案内をピクトグラムで表示する題材。医療現場，動物園などの公共の場で活用されているピクトグラムが事例として掲載されている。物的資源（地域の場）を活用した題材となりうる。

**(17) 事例28「個性が響き合う造形」<sup>87</sup>**

設置する場の環境を生かした作品を制作する。土地の歴史や土地から受け取るイメージをもとにした生徒作品が事例として掲載されている。情報的資源（地域の歴史）や物的資源（地域の場）を活用した題材。

(18) 事例29「受けつぎつくる人の姿」<sup>88</sup>

全国各地の伝統工芸を紹介している。地域の伝統工芸などを探求する活動の事前学習として活用できる。情報的資源（地域の伝統工芸などについての情報）を活用した題材となりうる。

(19) 事例30「自然と共に生きる」<sup>89</sup>

自然との共生を視点とし、自分たちの街や建築物のあり方について考える。デザインしたものを模型で表現する題材。情報的資源（地域の住環境についての情報）を活用した題材。

(20) 事例31「街の中に息づくアート」<sup>90</sup>

公共の場に設置された美術作品の役割を考えたり（鑑賞）、設置することを想定し習作を制作したり（表現）する題材である。情報的資源（地域のパブリックアートに関する情報）を活用した題材。

## 第4節 考察

### 1. 地域との関連の歴史

昭和22年版から平成20年版までの8つの学習指導要領を「地域との関連」で分類すると3期に分けることができる（表 1-1）。本項ではそれぞれの時期を概観する。

#### (1) 地域活用提案期

地域活用提案期は昭和22年版、昭和26年版の時期が該当する。

家庭や地域など実生活場面の中に課題を求め、美的観点で課題解決を目指す学習活動が盛り込まれた。とりわけ昭和22年版及び昭和26年版は経験主義、単元学習の性格を色濃く反映した内容となっている。美術（図画工作）の学習目標、学習内容について生徒が自分たちの生活と直結しているのを実感できる教材例が豊富に紹介されている。

図案、配置配合、工作、工芸だけでなく描画（彫刻は無し）においても家庭、地域の生

活場面で活用されることが想定されている。学校と家庭、地域とのつながりの中で学習活動が展開されることが求められ、学校と地域の連携が求められる現行の中学校指導要領に通じる部分である。

昭和22年版、昭和26年版は戦後間もない時期に提示されたものである。この時期は教育課程や教育の内容が模索されていた時期である。また、現在と比べると1クラスあたりの生徒数が多く（「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」制定直前の昭和33年の各都道府県の基準の平均では1クラスあたりの生徒数は60人であった）<sup>91</sup>，個に応じた指導が必要となる問題解決学習を1人の教員で60人を相手に実施するのは困難である。

以上のことから現実的には美術（図画工作）の授業では地域を活用する学習活動が展開されたとしても、それは極めて稀なケースといえる。この時期に学習指導要領に示された、地域を活用した美術の授業の題材は実質的には提案型である。

## (2) 学校と地域隔絶期

中学校学習指導要領では昭和33年版、昭和44年版、昭和52年版、平成元年版の時期が学校と地域隔絶期に該当する。

昭和33年版では教科全体が系統学習へシフトする動きが出てきた。美術では地域社会の環境を美化する基本的な事項を説明したり、可能であれば模型を共同製作したりするなど実生活場面に即した課題に取り組む題材が僅かに残っているが、地域を活用した題材の多くが消滅した。

我が国の高度経済成長や科学技術の急激な進展にともない、良質、均質な知識・技能を身につけた人材（労働力）が大量に求められるという社会的背景が中学校美術科にも及んできたといえよう。限られた時間の中で中学校美術教員が定めた学習のねらい（多くの知識・技能）を生徒が習得するために、効率性を求める学習形態となった。中学校美術の学習内容は絵画、彫塑、デザイン、工芸、鑑賞に細分化され、それぞれが独自の学習目標を持つこととなった。デザインや工芸の学習では実生活と関連づけた学習を見いだすことができるが、地域社会との関わりを意識的に取り入れた学習内容となっていない。

昭和52年版、平成元年版では絵画、彫塑、デザイン、工芸をA表現とし、鑑賞をB鑑賞とし大きく2つの領域に再編したが、それぞれの関連は不明瞭なままであり、系統学習色が強くそれぞれが独立した学習で構成されている。

平成元年版では、表現のための材料を地域に求めるなど、地域との関わりが再び生まれる兆しが出てきた。だが、活動の場や題材を地域に求めるまでには至っておらず、学校と地域の関わりを意識した美術の教育課程となっていない。

この時期は、美術に関しては中学校が地域から隔絶された中で授業が展開された。

### (3) 地域連携模索期

平成10年版と平成20年版の時期が「地域連携模索期」に該当する。

先にも触れたが、平成10年版では地域の材料や方法、身近なものや伝統的なものも取り上げるとされた。加えて選択教科の美術では授業者の裁量により指導計画を立てることができたため問題解決学習や地域の特質を生かした学習が可能であった。美術科においても地域との関わりを持つ実践が報告されるようになってきた。

だが、全国的に実践されるまでには至っていない。その要因として考えられるのは、学習指導を行う教員自身がそのような授業を受けたことがないため、地域との関わりのある問題解決学習の実践への戸惑いや不安があること、法令や国、地方公共団体の支援体制が整っておらず、教員が地域や社会教育施設の理解や協力を得るためには多大な労力を要するため敬遠されることである。

平成18年12月公布・施行された（改正）教育基本法第13条には学校、家庭、地域住民それぞれが教育における責任、連携及び協力を努めることが求められている。つまり法的に学校、家庭、地域の連携が明確に位置づけられるとともに、要求されるようになってきた。その後告示された平成20年版では、地域の文言が大幅に増え、美術の表現及び鑑賞活動の中で地域と連携・協力した学習活動が求められることとなった。このことで、地域色を出した中学校美術教育が展開できる環境が整った。今後は身近な生活場面に存在する課題を起点とした、その地域でしか養うことができない美的感性を育む題材開発が必要である。

## 2. 美術館・博物館との関連の歴史についての考察

学習指導要領に見る中学校による美術館・博物館の活用、連携の歴史は4つの時期に分けることができる。本項ではそれらを概観する。

### (1) 先・美術館・博物館活用期

昭和22年版の時期にあたる。学習指導要領には美術館・博物館に関する記述がなされて

いない。また、当時の地方の美術館の建設状況を見ると、昭和24年に高松市美術館、昭和26年に神奈川県立近代美術館が開館しているが全国的に珍しい事例である<sup>92</sup>。都市部では根津美術館のように戦災を受けた事例もある<sup>93</sup>。全国的にみるとごく一部を除けば美術館・博物館がほとんど設置されておらず、美術館・博物館を活用した学習活動を位置づけるのは物理的側面からみても困難な状況であった。

## (2) 美術館・博物館活用提案期

昭和26年版から美術館・博物館活用の記述がみられる。だが、参考資料としての掲載であり、日頃の学習活動での活用を意識した記述となっていない。

また、第X章では都市部と農山漁村部の違いにふれ「都市は文化施設である各種の学校・博物館・図書館、各種の娯楽機関が備わっている」<sup>94</sup>、「文化施設である各種の学校・博物館・図書館・各種の娯楽機関に恵まれていない。このため農・山・漁村の文化の中心は学校であるのが一般的である」<sup>95</sup>の記述がある。都市部では美術館・博物館を活用した美術教育が可能となってきたが、地方の農山漁村部ではそれが困難であったことを示唆している。このことから、全国的にみたとき美術館・博物館を活用した中学校美術（図画工作）の授業が普及することは期待されていなかったととることができる。

社会教育調査によると我が国の昭和30年度の美術館数は48館<sup>96</sup>であった。平成23年度が452館<sup>97</sup>であるのに比べると約10分の1なので当時の美術館設置数は極めて少なかったといえる。加えて現在のように交通が至便ではなかったことも含め考えると、昭和33年版の時期も実態としては昭和26年版当時と同じ状況であったといえる。

昭和26年版、昭和33年版当時、我が国の中学校美術の教育課程における美術館・博物館の活用は、実施可能な学校に対し提案する形で提示されたものである。

## (3) 学校と美術館・博物館隔絶期

昭和42年版から平成元年版まで美術館・博物館に関する記述がない。その背景として考えられるのは、全教科にわたり系統学習の影響を受ける中、美術の授業でも効率的な授業を目指していた。つまり、印刷技術の発達に伴い教科書、資料集に掲載された美術作品を活用することで学習のねらいを達成しようとしたことがある。また、学校数に対する美術館・博物館設置数の少なさ（物理的要因）もあるだろう。

さらに、美術館・博物館を活用するためには、事前の申請や打ち合わせが必要となる。

学校の美術館・博物館活用に対する国や地方公共団体からの政策的、予算的支援が無い中では、教員は授業準備にかなりの労力が必要となる。中学校美術科教員にとって美術館・博物館を活用するのは困難な時期であった。

#### (4) 美術館・博物館活用始動期

平成10年版では美術館・博物館等の施設や文化財の積極的活用が求められた。平成元年版までの系統学習から問題解決学習への回帰にともない、体験的な活動の充実も求められ、美術科でも、印刷や映像でなく本物の美術作品を活用した鑑賞体験が必要とされてのことといえよう。平成11年度になると全国美術館・博物館数が美術館 353 館、博物館数 1045 館となった<sup>98</sup>。美術館・博物館が都市部だけでなく地方にも多数設置され、それらの活用が物理的に容易になってきたことも背景にある。

平成20年版では、美術館・博物館の積極的活用がよりいっそう求められる。それは、平成18年に改正された教育基本法第12条第2項に「国及び地方公共団体は、図書館、博物館、公民館その他の社会教育施設の設置、学校の施設の利用、学習の機会及び情報の提供その他の適当な方法によって社会教育の振興に努めなければならない」<sup>99</sup>と規定されたことが影響している。さらに平成14年度から完全学校週5日制が開始され、家庭や地域の教育力の充実が求められるようになった<sup>100</sup>。これら国の政策的影響により、公立の美術館・博物館では義務教育学校在学児童・生徒の観覧料免除の措置がとられるようになりはじめ、美術館・博物館から中学校に対し美術教育普及のための働きかけ（アウトリーチ）も盛んに行われるようになってきた。法的根拠が整い、公的支援も行われるようになったことで中学校は美術館・博物館を活用した授業が実現しやすくなった。

しかし、全ての中学校が美術館・博物館を活用した教育活動が展開できているとはいえず、さらなる普及のためには多くの課題が残っている。

### 3. 地域の教育資源を活用した中学校美術教育の現状の考察

#### (1) 類型化

地域の教育資源を活用した美術教育を活動の提案及び主導者、活動への参加者で分類すると4つのカテゴリーに分けることができる（表 1-2）。まず、それぞれのカテゴリーにどのような特徴があるのか述べ、その後本稿で取り上げた地域の教育資源を活用した中学

校美術教育31事例（事例1と事例4のように類似した題材を含む）がどのカテゴリーに含まれ、どのようなメリットとデメリットを抱えるか考察する。

表 1-2 地域の教育資源を活用した中学校美術教育の分類 （出所 筆者作成）

		活動の提案及び主導者	
		学校	地域
活動への参加者	生徒	「学校完結型」 事例1, 事例4, 事例5, 事例6, 事例7, 事例8, 事例9, 事例11, 事例12, 事例13, 事例14, 事例15, 事例16, 事例17, 事例18, 事例19, 事例20, 事例21, 事例22, 事例23, 事例24, 事例25, 事例26, 事例27, 事例28, 事例29, 事例30, 事例31	「地域発・生徒活動型」 事例3
	生徒＋地域住民	「学校発・生徒・地域住民協働型」	「地域発・生徒・地域住民協働型」 事例2, 事例10,

### ①学校完結型

本章で取り上げた事例ではこのタイプが最も多い。学校側が活動の起点となり、活動の場が地域にあったとしても活動への参加者は生徒に限定されている。

### ②地域発・生徒活動型

地域から学校に対する働きかけが起点となるが、参加者は生徒のみで展開される活動である。新潟市の事例として事例3が該当する。教科書には事例が掲載されておらず、全国的にみたとき実践の広がりは見られない。

### ③地域発・生徒・地域住民協働型

地域から学校に対する働きかけが起点となり、生徒と地域住民が協働して活動展開されるタイプである。ここでは事例2と事例10が該当する。②と同様、教科書には事例が掲載されておらず、全国的な実践の広がりはいまだこれからである。新潟市では「水と土の芸術祭」が開催されており、その関係で芸術祭実行委員会からの働きかけ（経済的支援も含め）のある学校で実践がすすんだ。

#### ④学校発・生徒・地域住民協働型

学校から地域に対する働きかけが起点となり、生徒だけでなく地域住民も巻き込んだ活動である。「総合的な学習の時間」での地域学習などで地域の問題や抱えている課題を生徒たちが発見し、そこを起点とし美的観点で問題解決していく展開例が考えられる。

#### (2) メリットとデメリット

すべてのカテゴリーに当てはまることだが、美術の授業時数の中で指導計画を作成し、活動を展開させるのは困難となることが予想される。教科横断的な指導計画を立案したり、特別活動とのつながりなどを持たせたりするなど活動を展開する上で工夫が必要である。

##### ①学校完結型

活動の場を地域に求める場合、地域住民の許諾を得る作業が必要となるが、他のカテゴリーと比較すると地域住民との連絡・調整が必要な場面が少ないため教材研究を進めやすいメリットがある。活動の企画・運営は中学校美術科担当教員に負うところが大きく、また生徒が活動する上でも地域住民とのつながりが薄い。したがって、美術科担当教員の異動や退職等に伴い教員が代わると実践が途切れる恐れがあるというデメリットを抱える。

##### ②地域発・生徒活動型

地域の行事を活かした表現活動など、生徒自身が地域活性化に貢献しているという実感を得ることができるなどメリットがある。生徒が地域の美的環境の改善に主体的に関わっているという意識を持たない題材となると、地域や教員の下働き役として生徒の活動が単なる単純作業となるおそれがある。それを避けるための手立ての工夫が必要である。

##### ③地域発・生徒・地域住民協働型

地域から経済的な支援を得ること、地域の美的環境を改善すること、生徒と地域住民による協働的な活動を通して人と人のつながりが生まれるきっかけとなることが期待できる。課題として経済的支援や行政の支援がある年度は実践しやすい環境にあるが、そうでない年度は実践が途切れる傾向にある。結果として地域発・生徒・地域住民協働型は一過性で終わりやすい。また、活動を主導するのは教員なのか、それとも地域なのか不明瞭にならないよう留意する必要もある。

#### ④学校発・生徒・地域住民協働型

実生活場面における美的観点での問題解決学習となり、4つのカテゴリーの中では最も生徒が主体となった活動となり得る。だが、予算の確保、管理職や他教科教員の理解など



学校職員の理解を得ることはもちろん、地域住民の理解を得るための労力がかかる。企画の立案と運営する上で4つのカテゴリーでは最も実現に至るのが困難である。

### (3) 教育資源の種類による分類

全31（全22種類）事例を教育資源毎に分類すると物的資源（風景、材料、活動の場としての地域）、情動的資源（地域の歴史、伝統行事、祭り、地域の問題）、人的資源（美術館学芸員）の3種類に分類できる。それらを眺めると物的資源と情動的資源を活用した事例がほとんどであり人的資源を活用しているのは1事例のみである。序章でも述べたように今後、ほとんどの中学校で美術科教員一人配置となっていくことが予想される中で、生徒にとって魅力的な題材を構築するために、これまで以上に地域の人的資源活用の可能性を探る必要がある。

### (4) まとめ

活動のタイプがどのような形態をとっていたとしても、活動の起点となる課題が生徒と教員の間、或いは生徒と教員と地域の間で共有される必要がある。そのような視点でみたとき、事例17（類似した事例として事例28）、事例18（類似した事例として事例27）、事例19（類似した事例として事例25、事例31）が地域に美術作品を設置する題材であるが、地域環境をデザインする必然性はどこにあるのか、活動を通して地域や生徒の何が変わるのか分かりづらい。また、活動の場を公の場所（地域）に求めることは、美術作品に求められる性格が、制作者の想いを第一に考えたものから公的課題を踏まえたものとなる必要がある。授業者と生徒（場合によっては地域住民も含め）の間でコンセンサスが得られている必要がある。地域を教育資源として活用するのであれば、地域活性化につながるのかどうかという視点も必要だ。

また、実践の多くが中学校側から一方的に地域に対し何かをしてあげているというスタンスとなっている。地域活性化を考える上での重要なキーとして、社会学者の平山修一は「地域活性化は誰のものか、誰のためなのかを考えた時に、今までの議論は地域活性化の当事者は何を望んでいるのかという視点が欠けていたのではないか」<sup>101</sup>を指摘した。行政から地域へのいわゆる上意下達な施作に対し疑問を投げかけたのである。また、平山は「地域の主役は地域住民であり、あくまでも行政のスタンスは行政参加なのである。地域の事は地域住民に決めさせて地域活性化の責任の一端を担ってもらい、そのスタンスが地

域の人のネットワークの再構築に寄与するように行政は側面支援するのである。このような視点が今後の地域活性化の施作立案には必要なのではないか」<sup>102</sup>とも述べた。これを中学校と地域の関係で考えると、地域の主役は地域住民であり、あくまでも中学校のスタンスは中学校参加でなければいけない。地域の事はあくまでも地域住民が決定するとともに地域活性化の責任の一端を担ってもらう、そのスタンスが地域の人のネットワークの再構築に寄与するように中学校は側面支援することである、となる。中学校が地域に対し「してあげる」ではなく、地域と「ともにする」のスタンスが今後の地域活性化の施作立案に必要である。地域から湧き出た地域活性化のための施作立案、運営に中学生による美的活動（中学校美術教育）が関われる部分はあるのか、あるとしたらどのような実践が可能なのか、またどのような成果と課題があるのか。これについては第5章で触れることとする。

#### 4. 地域の教育資源を活用した中学校美術教育のシステム開発上の留意点

##### (1) 基本的な考え方

「地域との関連」、 「美術館・博物館との関連」を視点とし学習指導要領における中学校と地域の連携の変遷をたどった後に、新潟市及び全国に目を向け、地域の教育資源を活用した美術教育の事例を眺めてきた。

ここまでで明らかになったのは、学校と地域の連携に関する大きな流れが学校、地域、美術館・博物館それぞれが離れた立ち位置で個別に生徒の教育を担おうとしていた状況から、お互いの強みを生かし連携・協力しながら生徒の教育を担う動きへとシフトしてきていることである。これは平成18年改正・教育基本法など法令の影響が大きいといえる。これを法的しほりが生じたと捉えることもできるが、教員が法的根拠をもとに地域、美術館・博物館との連携・協力を働きかけることができるようになったと捉えることも可能だ。確実に言えるのは、中学校が地域や美術館・博物館を活用しやすい環境が整ったということである。交通網、情報網が発達しグローバル化した現代だからこそ、物質的豊かさだけでなく心の豊かさも求められる。そのためには人と人が直に接することのできる場としての地域が必要であり、そこで培わなければならない、或いはそこでしか培えない感性がある。

今後、中学校、地域、美術館・博物館による連携の輪を広げていくためには何が必要なのだろうかを考えたとき、1996年4月24日の生涯学習審議会による答申「地域における生

涯学習機会の充実方策について」が1つの拠り所となる。そこでは以下の小・中・高等学校を対象とした提言が投げかけられた。

社会人の学校教育への登用を可能とする特別非常勤講師制度の積極的な活用や、公民館や博物館などの社会教育施設において学校教育に即した事業を実施するなど、小・中・高等学校においては地域社会のもつ教育力の活用が望まれる。また、PTA活動の活性化を図るため、父親や職業を持つ人が積極的に参加できるよう、活動の時間や場所について見直すことも必要<sup>103</sup>

学校に求められるのは地域住民や社会教育施設などの活用の可能性を探ることと、学校に協力しやすい環境を整えることである。

同答申には社会教育・文化・スポーツ施設を対象とした次の文言もある。

社会教育・文化・スポーツ施設においては、施設間の広域的な連携や情報化・マルチメディア化への積極的な対応を通して多様で総合的な学習機会を提供することが期待される。学校教育と社会教育は、学習の場や活動など、両者の要素を部分的に重ね合わせながら、一体となって子どもたちの教育に取り組んでいこうという

「学社融合」の考え方にたって、取り組みを行うことが求められる。学校週5日制の実施を契機に、地域社会における学校外教育活動充実の拠点となるこれらの施設には大きな期待が寄せられており、子どもたちの利用に配慮した活動が行われることが必要。また、子どもたちの健全育成のための地域ぐるみの活動の展開が必要。このため、社会人が地域社会や家庭で活動・生活するためのゆとりをもたらすよう、企業が具体的な対応をとることが求められる<sup>104</sup>（下線筆者加筆）

社会教育・文化・スポーツ施設に求められるのは、学校の教育活動を意識した事業と地域を巻き込んだ事業を展開することである。また「学社融合」が意味するのは、下線部にあるように学校と社会教育施設等が共有可能な教育（事業）目標や手だてを探りながら協力することとなる。

地域の組織が学校と連携・協力することで地域住民のみならず、活動に関わる者が自分たちの地域や組織が改善されていくのを実感できることで、組織間の協力関係に持続性が

生まれるとともに、活動の広がりや深まりが生じるのが期待できるようになる。この点の検討は第 5 章で行う。

## 第 5 節 残された課題

序章でも触れたが、現行の中学校学習指導要領における教育課程をみると、中学校 3 年間の美術の標準授業時数を合計すると 115 時間となる。3 年間の標準授業数の合計が 3045 時間なので美術が占める割合はわずか約 3.7% となり、音楽と並び全教科の中で最も少ない授業時数となる。

学習指導要領が試案であった時代も含め中学校 3 年間の美術科の総授業時数を見ていくと昭和 22 年版 210 時間、昭和 26 年版 210~315、昭和 33 年版 140 時間、昭和 44 年版 175 時間、昭和 52 年版 175 時間、平成元年版 140~175 時間＋選択教科 0~70 時間、平成 10 年版 115 時間＋選択教科 0~70 時間、平成 20 年版 115 時間となる。

昭和 22 年版と昭和 26 年版では平成 20 年版の授業時数と比べ多くの時数が確保されていた。それは技術・家庭科の技術分野が図画工作から分離される前であったことも影響している。昭和 22 年版と昭和 26 年版の図画工作の学習内容には単元「小公園緑地帯などの設計」がある。これを現在の教育課程の中で指導計画を作成しようとするれば美術科と技術科による教科横断的な学習内容、或いは「総合的な学習の時間」として位置付けることになる。3 年間の美術の総授業時数 115 時間の中で、地域の教育資源を活用した中学校美術教育を実現するためには、美術の授業を基盤としつつも中学校の教育課程全体の中での指導が必要である。このことを踏まえ、第 2 章では「総合的な学習の時間」、第 4 章では特別活動（学校行事）、第 5 章では特別活動（生徒会活動）とのつながりを意識した題材開発・実践とその検討を行うこととする。

## 第2章 物的資源を活用した事例 (中学校美術科と事業所の連携)

### 第1節 研究の進め方

平成20年版中学校学習指導要領では、知識習得型学力だけでなく実生活活用型学力も求められる。実生活活用型学力は社会生活を送る上で、人間が直面するさまざまな課題を主体的に解決する能力である。

第1章第2節1.でも触れたが、ここで昭和22年版以降の中学校学習指導要領を簡単に振り返る。試案として示された昭和22年版及び昭和26年版は我が国の教育は児童・生徒の身近な生活に存在する問題を中心として扱う問題解決学習であった。それが、昭和33年告示中学校学習指導要領から、高度経済成長期における科学主義、系統学習に押され衰退し、平成元年告示中学校学習指導要領まで続くこととなる。だが、知識の断片化や人格形成上の弊害が指摘されるようになり「生活科」や「総合的な学習の時間」の出現に象徴されるように「コア・カリキュラム」が再び注目され問題解決学習が再び登場することとなる。加えて、PISA国際学力調査の結果を受け、テレビや新聞などのマスメディアによりいわゆる「学力低下」が問題視されるようになった。

図画工作・美術科教員も、学習の内容と社会との関連や児童・生徒の学習欲求と学習活動のつながりについて、児童・生徒の学習活動(「えがく」「つくる」「みる」行為)が児童・生徒にとって実生活の中でどのような位置付けとなり、それが生徒の切実な学びとなっているのか再確認しながら教材研究を行う必要が生じている。

本章では、生徒の日常生活と美術の関わりについての意識をもとに、そこから見えてくる問題点をもとに改善策を考えた。その後、実践を行い結果の考察をした。まず、生徒の実生活と美術の関わりについてどのような意識を持っているか確認するため、2008年5月勤務校第1学年生徒121人に対し「美術の授業は生活に役立つと思いますか」の質問をし、全員から回答を得た。その結果、生活のどの場面で役立っているか自分の考えを述べることができた生徒を確認することはできなかった。生徒は美術と実生活とのつながりを認識できていない様相にあることが伺える。

そこで「実生活場面で美的表現活動をすることで、生徒は日常生活と美術が密接な関係があることに気づき、美術への関心が高まるとともに、授業を通して得た知識を、日常生

活で活かそうとするであろう」の仮説を準備し、題材開発・実践を行うこととした。具体的には身近な地域の服飾店で商品（衣類やアクセラリー）のディスプレイ・コーディネート体験をすることで、日常生活と美術が身近な存在であることに気付き、美術への関心の高まりや、活動を通して得た知識や美的感性を日常生活で活かそうとする生徒を育成したいと考えた。この仮説をもとに、まずは題材を実現するためのシステム構築、実践を行い結果の検討を行う。また、美術の授業時数は少ないため「総合的な学習の時間」の中で行われる活動と美術の授業がリンクした活動となることを目指すこととした。

## 第2節 地域の教育資源を活かした造形活動の現状と課題

### 1. 「美術の生活化」のための教材

宇賀神俊彦による美術の授業に対する中学生の意識調査では「各学年とも『美術の授業が楽しい、好きである』という生徒が8割近くである。浮かび上がる生徒像は、美術の学習に対する表面的な好感はもっているが、表すことや感じ取ることについて、進級にするにつれて自信や満足感が持てなくなっていくとともに、学習の必要性を感じなくなっていく」<sup>105</sup> というものであった。そこで、宇賀神は「美術の学習を通して培われた他者の批評を取り入れることによって、自分をより高めていこうとする態度や、造形的なとらえ方や豊かな考え方、自ら課題を設定し、解決する力などの資質や能力が、教科や領域を越え、学校内外や将来の生活で生きてはたらくことを実感すること」を「美術の生活化」と定義した。そして、生徒が美術の授業で実生活の中の美術を鑑賞し、美術の必要性を具体的に理解させる実践として、シャープペンシルを対象とした鑑賞活動を行った。「プロダクトデザイン製品の機能性と装飾性の折り合いをつけることの難しさに気付くようになった生徒がいた」<sup>106</sup> とされる。シャープペンシルは日常的に使用されているが美術作品として生徒たちに認知されていない。それを鑑賞対象とした点に宇賀神の独自性と先進性がある。シャープペンシルだけでなく、生徒たちの身の回りには他にも多くのプロダクトデザインが存在する。それらを「美術の生活化」をはかるための教材として発掘する必要がある。

### 2. 地域の教育資源を活用した題材開発のための視点

地域の教育資源を活かした活動例として2007年1月に一宮市の三岸節子記念美術館で実施された実践がある。その概要、成果と課題は以下の通りとなる。

加藤克俊、藤田雅也、西村志磨、樋口一成（以降、報告者と記述）らの報告<sup>107</sup>によると、美術作品を鑑賞するだけでなく、子どもたちに、ものづくりの楽しさを伝える教育の場として三岸節子美術館が特別プログラムを企画した。その一つとして、報告者らは地域（美術館）で、地域の自然素材を用い、地域の住民を対象として2日間の日程で「ものづくり」のイベントを企画した。活動には、親子5組（小学生9名、保護者6名）が参加した。枯れ葉、木の実などの自然の素材を用い、材料の形をもとに、それぞれが発想をふくらませ、親子で協力しながらグルーガンで素材を接着し、イメージを具体化していく活動である。

報告者の実践は「地域の間」「地域の素材」「地域の人々」の3観点から、成果と課題が報告されている。地域で、地域のものを用いて、地域の人による造形活動を位置づけた。成果は、参加者は地域の特色が活かされた活動を通して、地域の中にある素材を活かした表現活動をすることの楽しさを認識できたこと、親子での参加者であったため、親子が活動を介してコミュニケーションの機会を増やす事ができた点である。アンケート結果によると、再びこの活動に参加したいと考えている参加者が多くいた。日常生活の中で参加者が材料を見つけたとき、さまざまな表現の可能性を探ろうとする意識が働くことが推察できる。「美術の生活化」をはかる上で「地域の間」「地域の素材」「地域の人」の3要素を取り入れた題材開発の必要性を示した。

報告者は活動が一過性となる点を課題とした。筆者はそれに加え、活動が開始から終末まで企画者により先導され続けていた点にあると考える。活動のきっかけは企画者が作るとしても、活動が経過するとともに先導する役割が徐々に参加者にシフトする必要がある。参加者が主体的に活動に関わることで表現意欲が高まるのは当然のことながら、運営のノウハウを身につけようとする姿勢を身につけようとする事が期待できる。また、企画者は参加者に対し活動の企画者となれるよう導くことができれば、今後の活動の継続性だけでなくさらなる題材に多様性が生まれることが期待できる。

### 第3節 実践題材「地域の服飾店におけるディスプレイ・コーディネート」

#### 1. 実践の概要（題材について）

活動日時 2009年7月14日（火）～15日（水）

各日 9：00～15：00

場所 服飾店「アメリカンスクエアマツヤ」（図 2-1）

新潟県新潟市東区新松崎 1 丁目 1 - 16

参加生徒 3 人

服飾のディスプレイ・コーディネートを採  
り上げた意図は、次の 3 点にある。

第 1 に服飾は生徒にとって興味を引く身近  
な素材であること。第 2 に服飾のディスプレ  
ー・コーディネートは色や形の組み合わせ、  
値段、客の嗜好など実生活で求められる観点  
も含め美的構成要素を意識しながら組み合わ  
せを考える必要があること。第 3 にコーディ  
ネートされた服飾が実生活場面で使用される  
可能性があることである。本実践における服のコーディネートは、実生活活用型のデザイ  
ン表現である。

生徒は 1 年時に、平面構成「自然物・人工物の構成」を通して直線と曲線などの形や色  
彩の感情、色の組み合わせがもたらす効果などを学習した。また、目的と条件をもとにデ  
ザインする学習を行った。生徒が学校で習得した知識・技能・感性を実生活で活用する題  
材を実現すべく、学区内で毎年行っている職場体験活動の中に本題材を盛り込んだ。

## 2. 活動の実際

### ① 導入（0.5 時間）

店で働く上での注意点を聞いた後、服のディスプレイ  
の意義（なぜ）、目的（何のために）、方法（どのよう  
にして）を店内に展示されている実例をもとに説明を受  
ける。

### ② 展開 1（8.5 時間）

店内外の清掃、服や雑貨の整理・整頓作業をしながら、  
店内にある商品の情報を集めたりや客の様子を観察したり  
する。活動を通してディスプレイに使用する服のイメ  
ージを膨らませる（図 2-2）。



図 2-1 店内風景

（出所 2009 年 7 月筆者撮影）

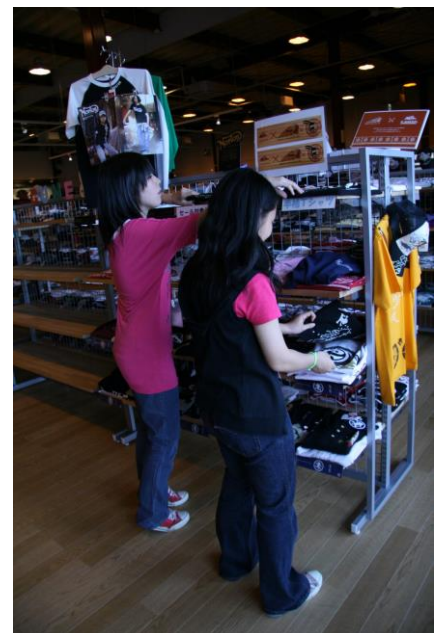


図 2-2 活動の様子

（出所 2009 年 7 月筆者撮影）



### ③ 展開 2 ( 1.5 時間)

店内の服やアクセサリをもとにコーディネートする。生徒どうし意見交換しながら試作品を作る (図 2-3 , 図 2-4 )。

### ④ 鑑賞 ( 1.5 時間)

生徒は店員から評価を受けた後に修正を加え、ディスプレイを完成させ展示する。



図 2-3 生徒 A 作品



図 2-4 生徒 B 作品

( 出 所 2009 年 7 月 筆 者 撮 影 )

( 出 所 2009 年 7 月 筆 者 撮

## 第 4 節 実践結果

活動終了直後に生徒と店長から、実践 2 ヶ月後に生徒から筆者による聞き取り調査を実施した。その結果を下に記す。

### 1. 生徒 (活動終了直後)

「自分のやりたいことをじっくりと考えることができてすごく楽しかった」,  
「もともと美術の授業は好き。いろいろ迷うこともあったけどこの活動はそれよりもっと面白かった」, 「もっといろいろなコーディネートを考えたいと思った。学校の美術でもこんな活動がしたい」, 「ここでやったことは生活に役に立つと思った」, 「お店に来たばかりのときは服を見てもそれほど気にならなかったけど、ディスプレイを制作した後もいろいろな服が気になり、(ディスプレイに使うのは) こっちの服が良かったかなとか思うことがある」, 「コーディネートができあがった後に、店の人から『アクセサリを使ったら?』と言われ、実際にアクセサリを付けてみたら雰囲気が変わって驚いた」, 「考える人によって全然違うコーディネートに仕上がる。お店の人のコーディネートはレベルが高いと思った。やる前は気付かなかった」。

## 2. 店長（活動終了直後）

「どの子も意欲的に活動に取り組んでくれました」、「自分のディスプレイがお客様にどのように見られるのか、買ってもらえるのか気になるらしく『何日かたったら見に来てもいいですか?』と聞いてきた生徒さんもありました」、「このような活動で学校のお役に立てるのであれば、また来年もどうぞ来てください」。

## 3. 生徒（体験終了2ヶ月後）

「(体験前に比べ)着る服を選ぶとき、すごく考えるようになった」、「服だけでなく、いろいろな場面で色の組み合わせが気になるようになった」、「服のコーディネートをする 것도 美術だとは気がつかなかった」、「店の人のセンスは今でもすごいと思う」、「今やっている新潟をPRするポスター制作で習っているグラデーションなどの構成要素が面白く感じる」、「服のコーディネートはまたやってみたいと思った」、「服が売れたかどうか気になる」。

# 第5節 考察（成果と課題）

## 1. 成果

体験後の生徒からの聞き取りで「授業で習ったグラデーションなどの構成要素が面白く感じる」や「服だけでなく、いろいろな場面で色の組み合わせが気になるようになった」の回答から、美術が実生活において活用されている事実に関心、学校における美術の授業に対する興味・関心が高まったことが分かる。服飾店でのディスプレイ・コーディネート体験がなく、授業で美の構成要素のグラデーションだけを扱う授業の場合、断片的な知識習得で終わってしまう。生徒は実生活における美の構成要素の存在の意識化につながらない可能性がある。服飾店におけるディスプレイのコーディネート体験をしたことで、生徒は授業の中で美の構成要素（グラデーション）に触れたとき、実生活場面で活用できる可能性を見いだしたものと推察する。実生活場面での美的体験活動は、美術の授業で扱う美的知識・技法を身近な存在と認識するきっかけとなり得る。地域の事業所を活用するこ

とで教科の授業時間以外でも美的表現活動をしたい生徒の場の保障をめざした取り組みである。実践を通して、生徒が美術を身近な存在であると認識するとともに、服飾店に来店する客から自分がデザインしたものを評価されることに対し、期待感をいだきつつも自己の表現に対し責任を持とうとする様相が生まれることが分かった。

服飾店におけるディスプレイ・コーディネートは、生徒の個人的嗜好のみでの表現では不十分である。来店する客の感性に訴えかけるものとなる必要がある。極端な言い方をすれば自己満足でも作品として成立する空想画などの心象表現と違い、他者（客）の視点を意識的に取り入れた表現でなければいけない。店長が「自分のディスプレイがお客さんにどのように見られるのか、買ってもらえるのか気になるらしく『何日かたったら見に来てもいいですか』と聞いてきた生徒さんもありました」とコメントしたように、生徒は自分の表現が客にどのような評価を受けるか気にしていた。実践を通して、生徒が美術を身近な存在であると認識するとともに、服飾店に来店する客から自分がデザインしたものを評価されることに対し、期待感をいだきつつも自己の表現に対し責任を持とうとする様相が生まれることが分かった。「美術の生活化」をはかるための題材となり得た。

学校は地域との連携が求められる中で、事業所（企業）も利益を追求するだけでなく社会的責任として地域（社会）貢献が求められている。そのことを意識していないのかもしれないが、店長が「このような活動で学校の役に立てれば、また来年もどうぞ来てください」との言葉をもらうことができた。本実践題材が一過性で終わるのではなく、継続的实施が可能な題材として、中学生が美的活動を実生活場面で学ぶ場を確保できた点も成果である。

### 3. 課題

本実践題材は筆者の勤務校が毎年実施している「総合的な学習の時間」における職場体験活動の中に活動を位置づけることができた。美術の授業との関連や題材配列の問題、生徒の表現したものに対する自己評価、教員による評価、事業所の評価にくい違いが生じた際の調整が今後の課題である。

また、この実践は少数の生徒しかできないという限界性がある。それを克服するためには、より多くの事業所を活用した実践が必要となる。例えば小売店で商品を PR するチラシのデザイン、幼稚園や保育園であれば、壁面の装飾や、園児を対象とした中学生による造形ワークショップ開催等が考えられる。今後、さらなる受け入れ先を開拓するためには、事

業所が生徒を受け入れることでどのようなメリットがあるのか整理し、各事業所に周知する必要がある。

## 第3章 情報的資源を活用した事例 (中学校間の連携)

### 第1節 問題の背景と研究の進め方

平成20年版中学校学習指導要領の「各学年の目標及び内容」には「身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し，そのよさなどを感じ取り，美術文化に対する関心を高めること」と記された。また「指導計画の作成と内容の取扱い」では鑑賞の指導で配慮すべき事項として，各学年とも適切かつ十分な授業時数を確保することも明記された。つまり，平成20年版では鑑賞の授業を充実させるとともに，身近な地域にある美術作品を活用した題材開発と実践が求められていることが分かる。鑑賞の授業で実物の美術作品を扱うことは稀であり，教科書，資料集等に印刷されたレプリカ作品，画像データ等を用いることの方が圧倒的に多い。それは，大多数の学校が美術作品を所蔵しないか，所蔵していても作品数が僅かだからである。

実物の美術作品を活用した授業をする際に美術館を活用することがある。序章で触れたが奥本素子の先行研究<sup>108</sup>では印刷物を用いた美術館訪問のための事前学習について「事前に絵について知るという事前学習への肯定的意見を増加させるが，実際の美術館訪問への動機づけは行うことができない」<sup>109</sup>とし，実物の美術作品による鑑賞体験の重要性を示した。奥本の研究に依らずとも中学校美術教員であれば，美術作品の印刷物よりも，実物の美術作品の方が教材として価値があるのは直感的に分かっている。だが，現実には2009年5月に筆者が新潟市内の中学校美術科教員を対象とし中学校の美術館活用状況についてアンケート<sup>110</sup>を行ったところ「美術科の授業で美術館を活用した」と回答した学校は33校中1校のみであった。新潟市内には公立美術館が3館（県立1館，市立2館）設置されているが，中学校美術科の教育活動ではほとんど活用されていない実態が明らかとなった。奥本の言説からいえることは，学校内に実物の美術作品をいかにして準備するかは，学校だけでなく美術館にとっての課題ともいえる。

全国的に見ると，児童・生徒が学校から美術館に出かけ，美術作品を鑑賞する事業が世田谷美術館（東京都世田谷区）や金沢21世紀美術館（石川県金沢市）などで行政（教育委員会）が後押しし，美術館主導で実施されている事例がある。富山県立近代美術館（富山県富山市）では美術館所蔵美術作品を学校に持ち出す事業の事例もある。しかし，学校と

美術館の連携事業が全国的に普及しているとはいえず、美術館を活用した教育活動を体験できるのは一部の児童・生徒に限られている。

美術館所蔵美術作品は著名なアーティストが制作した美術作品であることが多く、作品管理が行き届き、中学校美術教育の教材として大きな可能性をもつ。館長が許可すれば借用可能であるが、美術館所蔵美術作品の多くは高価であり、採光、照度、温度、湿度、ほこり、事故発生時の対策等がなされた施設での展示、美術作品を施設から出し入れする際の防塵、防虫等の処置を施すことが求められる。学校がそのような設備を準備したり処置を施したりするのは困難である。したがって、学校が美術館から美術作品を借りることは現実的にはほぼ不可能である。中学校が美術館所蔵美術作品を借用しての鑑賞の授業の実現は現実的ではない。そこで、本章では平成20年告示中学校学習指導要領総則に明記された「中学校間の連携」の美術科におけるシステム開発の1事例として、中学校が保有する美術作品活用の可能性を探ることとする。具体的には同一地方公共団体が設置する中学校が所蔵する美術作品のデータベースを作成し、各中学校が所蔵する美術作品を貸借できるシステムを構築することである。すると実物の美術作品を教材として使用できる可能性が大幅に高まる。

研究仮説「地域の中学校所蔵美術作品のデータベースを作成し、中学校間で美術作品を貸借できるシステムを構築する。すると各中学校は、地域内の中学校所蔵美術作品を活用することで、実物の美術作品を使った多様な鑑賞の授業が可能となる」を準備し、新潟市の中学校所蔵美術作品を題材として、中学校間の連携による美術の授業の可能性を検討することとした。

本章では研究の第1段階として新潟市を題材に地域の中学校所蔵美術作品を調査し、調査結果が中学校の鑑賞の授業で活用できるデータベースとなり得るか検討する。同一地方公共団体内の中学校所蔵美術作品は当該学校の財産であるとともに、当該学校を設置する地方公共団体の財産でもある。したがって、美術作品の貸借が容易となり、実物の美術作品の積極的活用が期待でき、毎年の継続的実践も可能となりやすくなる。また、それぞれの地方公共団体毎に教員の研究団体が組織されるケースが多く、学校間連携がとりやすい。

研究の具体的な進め方は、第2節で実物の美術作品活用の意義と学校所蔵美術作品が持つ可能性について、先行研究や筆者の中学校勤務経験をもとに述べる。第3節で学校所蔵美術作品の活用の実際について、単独の学校で実施している事例、美術館及び博物館における学校所蔵美術作品の活用事例の成果と課題点に触れる。第4節では、新潟市を事例と

した中学校所蔵美術作品の調査結果のまとめ、第5節で結果の考察を行い、学校所蔵美術作品の美術科教育における活用法を例示する。最後に本研究の振り返りとして残された課題を記す。

## 第2節 実物の美術作品活用の意義と学校所蔵美術作品の可能性

金山和彦は小・中学校、図工・美術の鑑賞の授業で使用する美術作品について「本来、レプリカなものではなく、実作品とその作品を所蔵する空間、作品との出会いのために自らがオリジナル作品へと赴くという一連の行為を『真の鑑賞』と呼ぶのではないか」<sup>111</sup>とし、学校教育において縮小印刷された美術作品やレプリカなどを通して通念的に理解している鑑賞教育に疑問を唱えた。美術館で鑑賞する実物の美術作品と教科書・資料集等に印刷された美術作品では生徒（鑑賞者）に伝わる印象や情報に差が生じる。油彩画であれば、絵具の凹凸の様子や作者の筆跡など作品のマチエールは印刷では伝わりにくい。また、パステルで描かれた絵画の微妙な色合いを印刷で複製するのは困難である。彫刻など立体作品であればその違いは歴然である。印刷された美術作品は実物の美術作品と比較すると取得可能な情報量が極端に減少する。また、美術作品を生徒の鑑賞意欲を喚起する教材として考えたとき、実物の美術作品と印刷されたものやレプリカの美術作品とでは明らかな差が生じることが容易に推測できる。

金山の述べるように美術館に赴き、生徒に実物の美術作品を鑑賞させることができれば理想的である。しかし、物理的限界があるため、全ての中学校での実施は困難である。地域の学校が所蔵する実物の美術作品を貸借できるシステムを選択肢に加えることで、学校内においても美術館が所蔵する美術作品を使用するのと同等の授業の実現と学習効果が期待できると考えた。

次に学校所蔵美術作品が持つ可能性に触れたい。各校が所蔵する美術作品数の多少、種類等違いがあることが予想される。校長室や会議室など人目に触れない場所に展示されるにとどまる美術作品もあるが、多くは玄関、廊下、階段など児童・生徒・学生の目に触れ易い場所に日常的に展示されている。生徒は特別な期間だけでなく、日頃の学校生活の中で実物の美術作品を鑑賞できる。学校所蔵美術作品は備品として購入されたものや卒業記念品として卒業生から寄贈されたもの、アーティスト（学区内在住者、卒業生など）から寄贈されたもの、過去に勤務した美術科教員が寄贈したものなどが存在する。学校で美術

作品が所蔵されていることのデメリットは、作品管理（湿度、採光、ほこりなどに対する対策）が疎かになりやすく、作品にとって好ましくない状態になりやすい点にある。だが、学校所蔵美術作品は貸借が容易であるという大きなメリットをもつ。学校間であれば、日常的に行われている教材の貸借と同等の簡易な手続きで貸借可能である。同じ美術作品でも、学校と美術館では扱いが異なる。ここに、学校所蔵美術作品が教材として持つ大きな可能性を見いだすことができる。

### 第3節 学校所蔵美術作品活用の実際

本節では、学校が計画的に美術作品を収集し、余裕教室を活用し、学校美術館（博物館法や条例に基づかない美術館）を設置している事例と、廃校となった学校が所蔵していた美術作品を社会教育施設が収集・活用している事例に触れる。

#### 1. 学校における事例

新潟市立白新中学校（新潟県新潟市）は「白新美術館」の名称で20年以上前<sup>112</sup>から自校所蔵美術作品を展示してきた。本事業のねらいは、授業で実物の美術作品を活用することと、生徒が学校所蔵美術作品に日常的に接する機会を設けることにある。しかし、2010年度は新潟市美術館（新潟県新潟市）との連携事業（出前授業）が行われた際（2月8日）に1日開館したのみであった。担当美術教員によると、美術作品管理上の問題があるからとのことである。

美術作品に対する故意又は過失の損壊を防止するためには、適切な美術作品の管理体制確立が不可欠である。しかし、生徒数減少に伴うクラス数削減、指導要領改訂による中学校美術科の授業時数削減にともない美術教員数が学校美術館設置当初の2人から1人になり、また美術以外の授業も担当することによる職務の負担増大により、美術科単独での学校美術館維持管理が困難となった。

学校美術館を維持管理していくためには、学校の全職員の理解と協力、そして保護者・地域住民ボランティアなどさまざまな人材の活用が不可欠である。それは平成20年告示総則第4に記された「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域との連携を深めること」に通じる点でもある。



## 2. 社会教育施設における事例

ここでは、社会教育施設が地域の学校所蔵美術作品を活用した活用事例からみえてくる成果と課題に触れる。

はじめに新潟市美術館における事例である。新潟市美術館は1985年新潟市によって設立された美術館である。新潟市美術館ホームページによると「美術に関する市民の知識と教養を高め、美術活動を推し進めることによって、郷土の美術文化の向上発展に寄与することを目的とする」<sup>113</sup>とされる。また、現在我が国の多くの美術館が取り組んでいるように、一般市民を対象とした事業のみならず、学校との連携事業にも力を入れている。

1993年、新潟市美術館において企画展「まなびやのコレクション展」<sup>114</sup>が開催された。本企画展は一般来館者を対象とした企画展であり、学校との連携事業としての位置付けではなかった。しかし、学校所蔵美術作品が持つ可能性を考える上で興味深い。

本企画展では新潟県内の小・中・高等学校、大学が所蔵する美術作品を調査し、それらの中から絵画、彫刻、版画など93点の美術作品が展示された。展示された美術作品のほとんどが、新潟県にゆかりのあるアーティストの美術作品であり、油彩、日本画、水彩、版画、彫刻、書、工芸とさまざまなジャンルに及んでいる。本企画展実施に向けての調査結果<sup>115</sup>から、新潟県内の多くの学校が美術作品を所蔵していることが明らかとなった。残念ながら本企画展は単年度で終了したため、その後の学校所蔵美術作品の実態は不明である。また、新潟県全体を対象とした調査結果をもとにした企画展であったため、新潟市内中学校所蔵美術作品についての詳細な調査結果は不明である。

次に、京都市立学校歴史博物館（京都府京都市）の事例<sup>116</sup>である。京都市立学校歴史博物館は、1998年京都市によって設立された博物館である。設立目的は、京都市立学校歴史博物館条例第1条によると「学校並びに学校教育に係る制度及び教育内容の歴史に関する資料の保存及び活用を図り、京都の先人たちが自主的に学校を設立した歴史的な意義を将来の市民に継承するとともに、市民の学習の振興に資するための施設」とされる。京都市内中心部小規模校の統合・廃校にともない散逸のおそれのある美術作品、明治期教科書、理科実験器具などの教材・教具の保存、展示、調査及び研究、市民に対する研修を主な事業としている。

京都市立学校歴史博物館は、学校の統合・廃校にともない散逸のおそれのあった数多くの貴重な美術作品、学校並びに学校教育に係る資料収集と保存に成果を挙げてきた。学校に所蔵されていた作品の中には学校所蔵美術作品とは思えない極めて著名な美術・工芸作

家の美術作品が多数存在し、それらの美術的価値は注目に値するものもある。だが、それ以上に注目したいのは美術作品がいかにして学校に所蔵されることとなったかその所以である。

元竹間校（京都市中京区）が所蔵していた六曲一双屏風には、明治期の卒業生である梅戸在貞，学校近隣に在住していた上村松園，山元春挙，都路華香，加藤英舟，白井清泉，内海吉堂，伴一邦らの絵画が貼られている。それ以外にも，美術・工芸作家が母校に寄贈したものや，近隣の学校に寄贈した北大路魯山人の陶器（図 3-1 中央の作品），上村松園，竹内栖鳳の絹本着彩などもある。

京都市内学校所蔵の名品とされる美術作品は，著名な作家の美術作品を学校や保護者が多額の費用を費やして購入したのではなく，卒業生や学校周辺に在住していた美術・工芸作家らによって寄贈されたものが多数ある。つまり，地域住民，保護者，卒業生と学校のつながりの中で美術作品が所蔵されていった点に特徴がある。これは，地域と学校の連携が求められる現在の学校教育における学校所蔵美術作品収集のあり方を考える上で示唆を与えているといえよう。



図 3-1 展示されている陶器及び磁器作品

（出所 2014 年 5 月筆者撮影）

京都市立学校歴史博物館では児童・生徒が当館を訪問し，さまざまな美術作品を活用した学校行事や授業が実施可能である。だが，京都市内の学校へ美術品を貸出し，児童・生徒の目に触れる場所に展示したり，授業で活用されたりする事業は実施されていない<sup>117</sup>。美術品が館外へ出ることによって受ける物理的ダメージを避けるためである。美術作品保存の観点では理想的な状況に置かれたといえよう。だが，京都市立学校歴史博物館の美術作品の活用方法は再考すべきである。美術・工芸作家たちが美術作品を学校へ寄贈した際，博物館や美術館のような厳重な管理体制下での展示・保管を望んでいたか疑問が残るからである。寄贈した美術・工芸作家たちが存命でないため推測となるが，上村松園が我が子（上村松篁）の通う学校に，梅戸在貞が自分の母校に，北大路魯山人らが在住する近隣の学校に自作の美術作品を寄贈したのは，可能な限り多くの子どもたちに日常の学校生活の中で（身近な環境で）実物の美術作品に触れさせたかったからではないだろうか。寄贈した美

術・工芸作家の意志を汲むとすれば、京都市立学校歴史博物館は美術作品を館内展示だけにとどまらず、館外への美術作品持ち出しに伴う物理的ダメージを最小限におさえる努力をしつつ、京都市内の学校への美術作品貸出しも行い、文化祭などの学校行事や、図工・美術の授業等で活用できる方法も検討すべきである。

#### 第4節 中学校所蔵美術作品の調査と結果

1993年の新潟市美術館による調査<sup>118</sup>では、学校の回答率の低い地方公共団体が多くあり、また、調査期間に2ヶ月を要している。そこで、調査方法の見直しが必要と判断した。具体的には、調査を新潟市中学校教育研究会美術部会<sup>119</sup>（以下、中教研美術部会）の事業の中に位置づけ、中教研美術部会内部の教員（筆者）が調査を行い、調査活動を各学校に還元することを約束しアンケートを依頼する。すると、各学校の協力が得易く、より詳細な調査結果が期待できるものと考えた。また、調査は市内各中学校の美術科主任宛に電子メールにより実施する。現在、新潟市立学校間の連絡は電子メールで行われるようになっており、短期間で容易に調査可能となる。

2011年4月1日現在、新潟市は市立中学校を58校（中等教育学校前期課程は中学校として計上、分校は本校に含む）設置している。これらを対象とし、学校所蔵美術作品を調査した。

2011年5月16日に勤務校から全ての新潟市立中学校宛に5月31日〆切で電子メールによるアンケート配信を行い、44校から回答を得た。したがって、アンケートの回収率は約75%であった。

アンケートの質問項目は以下の通りである。

- ・美術作品数

学校所蔵美術作品数

- ・美術作品の種類

絵画、彫刻、工芸、デザイン、その他について記入。また、絵画は油彩、水彩、版画についても記入。

- ・美術作品名

美術作品のタイトルが分かるものについて記入。分からないものは、美術作品に何が表現されているか、特徴を記入する。

- ・作者名

備品台帳に記載されているもの。記載がないものについては、美術作品のサイン等から分かる範囲で記入。

- ・サイズ

美術作品の大きさが分かるように記入。

- ・貸出し可否

貸出し可能な状態にあるかどうか。校長の許可を取る必要の有無，貸出しを願い出る際の留意点等を記入。

アンケート結果の詳細は表 3-2 の通りとなる。回答した中学校のうち40校が所蔵美術作品ありと回答し，美術作品総数は 183 点にのぼった。貸出し可能（「相談による」も含む）と回答した学校数は26校であり，貸出し可能な美術作品総数は97点である。

貸出し可能な美術作品をジャンル別に分類すると絵画（油彩）61点，絵画（水彩）2点，絵画（水墨）6点，絵画（日本画）6点，絵画（パステル）2点，版画（エッチング）1点，版画（木版画）8点，版画（シルクスクリーン）1点，写真1点，書5点，彫刻2点である。

これらの中には，ラピトの油彩画のように複製画の可能性のある美術作品や，羽黒山（力士）の扁額作品，ロシア・ハバロフスクの子ども達の美術作品のようにアーティスト制作の実物の美術作品に含むものとしては疑わしいものも含まれる。だが，本稿では，それらも含めた実態を明らかにするために，全てをデータとして計上することとした。

表 3-2 を見ると，所蔵美術作品の作者は西村満，代谷実，新田公彰，早津剛など新潟県にゆかりある作家や過去，当該校に勤務していた教員が寄贈した美術作品が多数所蔵されていることが分かる。さらに北村西望，千野茂，入江泰吉のように全国的に知名度の高いアーティストの美術作品を所蔵する中学校もあることが分かった。

## 第5節 調査結果の考察

### 1. 調査方法の検討

調査対象，調査時期が異なるため1993年新潟市美術館による調査と今回の調査の単純な比較はできない。しかし，調査結果の数値に大きな違いがみられるため，調査方法の比較検討を試みることにする。

1993年新潟市美術館による調査結果<sup>120</sup>のアンケート回収率は約71%である。131校中

55校が所蔵美術作品ありの回答をした。したがって、美術作品所蔵率は約 42% である。今回のアンケート結果の回収率は約 77% であった。44校中40校の中学校が所蔵美術作品ありの回答をした。したがって、美術作品所蔵率は約 90% となる。

1993 年の新潟市美術館による調査と筆者の調査とで、学校所蔵美術作品の所蔵率に大きな違いがみられる。この要因の 1 つとして調査対象の違いが影響したものと推察する。新潟市美術館は新潟県全域を調査対象としたのに対し、筆者は新潟市を対象とした。新潟県には山間・漁村部に存在する小規模で教員確保困難な中学校が少なからず含まれる。そのため教職員定数の関係で中学校美術普通免許状を所持しない（いわゆる免外や臨時免許による）教員が美術科を担当することがある。また、教職員の入れ替わりが多いのに加え、長年にわたって同一校に勤務する教員が少なく、美術作品収集への意識が働きづらくなるものと推察される。したがって、所蔵美術作品が無いか僅かな点数となり、それが数値に影響を与えたものとする。一方、新潟市内は交通が至便であり、商業施設も多数存在し比較的住みやすい地方公共団体である。したがって、教員が同一中学校に長年勤務するケースが多く、長期的スパンで学校所蔵美術作品収集を進めようとする意識が働きやすくなる。長年勤務した学校に愛着がわき、美術作品を寄贈する美術科教員もいたと推察する。また、表 3-2 にある G1 中学校所蔵美術作品の全てが地元の美術作家から寄贈されたものである。新潟市は校区内在住アーティストが比較的多いため、美術作品寄贈の機会が増す。

今回の調査は短期間でのアンケートであったにも関わらず、新潟市美術館による調査時よりも回収率が伸びた。その要因として、同一地方公共団体内の中学校教育研究団体内の教員による調査であったことが影響している。学校所蔵美術作品の情報を公にすることは、備品管理上好ましくない。学校によっては外部（他の地方公共団体の美術館等）による調査に対する回答を控える学校が出ることが予想される。調査結果の信憑性を高め、短期間に簡素な形で調査するためには、学校関係者による調査が有効である可能性がある。

## 2. 学校所蔵美術作品共同利用による鑑賞の授業実現可能性の検討

表 3-2 をみると、貸借可能な美術作品は97点である。さまざまなジャンルの美術作品が活用可能であり、それらの美術作品が教材として秘める可能性は極めて大きいものとする。

鑑賞の授業を行う上で福田降真は 5 つの観点「技術、技法の観点」「主題や発想の観点」「造形要素の観点」「用途や機能の観点」「美術史的観点」<sup>121</sup> があるとした。福田が述

べるどの観点も縮小印刷された美術作品やレプリカ作品よりも実物の美術作品を活用して授業を行うことがより効果的である。

本節では、福田が述べた5つの観点にもとづき、調査結果が鑑賞の授業で活用できるデータベースとなり得るか検討するものとする。

### (1) 「技術、技法の観点」での検討

「技術、技法の観点」は実物と印刷されたものとで大きな違いが生じる。

平成20年版第2各学年の目標及び内容〔共通自項〕(1)アにおいて、材料がもたらす感情を理解することが求められている。技術、技法は使用する材料（画材）に大きく影響を受ける。同じモチーフでも油彩で表現するのと、水彩で表現するのでは材料（画材）が異なり当然ながら技術、技法も違ってくる。したがって「技術、技法の観点」において材料（画材）に着目することも重要な観点に含むべきものとする。

調査結果をもとに作成したデータベースから貸出し可能な美術作品を活用した「技術、技法の観点」による鑑賞の授業の実現可能性について検討を試みるものとする。具体的には、類似したモチーフで、さまざまな作者が多様な材料（画材）、技術、技法で表現した美術作品から受ける感情の違いを読み解く授業が考えられる。

表3-2の中から山を含む風景をモチーフとして描かれた美術作品を探すと、B6中学校が所蔵する石田朝美の版画『雪山』、E3中学校が所蔵する石井博の日本画『浅間 月光』、H6中学校が所蔵する樋口峰夫の油彩『春眺角田山』、同じくH6中学校が所蔵する片野四郎の油彩『角田冬』が活用可能な美術作品として浮かびあがる。

また、浜辺や漁港など海浜をモチーフとした美術作品であれば、A1中学校所蔵、西村満の油彩『北の浜』、B3中学校所蔵、代谷実の油彩『漁船』、B6中学校所蔵、西村満の油彩『晩秋の浜』、富田徹の油彩『浜小屋』、C1中学校所蔵、西村満の油彩『北の海』、D2中学校所蔵、代谷実の油彩『北の漁港』、E4中学校所蔵、本間武男のシルクスクリーン『青い海 紫雲』、G1中学校所蔵、鈴木州月の水墨『浜へ行く道』、G4中学校所蔵、太田稔の油彩『笹川流れにて』、H6中学校所蔵、今成俊雄の油彩『漁港』の活用が可能となる。その他にも花や静物などをモチーフとした場合でも油彩、日本画、版画、シルクスクリーンなど、さまざまな画材、技術、技法に着目し美術作品を比較検討する鑑賞の授業も考えられる。

## (2) 「主題や発想の観点」での検討

「主題や発想の観点」での題材例として、このデータベースに画像データを加えることで、生徒たちに市内の中学校所蔵美術作品を活用した作品展を企画させる鑑賞の授業が想定できる。

より具体的な授業展開を述べると、貸借可能な美術作品を教師が提示し、それらの美術作品の中から生徒が企画展テーマの主題を考案し、企画展で使用する美術作品を検討する。予想される生徒の反応は、表 3-2 に示した多くの風景画の中から図 3-2 などの作品を活用した「風景に美を見いだした画家たち」を主題とした企画展や、さらに主題をより細分化した「風景に美を見いだした画家たち・冬の新潟」や「風景に美を見いだした画家たち・日常生活」が考えられる。主題をもとに、一つ一つの美術作品を検討し、個人又はグループで企画展として扱う美術作品を検討することが可能である。

企画を考えるだけでなく、生徒らが考えた案の中から、採用可能なものを生徒自ら比較検討し、文化祭や余裕教室を活用した企画展を実施したり美術館の市民ギャラリー等を活用したりして企画展を実現し、題材を発展的に展開できれば、生徒の達成感もさらに高まる。また、新潟市美術館の企画・常設展とリンクさせる形で、中学校所蔵美術作品を活用した企画展を開催することができれば、生徒らが社会に働きかける題材となり、生徒は美術の授業と社会の連環を実感でき、活動のより一層の深まりが期待できる。それは、美術館にとっても来館者増が期待でき、学校と美術館双方にとってメリットのある連携事業となりえる。



図 3-2 C2 中学校所蔵美術作品

(出所 2009 年筆者撮影)

## (3) 「造形要素の観点」での検討

基本的な造形要素として『造形教育辞典』<sup>122</sup>では、色彩・テクスチャ・形態の3点があげられている。しかし、造形要素の扱いについては多様な捉え方があり、この3つ以外にもコンポジションを加える場合もある。テクスチャーは視覚的に認知しようとする主とし

て形のディテールを捉えることとなる。またコンポジションは幾何学的な図の組み合わせだったり、構図だったりする。これらは、大きくくくりとしては形態に含むことが可能である。平成20年版第6節美術の共通事項では「形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること」と記されている。そこで、本稿における「造形要素」とは「形」と「色彩」の2つの文言で表記することとする。

表 3-2 の貸借可能な美術作品の全てが「形」や「色彩」の造形要素の観点で学習することが可能である。当然のことながら、教科書や資料集などの図版を用いた学習より実物の美術作品を目の前にして行う学習の方が、美術作品のディテールが分かり、活用の可能性が広がる。

表 3-2 の美術作品を使った鑑賞の授業展開例として、まず導入段階で美術作品に表現されている「形」や「色彩」など細かな情報を認知させるねらいで、生徒に美術作品の模写をさせる。その後、美術作品に使用されている色に着目させ、それぞれの色彩や油絵の具の盛り上がりなどのディテールがもたらす感情について考える。さらに、印刷した本作品の漁船をはさみで切り取り、さまざまな構図を試し、それぞれの構図がもたらす感覚的な違いを考える授業もできる。

#### (4) 「用途や機能の観点」での検討

この観点は、主として日常生活の中で用いられる工芸品やプロダクトデザインの作品を鑑賞する際に用いる観点であり、機能性を兼ね備えたデザインの美しさを見いだす鑑賞活動である。

表 3-2 を見ると、C7中学校が工芸（染色）を所蔵している。ただし、貸出しが不可となっているため、活用することができない。

表 3-2 の中に、工芸品やプロダクトデザインの作品がほとんどないのには、各中学校の美術科教員が工芸品やプロダクトデザインを美術作品として申告しなかったからと推察する。多くの学校には、入学式、卒業式で使用する大型の花器が存在するが、備品登録されていないものが多いため、美術科教員によってそれらが美術作品として認識されていない可能性がある。今後、各校が所蔵する花器や特色のあるプロダクトデザインの製品について詳細に調査することでデータベースの充実をはかることが可能となるものと推測する。すると、それらの作品が用途を考慮し機能性を損なうことなく、いかにしてデザインの美しさを生み出したかなどについて分析的に鑑賞する授業が可能となる。



### (5) 「美術史的観点」での検討

「美術史的観点」による授業展開として千野茂，西村満，代谷実，新田公彰など新潟市にゆかりのある作家の美術作品や北村西望，入江泰吉のような全国的に著名な作家の美術作品を活用した授業展開が考えられる。それぞれのアーティストの生い立ちや彼らが作品制作を通して何を表現しようとしてきたのかについて，美術館学芸員が調査・研究したことを知識習得する学習活動，図書やインターネットの活用やアーティスト本人へのインタビューを行うなど探求的な学習活動も可能である。

教科書や資料集には日本国内，又は世界的に著名なアーティストによって制作された美術作品が多数掲載されているが，地元在住のアーティスト作品が扱われるのは稀である。地元新潟在住のアーティストが制作した作品を美術史的観点で学習する上で各中学校所蔵美術作品を活用できることが大いに期待できる。

### (6) まとめ

以上の検討を通して，中学校所蔵美術作品を活用することで，実物の美術作品を活用した鑑賞の授業が容易に実現できる可能性が充分にあることが分かった。本システムを構築する初期段階（各中学校の所蔵作品調査，集約作業）では多くの労力がかかる。だが，一度システムを構築すれば，数年おきに各学校の所蔵美術作品の加除を確認するだけで永続的に使用可能である。

## 3. 新潟市以外での可能性

2005年新潟市は周辺13市町村を編入合併し，人口，面積ともに大幅に規模が拡大した。それにともない，新潟市中教研美術部会所属学校数，所属美術科教員数も増加し，平成20年告示中学校学習指導要領総則で求められる中学校間連携による事業展開の可能性が広がったといえる。これは，地方公共団体規模拡大のメリットの一つである。

新潟市に限らず，全国的に2000年代前半期の市町村大規模合併，いわゆる「平成の大合併」があった。全国の多くの地方公共団体で本章に述べたものと類似したシステムを構築できる可能性が高まった。

本章では新潟市を題材として研究を進めてきた。新潟市が設置する中学校数は58校（中等教育学校前期課程含む，分校は本校に含む）である。新潟市と同規模以上の地方公共団

体が設置する中学校では所蔵美術作品を学校間で貸借することにより実物の美術作品を教材化できる可能性がある。しかし、学校数が少ない地方公共団体では同一地方公共団体内の中学校だけでは確保できないおそれがある。そのような場合、同様のシステムを構築した隣接する地方公共団体とシステムを統合することで実現の可能性が増す。

#### 4. 本システムの可能性

年々、国・地方の予算が厳しくなる中で教育予算は減少傾向にある。それにともない各学校の予算、各教科の予算も減少傾向にある。予算を増やすことなく、教員の多忙感も増すことなく、より充実した中学校美術科教育の授業のあり方を模索することがさらに求められる。本システムを継続的に実践する（機能させる）ことができれば、それぞれの中学校が題材開発した情報的資源が蓄積、共有され、さらなる教材研究がすすむことも見込める。また、学校所蔵美術作品の教材としての価値に賛同する地域住民から各家庭が保有する美術作品の貸借、提供を受けることも期待できよう。

### 第6節 残された課題

地方公共団体の規模拡大は行政区変更や行政機能合理化が伴う。したがって、新潟市内でも起きている小規模学校統廃合が伴うことがある。学校の統廃合は、学校所蔵美術作品が紛失又は散逸する危険性へと直結する。統廃合された学校所蔵美術作品を博物館（美術館）に移管するのか、他校へ移管するのか、それとも別な選択肢を模索するかの判断を迫られこととなる。今後、そのような事態に直面した際に慌てることのないよう、統廃合が見込まれる学校は事前に学校所蔵美術作品の移管先の検討をすべきである。

新潟市では市立小中学校図書館蔵書データベース作成が行われた。それぞれの学校の蔵書データベースを学校間、学校と社会教育施設（図書館）間で共有し、学校と学校、学校と図書館が相互に蔵書を貸借できるシステムにつながるものである。そのことで、新潟市立学校と市立図書館の蔵書のデータベースが一体化され、それぞれの蔵書が共有され、授業（事業）で活用することが可能となる。これと同様に、学校所蔵美術作品のデータベースを学校間のみならず同一地方公共団体設置美術館と共有できれば、美術館は学校所蔵美術作品を美術館所蔵美術作品に準じて扱うことができ、美術館での企画展等で活用可能となる。すると、学校所蔵美術作品に対する研究も進み研究成果が学校へ還元されることが

表 3-1 出所 新潟市美術館ホームページ 美術作品リスト（一部抜粋）

成田禎介	草原の燈台	1973	12.7×15.0	紙28.7×35.4	エッチング、アクアチント	B	版	608
成田禎介	工場	1973	29.0×36.0	紙37.4×52.7	リトグラフ	B	版	609
成田禎介	民家と道	1973	36.9×28.4	紙53.2×37.6	リトグラフ	B	版	610
成田禎介	道	1973	29.1×36.1	紙37.6×52.6	リトグラフ	B	版	611
成田禎介	河畔の町	1984	29.3×52.9	紙39.8×62.6	リトグラフ	B	版	612
成田禎介	運河	1984	29.2×54.8	紙39.3×62.8	リトグラフ	B	版	613
難波田龍起	不思議な国の人々B	1985	130.2×97.0	133.8×100.5	油彩、カンバス	B	絵	343
西村満	秋の野(1)	1984	97.0×193.9	113.5×208.0	油彩、カンバス	C	絵	939
新田公彰	望郷の窓(97-1-17)	1996	130.0×194.0	133.2×196.8×4.5	アクリル、カンバス	C	絵	1423
新田公彰	窓(A)	1986	116.7×90.9	123.2×97.5×6.5	油彩、板	C	絵	1430
二村裕子	ZONE1972<2-5>	1972	42.0×90.5	紙53.5×98.5	シルクスクリーン	C	版	113
二村裕子	ZONE73-1-3	1973	70.5×49.0	紙79.0×54.5	シルクスクリーン	C	版	114
二村裕子	ZONE74-2-5	1974	48.3×67.5	紙54.4×79.4	シルクスクリーン	C	版	115
二村裕子	ZONE76-8-1	1976	56.5×69.0	ペーパー70.0×83.0	シルクスクリーン	C	版	116
二村裕子	ZONE77-2-1	1977	48.5×46.5	紙57.2×54.7	シルクスクリーン	C	版	117
二村裕子	ZONE80-5-2	1980	42.1×47.9	紙54.6×59.7	シルクスクリーン	C	版	118
二村裕子	ZONE81-8-2	1981	60.5×64.0	ペーパー74.0×78.0	シルクスクリーン	C	版	119

期待できる。すでに、新潟市美術館ホームページ<sup>123</sup>には、表 3-1 のように所蔵美術作品リストが公開されている。あとは中学校所蔵美術作品のデータベースと統合するだけである。ただし、そのデータベースをどこが管理するのかという課題が残る。

美術作品以外にも、実物の美術作品と同様の教育効果が期待できる教材を所蔵している中学校がある。例えば新潟市立 A 中学校には、昭和31年11月5日に備品登録された神護寺『虚空像』頭像模刻、法隆寺『釈迦如来』頭像模刻、法隆寺『夢違観音』胸像模刻がある。経年による傷みがあるが、教科書や資料集では不可能な教材を立体として捉えることはもちろん、乾漆像の質感を味わうことも可能である。また、新潟市立 N 中学校には、葛飾北斎『神奈川沖浪裏』の主版（第1版）から色版（第2版～第11版）を復刻した木版画がある。この教材では多版多色刷りの方法を視覚的に理解できる教材となっており技法の観点で作品を学ぶことのできる教材として期待できる。美術作品だけでなく、これらをデータベースに加えることも今後検討する必要がある。

小学校は中学校と比較すると歴史の長い学校が多数存在する。したがって中学校に比べより多くの美術作品を所蔵する可能性がある。歴史が長いということは京都市学校歴史博物館の事例でも分かるように、美術的価値の高い美術作品の所蔵の可能性も高いと考えられる。現に明治6年開校の新潟市立 N 小学校には岩田正巳の絵画、昭和7年開校の新潟市立 H 小学校には安宅安五郎がフランス留学中に描いたジャン＝フランソワ・ミレー「落穂拾い」の模写作品が存在することが分かっている。中学校だけでなく小学校が所蔵する美術作品もデータベースに加えることで、教材としての活用可能性が高まり、多様な授業展開が可能となることが期待できる。

残された課題は数多く存在するが、まずは本研究で実施した学校所蔵美術作品アンケート

ト未回答の学校に対し，学校所蔵美術作品の再調査を依頼するとともに「美術作品の貸出し不可」と回答した学校に本システムの意義を理解してもらい，貸出し可能な美術作品数増加を目指す。また，各中学校所蔵美術作品を活用した鑑賞の授業実践を行い，そこから導き出される具体的な成果と課題点も明らかにする必要がある。

表 3-2. 新潟市内中学校所蔵美術作品一覧 1/3 (出所 筆者作成)

学校名	作品の種類	作者名	作品名	サイズ	貸出し可否	備考
A1中学校	絵画(油彩)	富田 徹	秋暮色	100号	貸出し可(要校長の許可)	
A1中学校	絵画(油彩)	片野 四郎	花の冠	50号	貸出し可(要校長の許可)	
A1中学校	絵画(油彩)	近藤 充	雲湧き立つ	50号	貸出し可(要校長の許可)	
A1中学校	絵画(油彩)	西村 満	北の浜	30号	貸出し可(要校長の許可)	
A1中学校	彫刻	高橋 悠	力の痕跡	高さ150cm程度	貸出し不可	
A2中学校	絵画(日本画)	片野 四郎	冬めく	150号	貸出し可(要校長の許可)	
A3中学校	版画(木版画)	佐合 敦	すだく2	30号	貸出し可(要校長の許可)	
A3中学校	絵画(油彩)	松木 靖裕	静物N	F20	貸出し可(要校長の許可)	
A4中学校	絵画(水彩)	月岡 徳恵	旅立ちの季節(とき)	80号	貸出し不可	
A4中学校	絵画(水彩)	五十嵐 道雄	山北の海	40号	貸出し不可	
A4中学校	絵画(水彩)	五十嵐 道雄	新潟の雪 口滞船	50号	貸出し不可	
A4中学校	ミクストメディア	長沢 明	国国数英	30号	貸出し不可	
A4中学校	ミクストメディア	長沢 明	理科VS社会	20号	貸出し不可	
A4中学校	絵画(水彩)	島 文次郎	福島潟浅春 一船溜りー	40号	貸出し不可	
A4中学校	木版画(多色)	高橋 信一	賽の河原	20号	貸出し不可	
A4中学校	絵画(日本画)	齋藤 満栄	清蔭緑風	150号	貸出し不可	
A5中学校	未回答					
A6中学校	絵画(水彩)	月岡 徳恵	三日月湖残照	50号	貸出し不可	
A7中学校	未回答					
A8中学校	絵画(水彩)	島 文次郎	無題	30号	貸出し不可	
A8中学校	絵画(水彩)	月岡 徳恵	芽吹きの頃の湯来亭	50号	貸出し不可	
A8中学校	絵画(水彩)	月岡 徳恵	開墾場夢の跡	50号	貸出し不可	
A8中学校	絵画(水彩)	月岡 徳恵	蟬しぐれ新井郷川	50号	貸出し不可	
B1中学校	未回答					
B2中学校	絵画(油彩)	代谷 実	漁港閑目	100号	不可	
B2中学校	絵画(油彩)	秋山 光	越後悠久の大地	50号	不可	
B2中学校	絵画(油彩)	村山 陽	棒倒し	100号	不可	
B2中学校	絵画(油彩)	河村 源三	花菖蒲	10号	不可	
B3中学校	写真	入江 泰吉	月光菩薩像(東大寺法華堂)	285×225	相談による	
B3中学校	絵画(油彩)	代谷 実	漁船	100号	貸出し可(要校長の許可)	
B3中学校	絵画(日本画)	中野 美於	トウリスツテツア	150号	貸出し可(要校長の許可)	
B4中学校	未回答					
B5中学校	絵画(油彩)	金井 二郎	にいがたみなとショウウいんどウ	100号	貸出し不可(丈夫に取付けされているため)	
B6中学校	絵画(油彩)	西村 満	晩秋の浜	30号	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(油彩)	富田 徹	明けゆく街	30号	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(油彩)	信田 俊郎	SHIMA94-5	100号	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(油彩)	阿部 一央	踊	50号	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(版画)	佐倉 敦	ふぶく	790×430	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(版画)	松田 昭八	トキの幻想	515×345	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(版画)	石田 朝美	雪山	480×655	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(木版画)	Watanabe Kinji	盛秋	480×620	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(木版画)	Watanabe Kinji	残雪	480×620	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(油彩)	片野 四郎	はさ木冬	100号	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(油彩)	富田 徹	浜小屋	100号	直接校長との相談による	
B6中学校	絵画(油彩)	岡本 文彦	バリ展望	100号	直接校長との相談による	
B7中学校	絵画(油彩)	秋山 光	待春	30号	貸出し可(要校長の許可)	
B8中学校	絵画(水彩)	畠山 恒夫	妙高早春	80号	貸出し可(要校長の許可)	
B8中学校	絵画(油彩)	佐野 たいし	風のかたち	15号	貸出し可(要校長の許可)	
B8中学校	絵画(油彩)	西村 満	阿賀遠望	P25号	貸出し可(要校長の許可)	
C1中学校	彫刻(ブロンズ)	北村 西望	来福	高さ 30cm 程度	貸出し可(要校長の許可)	
C1中学校	絵画(油彩)	山田 祐二	風	50号	貸出し可(要校長の許可)	
C1中学校	絵画(油彩)	石井 博	春	30号	貸出し可(要校長の許可)	
C1中学校	絵画(油彩)	西村 満	北の海	20号	貸出し可(要校長の許可)	
C1中学校	絵画(日本画)	片野 四郎	水温む	100号	貸出し可(要校長の許可)	
C1中学校	絵画(油彩)	B.バイスガラン	父と子<ナードムヘ>	80号	貸出し可(要校長の許可)	
C1中学校	絵画(油彩)	不動 健治	ニューヨークウォール街	12号	貸出し可(要校長の許可)	
C2中学校	絵画(油彩)	近藤 直行	祈り	30号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	代谷 実	漁船	30号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	白井 一雄	私の風景	100号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	高橋 秀造	読書	50号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	齊藤 洋	山古志の闘牛	100号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	富田 徹	浜小屋	100号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	齊藤 俊夫	水面	60号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	片野 四郎	青い麦	100号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	新田 公彰	窓	20号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	宮下 正孝	古代からのメッセージ	15号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	江口 正巳	サーカス	8号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(油彩)	畠山 恒夫	オアシス	30号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(水彩)	秋山 光	油槽	50号	貸出し不可(ビスで固定されている)	

表 3-2 新潟市中学校所蔵美術作品一覧 2/3

学校名	作品の種類	作者名	作品名	サイズ	貸出し可否	備考
C2中学校	絵画(水彩)	秋山 光	早春の飯豊連峰	50号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(水彩)	小林 新治	秋	50号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	絵画(パステル)	小林 和夫	光の春	30号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C2中学校	レリーフ(銅板)	亀倉 康之	太陽のもとで	50号	貸出し不可(ビスで固定されている)	
C3中学校	未回答					
C4中学校	未回答					
C5中学校	絵画(油彩)	山田 祐二	窓辺	50号	貸出し可(要校長の許可)	
C5中学校	絵画(油彩)	近松 一雄	無題	10号	貸出し可(要校長の許可)	バラの絵
C5中学校	絵画(油彩)	不明	無題	50号	貸出し可(要校長の許可)	舟の絵
C5中学校	絵画(油彩)	不明	無題	100号	貸出し可(要校長の許可)	風景画
C6中学校	未回答					
C7中学校	絵画(油彩)	大島 真一	テトラボットの中から	100号	貸出し不可	
C7中学校	絵画(油彩)	宮下 正孝	コレクション	100号	貸出し不可	
C7中学校	絵画(油彩)	西村 満	初秋の浜	50号	貸出し不可	
C7中学校	彫金(アルミ板金)	亀倉 康之	草原	80号	貸出し不可	
C7中学校	工芸(染色)	須貝 久美子	水の回廊	100号	貸出し不可	
C7中学校	絵画(日本画)	川合 サキ	語らい	100号	貸出し不可	
C7中学校	書	本間 桑三郎	碎啄	色紙	貸出し可	
C7中学校	書	田中 貞夫	愛	未回答	貸出し不可	
C7中学校	刻字	本間 寿生	萬古清風	未回答	貸出し不可	
C7中学校	書	薫風道人	能力の差は小さいが努力の差は大きい	未回答	貸出し可	
C7中学校	書	倉澤 甚一郎	心ひとつに	未回答	貸出し可	
C8中学校	未回答					
C9中学校	絵画(水彩)	秋山 光	早春の浅草岳	50号	貸出し不可	
C9中学校	絵画(油彩)	西村 満	北の海	50号	貸出し不可	
C9中学校	絵画(油彩)	白井 一雄	私の風景	100号	貸出し不可	
C9中学校	絵画(油彩)	大島 秀三郎	祭にて	100号×2	貸出し不可	
C9中学校	版画(木版画)	吉田 志麻	ニューギニアの祭	60号	貸出し不可	
C9中学校	絵画(油彩)	白井 一雄	モノクローム	100号	貸出し不可	
D1中学校	絵画(日本画)	秋山 光	閑寂の時	60号	許可	
D1中学校	絵画(油彩)	後藤 貞二	古いプールのある風景	60号	許可	
D1中学校	書	和泉 哲章	望	未回答	許可	
D1中学校	書	和泉 哲章	忘足	未回答	許可	
D2中学校	絵画(水墨)	片桐 文畝	孔雀図	120号	貸出し可	
D2中学校	絵画(油彩)	代谷 実	北の漁港	30号	貸出し可	
D2中学校	絵画(油彩)	山田 祐二	窓辺	50号	貸出し可	
D3中学校	所蔵作品なし					
D4中学校	絵画(油彩)	市村 三男三	薔薇	20号	貸出し可(要校長の許可)	
D4中学校	絵画(油彩)	江口 正巳	湖畔の盛り場(野尻湖)	12号	貸出し可(要校長の許可)	
D4中学校	絵画(油彩)	江口 正巳	秋葉山麓の春	8号	貸出し可(要校長の許可)	
D4中学校	絵画(油彩)	真鍋 俱子	N夫人	100号	貸出し可(要校長の許可)	
D4中学校	絵画(油彩)	真鍋 俱子	白いベンチ	80号	貸出し可(要校長の許可)	
D5中学校	未回答					
D6中学校	絵画(版画)	鈴木 力	新発田城	8号	貸出し可(要校長の許可)	
D6中学校	絵画(日本画)	斎藤 和行	太夫浜	50号	貸出し可(要校長の許可)	
E1中学校	絵画(水彩)	久保 千代司	風景画	四ツ切	貸出し不可	
E2中学校	絵画(油彩)	矢能 セキ	稲束を積んだ船	40号	貸出し不可	
E2中学校	絵画(油彩)	矢能 セキ	若き日の思い出	25号	貸出し不可	
E3中学校	絵画(油彩)	増井 勝介	長野県白馬村青鬼集落	30号	貸出し可(要校長の許可)	
E3中学校	絵画(エッチング)	西片 五郎	ドットパターン	25号	貸出し可(要校長の許可)	
E3中学校	絵画(水彩)	玉田 和男	旧新関小学校風景	六つ切り 18枚	貸出し可(要校長の許可)	
E3中学校	絵画(日本画)	石井 博	浅間 月明	10号	貸出し可(要校長の許可)	
E4中学校	シルクスクリーン	本間 武男	青い海 紫雲	8つ切	貸出し可(要校長の許可)	
E4中学校	絵画(油彩)	石井 博作	良夜	100号	貸出し可(要校長の許可)	
E4中学校	絵画(油彩)	荒川 洋子	橋のある風景	100号	貸出し可(要校長の許可)	
E4中学校	絵画(水彩)	秋山(古田) 光	雪の覚路津	50号	貸出し可(要校長の許可)	
E5中学校	絵画	秋山 光	金津好日	50号	貸出し可(要校長の許可)	
E5中学校	絵画(水墨)	早津 剛	雪国の家	80号	貸出し可(要校長の許可)	
E5中学校	彫刻	原田 哲男	友情	未回答	貸出し不可(前庭に設置)	
E6中学校	未回答					
F1中学校	絵画(油彩)	呉 斌	ル・レクチェ	6号	貸出し可(要校長の許可)	
F1中学校	絵画(油彩)	新田 公彰	やまぼうし	10号	貸出し可(要校長の許可)	
F1中学校	彫刻	千野 茂	F嬢	頭像(台座付き)	貸出し不可(重量があり、移動が困難なため)	
F2中学校	未回答					
F3中学校	絵画(水彩)	田中 武夫	はさ木	125×55 cm	貸出し可(要校長の許可)	
F4中学校	絵画(油彩)	秋山 光	光陰	100号	貸出し不可	
F4中学校	絵画(水墨)	早津 剛	無題	120号	貸出し不可	
F5中学校	所蔵作品なし					
F6中学校	絵画(油彩)	ラビト	山の風景	20号	貸出し可(要校長の許可)	複製の可能性あり



表 3-2 新潟市中学校所蔵美術作品一覧 3/3

学校名	作品の種類	作者名	作品名	サイズ	貸出し可否	備考
G1中学校	絵画(水墨)	鈴木 州月	白山を望んで	50号	貸出し可(要校長の許可)	
G1中学校	絵画(水墨)	鈴木 州月	浜へ行く道	50号	貸出し可(要校長の許可)	
G1中学校	絵画(油彩)	古田 修	南フランスの風景	50号	貸出し可(要校長の許可)	
G2中学校	絵画(油彩)	畠山 恒夫	ボロボール 道路(ジャワ島)	100号	貸出し可(要校長の許可)	
G2中学校	絵画(日本画)	本間 哲裕	風韻	30号	貸出し可(要校長の許可)	
G2中学校	彫刻	宮越 敏夫	森の詩		不可(中庭固定なので不可)	
G3中学校	絵画(油彩)	大島 秀三郎	新潟の下町風景	30号	貸出し可(要校長の許可)	
G3中学校	絵画(油彩)	ロシア・ハバロフスクの子どもたち	不明	30号	貸出し可(要校長の許可)	4作品1セット
G3中学校	彫刻(セメント)	不明	子等よ大空にはばたけ		不可(校門脇に設置)	
G3中学校	絵画(水墨)	不明	不明(佐潟の様子を描いたもの)		貸出し可(要校長の許可)	
G4中学校	絵画(版画)	渡辺 欣次	蒲原晩秋	12号	貸出し可(要校長の許可)	
G4中学校	絵画(パステル)	甲田 小知代	不明	12号	貸出し可(要校長の許可)	
G4中学校	絵画(パステル)	甲田 小知代	不明	4つ切り	貸出し可(要校長の許可)	
G4中学校	絵画(油彩)	太田 稔	笹川流れにて	30号	貸出し可(要校長の許可)	
G5中学校	未回答					
G6中学校	所蔵作品なし					
G7中学校	彫刻(ブロンズ)	山本 圭介	巢立ち	35×40×100cm	貸出し不可(生徒玄関に設置)	
G7中学校	彫刻(大理石)	新田 公彰	若い力	22×60×100cm	貸出し不可(校門脇設置)	
G7中学校	絵画(油彩)	渡辺 弘	おさげの女	20号	貸出し不可	
G7中学校	絵画(油彩)	富田 徹	伊豆の港	20号	貸出し不可	
G7中学校	絵画(油彩)	市橋 哲夫	夢	4号	貸出し不可	
G7中学校	絵画(油彩)	大森 ゆかり	Aussie Breeze	80号	貸出し不可	
G7中学校	絵画(油彩)	新田 公彰	いちじく	10号	貸出し不可	
G7中学校	絵画(油彩)	富田 徹	北の浜	100号	貸出し不可	
G8中学校	未回答					
H1中学校	所蔵作品なし					
H2中学校	絵画(油彩)	真島 良範	望郷	10号	原則として貸出し不可	
H2中学校	絵画(油彩)	柴田 長俊	双星	20号	原則として貸出し不可	
H2中学校	絵画(油彩)	不明	門出	10号	原則として貸出し不可	
H2中学校	絵画(油彩)	村山 陽	樹間	10号	原則として貸出し不可	
H2中学校	絵画(油彩)	村山 陽	雪景妙高	20号	原則として貸出し不可	
H2中学校	絵画(油彩)	村山 陽	期末考査	10号	原則として貸出し不可	
H2中学校	絵画(油彩)	小柳 耕司	森の朝	10号	原則として貸出し不可	
H3中学校	絵画(水墨)	坂井 初雪	寂寥	10号	貸出可(条件つき)	
H3中学校	絵画(油彩)	本間 哲裕	未回答	50号	貸出可(条件つき)	
H3中学校	絵画(油彩)	道見 直江	未回答	20号	貸出可(条件つき)	
H3中学校	絵画(油彩)	中野 雅友	ユーカリ	100号	貸出可(条件つき)	
H4中学校	彫刻	不詳	躍進	1m30cm	貸出し不可	
H4中学校	絵画(油彩)	金子 善次郎	郷土の伝説	1100×900	貸出し不可	
H4中学校	絵画(油彩)	金子 善次郎	はざ木	8号	貸出し不可	
H4中学校	絵画(油彩)	三富 興一	ばら	8号	貸出し不可	
H4中学校	彫金	不詳	富士山	20cm×25cm	貸出し不可	
H4中学校	書	相馬 御風	いさや励まん	色紙	貸出し不可	
H4中学校	書	羽黒山	心如鐵石	扁額	貸出し不可	
H4中学校	書	山崎 正平	不動心	色紙	貸出し不可	
H4中学校	写真	岡田 紅陽	富士山	未回答	貸出し不可	
H5中学校	絵画(油彩)	佐々木 吾郎	静物	50号	貸出し可(要校長の許可)	
H5中学校	絵画(油彩)	長谷川 清晴	風景	50号	貸出し可(要校長の許可)	
H5中学校	絵画(油彩)	真島 伝次	アジサイ	50号	貸出し可(要校長の許可)	
H5中学校	絵画(油彩)	大橋 広治	初冬の街	60号	貸出し不可	
H5中学校	絵画(油彩)	樋口 峰夫	湯辺り追想	100号	貸出し不可	
H5中学校	彫刻	幸田 顕	心豊かに	30×30×75	貸出し可(要校長の許可)	
H5中学校	絵画(油彩)	北村 英子	コスモス	20号	貸出し可(要校長の許可)	
H6中学校	絵画	長谷川 清晴	ある日の出来事 都会	未回答	貸出し可(要校長の許可)	
H6中学校	絵画	長谷川 清晴	Sand Collection 99-11	未回答	貸出し可(要校長の許可)	
H6中学校	絵画	小黑 隆彦	自転車小屋	未回答	貸出し可(要校長の許可)	
H6中学校	絵画	真島 伝次	陽光	未回答	貸出し可(要校長の許可)	
H6中学校	絵画	樋口 峰夫	浮島	150号	貸出し不可	
H6中学校	絵画	樋口 峰夫	春眺角田山	未回答	貸出し可(要校長の許可)	
H6中学校	絵画	今成 俊雄	漁港	未回答	貸出し可(要校長の許可)	
H6中学校	絵画	片野 四郎	青い麦	100号	貸出し可(要校長の許可)	
H6中学校	絵画	片野 四郎	角田冬	100号	貸出し可(要校長の許可)	

## 第4章 人的資源を活用した事例 (教員と美術館学芸員の連携)

### 第1節 学校と美術館の連携の概観

#### 1. 研究上の問題の背景

ここでは中学校美術科における美術館活用のあり方を探る。具体的には、学校と美術館の連携について先行事例をもとにそれらの現状と課題を整理し、中学校美術科と美術館が連携した授業のあり方について研究の方向性を見いだす。それをもとに実践を行い考察することとする。

#### 2. 学校と美術館の接点

美術館の設置目的を法的に見ると、「博物館法」に「国民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的とする」<sup>124</sup> とある。また、独立行政法人国立美術館法（平成11年12月22日法律第177号）によると「作品その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、これに関連する調査及び研究並びに教育及び普及の事業等を行う」<sup>125</sup> とある。美術館は作品収集・保存・研究だけでなく、幼児から高齢者まで幅広い年齢層を対象とした事業を通し、公衆に対し美術の普及・啓発活動を行うものと位置付けられているのが分かる。美術館の事業対象者について、ふじえみつるは「美術館は圧倒的に『大人の世界』である。つまり、子どもが今まで遠ざけられ過ぎていた」<sup>126</sup> と述べた。美術館の事業対象は美術愛好者を中心としてきたと解することができる。

小・中学校の図画工作・美術の授業は、学級、学年を対象とした授業形態をとることが多い。学習指導要領に基づき他教科との連携、道德教育、生徒指導との関連など、さまざまな要素を考慮し指導計画が作成される。在学する全ての児童・生徒を対象とする。

学校と美術館の美術教育は、授業（事業）目的、授業（事業）対象が異なるため異質な印象を受けるかもしれない。だが、図画工作・美術の学習内容をみていくと、学校が美術館を活用する場面（「総合的な学習の時間」の職場体験や美術科以外の学習活動、時には道德教育の場）がある。「美術を愛好する心情を育てる」という美術館と共有可能な教育目標も設定されている。さらに、平成20年版では「美術館・博物館の積極的活用」<sup>127</sup> が明記されており、教員は美術館活用・実践が求められている。



以上のことから学校と美術館の両者の垣根を取り払い「学校教育と社会教育の連携」の必要性が生じていることが分かる。

### 3. 学校と美術館の連携事業の実際

本項では、学校と美術館による連携事業を、筆者の勤務校が所在する新潟県における近年の事例、全国的事例、先進的な取り組みとして連携事業に学校側が深く関わっている事例の順に概観する。

#### (1) 新潟県における事例

新潟県立近代美術館（新潟県長岡市）では、美術館や作品への理解を深めるため学校等に学芸員を派遣し、美術鑑賞講座やワークショップを行っている<sup>128</sup>。図画工作・美術の授業だけでなく、教育課程のさまざまな場面で活用可能である。新潟県立万代島美術館（新潟県新潟市、新潟県立近代美術館の分館）においても類似した事業が実施されている<sup>129</sup>。

小林古径記念美術館（新潟県上越市）では、上越市出身の小林古径の作品を収蔵しており、素描作品の他に古径の芸術性をわかりやすく伝えるため「デジックアート（原寸大デジタル複製画）」を作成し、市内の学校での活用を図っている。2010年は小学校2校で実施された<sup>130</sup>。

#### (2) 全国的な事例

世田谷美術館（東京都世田谷区）では、1986年開館以来、世田谷区教育委員会主催で「美術鑑賞教室」が実施されてきた。区立小学校の全ての4年生を対象とした事業である。児童たちには「美術鑑賞ガイド」、教員には『子どもと美術を楽しむために』というパンフレットが事前に配られ、「鑑賞リーダー（ボランティア）」のもと、少人数グループで美術館内の作品を鑑賞する活動が行われている<sup>131</sup>。

名古屋市美術館（愛知県名古屋市）では、学校との連携事業として「アートカード」（所蔵作品や国内外の美術作品が印刷されたカード）の貸出しを行っている。これは、学校で使用されることを念頭においてつくられ、カードゲームの要素を取り入れ、遊び感覚で美術作品の細部を鑑賞することが可能である<sup>132</sup>。これと類似した事業は独立行政法人国立美術館（東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術

館、国立新美術館）でも実施されている<sup>133</sup>。

損保ジャパン東郷青児美術館（東京都新宿区）では、小・中学校の児童・生徒を対象とした無料見学会を実施しており、美術館でのマナー指導、作品鑑賞方法を、リーフレット等を用いて学芸員が解説する事業が実施されている<sup>134</sup>。

### (3) 先進的な事例

愛知県美術館（愛知県名古屋市）では、学校と美術館が相互協力し、児童・生徒に美術を見る楽しみを伝えるため、企画展ごとに、作品の見方や鑑賞の補助資料について教員と学芸員による意見交換の機会を設けている。そこでは、美術館利用やワークシートなどの鑑賞補助資料や鑑賞学習をめぐるさまざまな問題について参加者と美術館或いは参加者同士による意見交換がなされている。また、学芸員による開催中の企画展説明、美術館所蔵作品を活用した教員による実践発表や指導案作成、それらの美術館ホームページでの配信、美術館の過去の展覧会図録を学校図書館へ寄贈する事業が行われている<sup>135</sup>。

徳島県立近代美術館（徳島県徳島市）では学校と美術館を結ぶ鑑賞教育を実践的に研究するための研究会「鑑賞教育推進プロジェクト（小・中学校教員、大学教員、学芸員で構成）」が2002年度から実施され「鑑賞シート」や「鑑賞シート指導の手引き」が作成されてきた。鑑賞教育を幅広く研究し、学校現場の意見を取り入れる場となっており、シートを使った実践と普及で成果をあげている<sup>136</sup>。

また、岡山県立美術館（岡山県岡山市）は小・中学校教員や大学研究者らが連携し、2006年に開催した特別展『国吉康雄展（岡山市出身の作家）』に先立ち学校教員を対象とした資料『教室でもできるあなたにもできる美術鑑賞ガイド』<sup>137</sup>を刊行し、図画工作・美術の鑑賞の授業で活用できる資料を作成した。

滋賀県立近代美術館（滋賀県大津市）では、教室で鑑賞の授業が手軽に実施できる図版セット「鑑賞授業プログラム・パック（B2判大型図版、A4判小型図版、CD-Rに収録された画像データ、プログラム・パック使用の手引き）」の貸出しを行っている。ここに含まれるプログラム・パック使用の手引きは、教員と学芸員の協働により開発されたもので、同梱された図版を活用した題材が8例掲載されている<sup>138</sup>。

大原美術館（岡山県倉敷市）では、倉敷市立倉敷西小学校、倉敷市立倉敷東小学校を対象に休館日に全校児童が一斉に来館する「学校まるごと美術館」が実施されている。事前に学校教員と美術館スタッフとが打ち合せを重ね、当日は学校教員がプログラムを進行し、

美術館スタッフはその補助にあたる。ギャラリートーク、鑑賞を通しての文章表現、模写、美術館の機能を知る活動などが実施されている<sup>139</sup>。

#### 4. 学校と美術館の連携形態と本研究の方向性

前項「新潟県における事例」、「全国的な事例」で取り上げたのは、学芸員が主導権を持つ事業である。これらは美術館が開発した事業を学校が選択し活用するものとなっている。教員にとって、準備が容易であるというメリットがあるが、常に学校のニーズにマッチしているわけではないというデメリットがある。

「連携事業に学校が深く関わっている事例」で取り上げたのは、教員と学芸員が綿密なコミュニケーションを図り教材研究しているもの、教員が教材研究・検討の場面に参加するなど積極的に連携事業に参加している事業である。教員と学芸員の綿密なコミュニケーションと協働のもと研究と事業展開がなされている。

以上をふまえると、これまで概観してきた学校と美術館の連携事業は、以下の2つに分類できる。

##### A 型 美術館主導型

美術館が主体となり事業開発・実践を行う形態である。美術館が実施する事業を学校が選択し、授業等で活用する。

##### B 型 学校と美術館協働型

学校と美術館が協働して事業開発・運営を行う。大学の研究者が間に入り事業遂行される事例もある。

筆者は学校教育の場における学校と美術館の連携は上記のB型の形態を重視すべきと考える。教育計画立案の場面で、美術館を活用し題材開発するのは教員の役割であり、児童・生徒に日常的に接し、実態を把握しているのは教員だからである。

塚田美紀は学校と美術館が連携する上での課題として、美術館側には「学校教育に関心のあるコア・スタッフを美術館が育成すること」<sup>140</sup>、学校側には「学校との連携において美術館が教師に対して行う支援は、あくまで教師が主体性を発揮するためのものでなければならない」<sup>141</sup>と述べた。これは美術館のスタッフ不足と、学校と美術館の事業に対する教員の消極的姿勢の問題を指摘した言葉である。

本研究ではB型の形態での学校と美術館の連携のあり方について、教員と学芸員の人的なつながりをもとにした実践「体育祭マッチフラッグの制作と鑑賞」を通して考察する。

## 第2節 実践題材「体育祭マッチフラッグの制作と鑑賞」の概要

新潟市立大形中学校（2010年当時筆者勤務校）において教員が主体となり美術館と連携し開発・実践した題材「体育祭マッチフラッグの制作と鑑賞 - 共同制作の魅力 - 」の概要を述べる。

### 1. 題材の全体計画

#### (1) 実施時期及び対象生徒

2010年5月～12月

新潟市立大形中学校第3学年生徒（124人）

#### (2) 題材設定の理由

題材設定の理由は3点ある。1点目は平成20年版の第3指導計画の作成と内容の取扱い2の(4)に「互いの個性を生かし合い協力して創造する喜びを味わわせるため、適切な機会を選び共同で行う創造活動を経験させること。また、各表現の完成段階で作品を発表し合い、互いの表現のよさや個性などを認め尊重し合う活動をするようにすること」をふまえ、中学校美術科の学習として成立させることができることにある。2点目は生徒にとって体育祭は学校行事の中で関心が高く、意欲的に取り組む行事であることがある。美術の授業と体育祭をリンクさせることで、生徒の創作意欲を引き出すことが期待できるからである。3点目は、完成した作品は、学校行事の中で活用できるため、日常活動の中で鑑賞することができる。生徒は美術作品が生活を豊かにする役割を果たしていることを体験的に感じとることが可能と考えたからである。

#### (3) 目指す生徒像

本実践では、美術が日常生活（社会との連環）の中に位置づけられた文化であり、ダイナミックに社会に働きかける力を持つ文化であることを実感できる生徒を目指す。

#### (4) 題材の流れ

## 第1段階 「体育祭マッチフラッグ」制作

2010年5月～7月 全10時間

場所 新潟市立大形中学校美術室

## 第2段階 展示Ⅰ「体育祭マッチフラッグ」展示

同年9月4日（土）体育祭当日

場所 新潟市立大形中学校グラウンド

## 第3段階「マッチフラッグ展」

同年12月6日（月）～12月10日（金）

場所 新潟市立大形中学校「余裕教室」

### (5) マッチフラッグについて

財団法人日本サッカー協会オフィシャルレポート『MATCH FLAG PROJECT 2010 SOUTH AFRICA OFFICIAL REPORT』<sup>142</sup>によると「MATCH FLAG」とは、サッカーにおける対戦国同士の交流を象徴する旗のことである。両国の国旗に使用されるモチーフを1つの布に表現し、試合中スタジアムに展示する。日比野克彦がプロデュースしたものである。

筆者は、2010年4月18日に新潟市新津美術館<sup>143</sup>で開催されたワークショップに参加した。新津美術館スタッフ運営のもと日比野克彦も参加し、一般市民を対象とし実施された。同様のワークショップは、FIFAワールドカップ南アフリカ大会でのスタジアム展示に向け、全国12都市で開催された<sup>144</sup>。

「MATCH FLAG」をヒントとして筆者が生徒らとともに制作したのが「体育祭マッチフラッグ」である。体育祭を盛り上げる目的で赤・青・白・黄のチームカラーを用い制作する。

### (6) 本研究における題材展開上の留意点

研究と実践を進める上でより効果的な授業を構築するには、教員と学芸員の両者が持つ強みを活かした題材開発が必要と考える。

筆者は教員が持つ強みを次の4点にあると考えた。

「地域密着型の施設（学校）をいつでも使用できること」

「中学生への対応能力」

「授業実践経験の豊富さ」

「授業実践で図版等の著作物使用時の著作権適用の緩やかさ」

また、学芸員が持つ強みを次の4点にあると考えた。

「アーティストとの人的ネットワーク」

「作品展示のための専門的知識」

「美術作品の展示・管理に適した施設の使用」

「美術作品の専門的知識や研究の蓄積」

本研究で展開する題材では、両者が持つ強みの中から教員が持つ強み「地域密着型の施設（学校）をいつでも使用できること」、「中学生への対応能力」、「授業実践経験の豊富さ」、「授業実践で図版等の著作物使用時の著作権適用の緩やかさ」及び学芸員が持つ強み「アーティストとの人的ネットワーク」、「作品展示のための専門的知識」を意識して活用する。

## 2. 美術館（荒井学芸員）のワークショップが本題材の開発に果たす役割

2010年4月18日、新津美術館で開催されたワークショップ「MATCH FLAG PROJECT」での筆者の体験が題材開発のきっかけであり、荒井学芸員が美術館で実施したワークショップが題材開発する上でのヒントとなった。

筆者はスポーツとアートは異質なものというイメージを持っていたが、本ワークショップに参加したことで異質なものを組み合わせることで新たな可能性が生まれることが分かった。具体的には、美術の授業と生徒の日常生活（体育的な行事や他教科の授業）をリンクさせた活動により美術の授業と生徒の日常生活の両方が生き生きとしてくるのではないかと感じた。同時に教科書や指導書、美術教育資料集等に掲載された題材例だけでなく、アーティストが社会の中で実践している活動の中にも美術の題材開発する上でのヒントとなる事例が存在することにも気付かされた。

題材後半、「体育祭マッチフラッグ」と「MATCH FLAG」を同時に展示する場面を設定することとなる。教員は日頃、アーティストと接することがないため、アーティストを活用或いは連携した題材を開発することは困難である。一方、学芸員は職務上アーティストと接する場面が多いので、当然のことながらさまざまなアーティストとの人的つながりがある。

### 3. 「体育祭マッチフラッグの制作と鑑賞」実践の経過

#### (1) 実践上の問題と対処

全体計画後半の展示II「マッチフラッグ展」（1時間 2010年12月）の実現に至るまで、2つの問題が存在した。

一つは、展示場所の問題である。展示II「マッチフラッグ展」は、新津美術館で行なうことを模索した。ここで問題となったのは、屋外展示した「体育祭マッチフラッグ」を美術館内に展示する際、砂，埃，カビ，虫などの混入のおそれがあり，他の美術作品を傷める危険があることである。美術館内での展示は慎重を期す必要があるため，展示場所を中学校に変更することで解決した。

二つ目は，著名なアーティストが関わった作品貸借の問題である。教員がアーティストに作品借用依頼するのは，手続きが不慣れであり，アーティストとの人的ネットワークがないため，多大な労力と時間を要するおそれがある。また，経済的負担も覚悟する必要がある，実施困難となるのが予想される。アーティストからの作品借用交渉（借用費用を含む）を荒井学芸員が担当することでスムーズに事が進んだ。

#### (2) 実践の経過 展開1（1時間目）導入

勤務校美術室内で大型テレビに「日本サッカー協会ホームページ」を投影し，生徒たちに「MATCH FLAG PROJECT」の概要説明をした。参加国選手だけでなく，サポーターの相互交流を象徴する作品である点に多くの生徒が共感するとともに，「2010FIFA ワールドカップ 南アフリカ大会」開催が間近であることも影響し生徒は強い興味を示した。

大形中学校でも，チームどうしの交流を象徴するフラッグを制作し，体育祭を盛り上げることを生徒に提案したところ，ほぼ全員が強い制作意欲を示した。



#### (3) 実践の経過 展開2(1時間目) アイデアスケッチ

A6判サイズ白上質紙に1人3種類以上を目  
標に制作した。着色は「クーピー」を用いた。（出所 2010年6月筆者撮影）

図 4-1 アイデアスケッチ

(図 4-1)

#### (4) 実践の経過 展開 3 (2・3 時間目) 下絵制作

A4判サイズ白上質紙に 1 人 1 種類以上を目標に制作した。着色は「クーピー」を用いた。



図 4-2 デザインコンペ

(出所 2010 年 6 月筆者撮影)

#### (5) 実践の経過 展開 4 (4 時間目) デザインコンペ

班 (4 人～5 人) ごとに、全員の下絵を黒板に展示し、班員で話し合い、それぞれの班が採用する下絵を選んだ。

(図 4-2)



図 4-3 布貼り

(出所 2010 年 6 月筆者撮影)

#### (6) 実践の経過 展開 5 (4・5 時間目) 下絵転写

全紙大白ボール紙に、班員で役割分担をし、下絵転写作業を行った。

#### (7) 実践の経過 展開 6 (5～10 時間目) 布貼り

下絵が転写された白ボール紙に、班員で協力し、古着や不要になった布を必要な形に切り取り、貼った。様々な布の中からどれを使うか、班の中で意見が食い違うことが多く、生徒たちは多様な意見を 1 つにまとめるのに苦労している様相にあった。

(図 4-3)



図 4-4 作品完成

(出所 2010 年 7 月筆者撮影)

#### (8) 実践の経過 展開 7 (10 時間目) 作品完成



各クラス 6 作品（班で 1 作品）， 4 クラス合計 24 作品が完成した。

（図 4-4）

#### （9）実践の経過 展開 8 展示Ⅰ「体育祭マッチフラッグ展」

体育祭当日，入場門脇に「体育祭マッチフラッグ」を展示する。全校生徒は「体育祭マッチフラッグ」脇を通過し，体育祭の競技に挑む。場内アナウンスを通して，体育祭を観にきた保護者や地域住民に対し，展示案内放送をし，作品を紹介した。



図 4-5 「体育祭マッチフラッグ」全作品

（出所 2010 年 9 月筆者撮影）

#### （10）実践の経過 展開 9 展示Ⅱ「マッチフラッグ展」

展示Ⅱ「マッチフラッグ展」での展示作品は「2010 FIFA World Cup 南アフリカ大会」日本対オランダ戦でスタジアムに展示された 2 枚，日本対カメルーン戦でスタジアムに展示された 1 枚，本校 3 年生が制作した「体育祭マッチフラッグ」24 枚である。「MATCH FLAG PROJECT」のコンセプト同様「アートとスポーツのコラボ」を展示テーマとした。



図 4-6 「マッチフラッグ展」

（出所 2010 年 12 月筆者撮影）

展示準備では，事前に荒井学芸員から「可能な限り作品に触れる機会を少なくすること」や「作品の損傷しやすい箇所はどこか確認して作業をすること」など留意事項の説明を受け，筆者と有志生徒らとともに展示準備を行った。

生徒の「マッチフラッグ展」鑑賞は 3 学年生徒だけでなく全校生徒を対象とし，クラス毎に美術の授業時に実施した。保護者及び地域住民への公開は指定した期日に実施し，展示期間中は，作品への故意又は過失による損壊防止のため，作品監視者がいないときは展

示室を施錠した。

「マッチフラッグ展」初日、本題材に関わった荒井学芸員が来校し、生徒とともに作品鑑賞する場面もあった。

### 第3節 実践題材「体育祭マッチフラッグの制作と鑑賞」の検証

#### 1. 展示Ⅰ「体育祭マッチフラッグ」展示後の生徒の反応

##### (1) 美術への興味

体育祭後、生徒に対しアンケートを行った。『「体育祭マッチフラッグ」制作を通して、美術への興味がより高まった』と回答した生徒は114名中72名（約60%）であった。

約6割以上の生徒が美術への興味の高まりを感じたと回答した。残りの4割の生徒の中には、本題材実施以前から美術を好意的に受け止めていた生徒が含まれる。また、本活動を通して「美術への興味が下がった」と回答した生徒がいないことから、ほとんどの生徒が好意的に受け止めたといえる。

##### (2) 「体育祭」の意識の変化

「前年度までの体育祭と比較し今年度の『体育祭』との違いを感じるか」の質問に対し「感じる」と回答した生徒は93人（約76%）であった。4人中3人以上の生徒が違いを感じたと回答した。

要因は2つ考えられる。1つは、最高学年となり、体育祭の企画・運営に能動的に関わる場面が増えたこと。もう一つは「体育祭マッチフラッグ」の有る無しによる場の雰囲気の違いを感じたものと思われる。

あると回答した生徒の感想（自由記述）は次の3種類に分類できる。

##### <場の雰囲気の変化>

「色鮮やかになった」「作っている時に、体育祭への楽しみが増えた気がするし、体育祭でもマッチフラッグの存在感があった」「今までの体育祭に比べてとてもきれいになっていた」「やっぱり自分たちが一つ一つ作ったものが大舞台に貼られているのは、嬉しいです。テンションがあがります。だけど、マッチフラッグがない

と他の中学校と同じでつまらない」

#### <共感する感覚の高まり>

「みんなが団結している感じがあるし、4連合（チーム）は敵どうしだけど、体育祭のもとでは一体になっている感じもある」「今までの体育祭は『○連は○連』『うちだけが3冠とる！』みたいな対決心がスゴくて他連との交流なんて無かったけど、体育祭の最後に今までなかった全校生徒での円陣をやったり、たくさんの交換エールなどがあった」「マッチフラッグがあるとみんなで作ることができ、係に入っていない人でも参加できて嬉しかった。無いと4連合（チーム）がピリピリした感じになる。でも、あると4連合がぶつかり合いながらも、体育祭という場で1つになっている気がする」

#### <共同制作の良さへの気づき>

「色や布の柄の違いなども他の人の考えなどが入るので、よりいいものができたと思います」「一人でしみじみやるより、みんなでわいわいやった方がやっていて楽しいし、他の人の意見も聞けて新たな案が出たりするということがあったので、共同制作は良かった」

## 2. 展示II「マッチフラッグ展」鑑賞後アンケート及びインタビュー

生徒たちには、マッチフラッグ展が実現したのは荒井学芸員がアーティストの日比野克彦に対し、作品の貸出し交渉をしてくれたことが大きかったことを伝え、感想を書かせた（自由記述）。以下はその抜粋である。

#### <感想>

「マッチフラッグは、言葉が通じなくても国と国がつながっていることを表現していて、本当にすごいと思いました。機会があればまたみたいです」「体育祭のために作ったのにこんな大事（おおごと）になるとは思いませんでした」「大形（大形中学校）にもこんなすごいものが飾られて誇らしいです」「実物のマッチフラッグが見られて良かったです。自分たちで作ったものよりも丁寧で心がこもっていると感じました。日本と対戦国との一体感があって、きれいでした」「大形中で作ったマッチフラッグと南アフリカに行ってきたマッチフラッグを一緒に見ることができてとても嬉しかったです。どちらのマッチフラッグも人と人を、世界の人々とつ

ながっている気がしました。カメルーンとのサッカーの試合に行ったように感じました。いろいろな形で表現して気持ちを伝えるのは、とても面白いなあと感じました」「この企画がなかったら、一生マッチフラッグなんて知らなかったと思います。新しいアートを知ることができて良かったです」

### ＜学芸員に対するコメント＞

「W杯でも有名なマッチフラッグをこんな中学とコラボしてくれたことに対して学芸員の皆さんには本当に感謝しています！最初は、なんかめんどくさいなあなんて思っていた但实际上やってみると楽しくて仲間との交流がすごい良かったです。いつかそれは自分たちの思い出の1つとなり、良い経験ができたなあと思っています！そんな機会を作ってくれた学芸員さんにはありがとうという言葉しかないです」、「滅多にみる事ができない貴重な作品にも関わらず、実際に観ることができるようにして下さってありがとうございました」

生徒たちがアーティストの作品・活動へ興味を示すに至ったのは、自分たちが実際に作品制作をしたこと、アーティストに関わった実物の作品を目にしたこと、それらと自分たちの作品が同列で展示され、一般公開されたことが大きく影響した。

### 3. 荒井学芸員の反応

荒井学芸員が勤務する美術館ホームページに次の文章が掲載された<sup>145</sup>。

当館で春に日比野克彦さんと一緒に作った MATCH FLAG はたしかに南アフリカに渡り、選手たちを応援してアフリカの風になびいたのです。実はその MATCH FLAG がはるばる新潟に帰ってきました！！雄姿を見せてくれているのは東区の大形中学校。（途中省略） MATCH FLAG のアイデア（対戦国と自国をミックスしたフラッグの制作）をおもしろいと思った S 先生、中学校の体育祭に、各チームの色をあしらった中学校版 MATCH FLAG を 3 年生のみなさんと制作。新津美術館のワークショップをヒントにこんなことしましたよ、と知らせてくれたのです。（途中省略）オープンスクールの機会に子どもたちの作品を展示したいというお話から、それではホンモノの MATCH FLAG も展示したいですね、と夢が膨らみ、日比野さんにお問い合わせしたところ、ちょうど凱旋

ツアーをしたいと思っていたということで、人や地域を結んでゆく MATCH FLAG の精神にふさわしいと特別にお貸出しくださったのでした。というわけでただいま期間限定で大形中学校の一教室にはワールドカップの MATCH FLAG と大形中学校体育祭フラッグが奇跡の競演を果たしています。（後半省略）

また、本題材終了後、荒井学芸員からメールを通して次の感想をもらった。

美術館が学校と連携しようというとき、真っ先にアウトリーチがあげられることに、私自身も多少抵抗を感じているところです。実際、自分もそういうアウトリーチをやってきたし現にやり続けてもいるのですが、通常の授業とどうつながり、からみあっていくのか、というところに対して美術館はとても無責任だなあと反省する場面も多々ありました。あくまで先生が主体となり、よい意味で美術館や学芸員を利用して何か面白いアイデアが出てきたら『それいいね』と積極的に取り込みながら組み立てていく授業は自分にとっても学ぶところが大きかったです。

荒井学芸員の文章には美術館の事業がきっかけとなり中学校の授業へと発展し、アーティストの共感と理解を得、美術館の事業と学校の授業、双方の活動に深まりを持たせることができたことへの喜びがつづられている。また、学校と美術館が連携する上で主導するのは教員であることの必要性にも触れている。

教員が主導権を持ち、美術館や学芸員の力を活用した授業を展開することで題材展開の幅が大きく広がった。それは、教員、学芸員の双方にとって新たな発見、気付きの場であった。

#### 4. アーティストの反応

荒井学芸員からもらった感想の中に「ホンモノの MATCH FLAG も展示したいですね、と夢が膨らみ、日比野さんをお願いしたところ、ちょうど凱旋ツアーをしたいと思っていたということで、人や地域を結んでゆく MATCH FLAG の精神にふさわしいと特別にお貸出しくださったのでした」とあるように、アーティストである日比野が、筆者と荒井学芸員で展開している題材に賛同したことで作品貸出しの機会を得た。アーティストが学校を含めた社会に対し、自分の作品が絡むことを望み、協力的に対応する用意があることを示している。

## 5. 社会の反応

### (1) 地域住民の反応

体育祭を觀に来た保護者，地域住民から「すごく斬新で面白い取り組みですね」「来年もやるなら古着を準備しておきますよ」など好意的な意見を多数聞くことができた。

保護者，地域住民から物的支援（古着・布の寄付）を受けることを約束してもらえたのは大きな成果である。それは，本題材を単年度で終わらせず次年度以降もこの企画を継続して欲しいという保護者，地域住民の願いともとれる。「体育祭マッチフラッグ」は生徒たちだけの作品制作・展示の場だけでなく，保護者，地域住民，卒業生も巻き込んだ企画となり得る可能性を見いだす事ができた。

### (2) メディア（新聞）の反応

体育祭当日の展示Ⅰと展示Ⅱ「マッチフラッグ展」が新聞記者の目にとまり，計2回新聞掲載された<sup>146</sup>。サッカーW杯南アフリカ大会開催の年であることも考えられるが，本題材が社会的に見て，興味深いものとして注目してもらえたといえよう。

## 第4節 考察

本節では実践題材の教育的意義を確認し，次に教員（学校）と学芸員（美術館）の連携の意義について考察し，最後に残された課題を述べることにする。

### 1. 本題材の教育的意義について

#### (1) 生徒の美術文化理解への機能

「場の雰囲気の変化」について述べた生徒の感想から，自分たちで制作した作品が，実生活場面において活用される光景を觀て，場（環境）に与える影響を感じとった生徒がいたのが分かる。

さらに，別日程の「マッチフラッグ展」では「体育祭マッチフラッグ」と「MATCH FLAG」の鑑賞を通して，生徒たちは学校生活や大きなスポーツイベントの中で瑞々しく活躍する美術作品を目の当たりにした際の感動を伝える感想があった。アーティストの活動や作品

を通して、美術に対する捉えが広がる生徒、興味が深まる生徒の姿といえよう。「MATCH FLAG」が世界的に認知度の高いイベントで使用され、南アフリカに渡ってきた美術作品を映像ではなく眼前で見ることができたことが大きく影響した。「MATCH FLAG」がどのような経緯を経て、この場所にたどり着いたのか想像を巡らすことは、生徒自身の体験が起点となり、深く作品鑑賞する手だてとなった。

ヴィゴツキーは「美の教育を生活そのものの中に持ち込むことにも重要な意義がある」<sup>147</sup>と述べた。自らの実体験（制作体験）を視点とし、美術館の事業、アーティストの作品、活動を見つめ、社会との連環の中に位置づけられた活動への興味、理解の深まりがみられた。本題材の表現及び鑑賞活動は生徒たちにとって、美術がファンタジー（虚構）としてではなく、リアルな体験として心に刻み込まれた。

## (2) 相互作用によるイメージの増幅

第3節1項(1)に示したように共同制作の良さについて感想を述べる生徒がいた。グループで一緒に会話する中でお互いの言動が刺激し合い、新たなイメージが形成され作品完成に向かった。これは、共同制作のメリットの一つである。教員から細かな働きかけがなくとも、生徒たちが相互に影響を与え合いながら、イメージが増幅される環境が生み出されていった。

## (3) 生徒指導的機能

体育祭ではチームどうし、心理的に敵対する場面が多い。本題材を通してチームの枠組みを越え、結束力についての感想を述べる生徒がいた。共同制作、作品展示を通して「共感的な人間関係」が醸成されたからである。

また、体育祭は、体を動かすのが苦手な生徒にとって活躍の場が少なくなりがちである。しかし、体育祭を盛り上げるための「体育祭マッチフラッグ」制作・展示があることで、生徒個々が自己の能力に応じ活躍できる場の選択肢が広がった。体育的活動は苦手だが、美術的活動で力を発揮できる生徒にとって「自己存在感」（自分がその集団に存在する意義を感じる）の場であった。

本題材では生徒指導の機能「共感的な人間関係」「自己存在感」を盛り込むことができた。

## 2. 本題材での学校と美術館の連携の意義

### (1) 学校にとってのメリット

教員単独による題材開発，教材研究では，実現困難な題材が実現したことが特筆すべき成果である。美術館だけでなく，メディアを巻き込むことにもつながり，生徒たちの題材に対する達成感もより深まることとなった。

異なった能力，視点，経験を持った者（教員と学芸員）が刺激し合い，題材開発・展開できたことが，より良い題材を目指す上での原動力となった。教員と学芸員が共通の想いを共有し，お互いに良好な人間関係を築きながら連携を図ろうとする姿勢が必要である。両者の想いがうまく絡み合い協働体制ができたとき，教員にとって学芸員が，学芸員にとって教員が「人的資源」となる補完関係が成立し，学校の授業に広がりをもたらす。そのためには，教員が学校と美術館の連携事業をコーディネートする場面も必要であると分かった。

教員が中学生とアーティストが連携した活動を行いたい場合，教員がアーティストに直接交渉し，運良く企画が実現することがあるかもしれない。だが，一般的には面識の無い教員が直接アーティストに話を投げかけても交渉成立するのは難しい。教員とアーティスト（或いは，アーティストの事務所）の間に学芸員が入り，連絡調整を行うことで計画がスムーズに進む可能性があるのが分かった。学芸員は自分が持つ人的ネットワークを活用し，教員が不慣れなアーティストとの交渉ができるからである。学芸員は教員とアーティストをつなぐメディアである。

### (2) 美術館にとってのメリット

荒井学芸員が述べた，美術館の事業が「通常の授業とどうつながり，からみあっていくのか」という疑問は，美術館が学校との連携事業をすすめる上で重要な視点である。それは，美術館が事業を評価する手だてとなるからだ。

生徒の感想の「学芸員さんにはありがとうという言葉しかないです」に象徴されるように，学校の授業の企画・実践に学芸員が加わったことは，本題材が生徒たちの達成感を高



めるのに大きく影響を与えた。また、美術館から縁遠い（美術館に興味を持たない）生徒にとって、学芸員（美術館）の存在を認識するきっかけとなったのは美術館にとってのメリットといえる。

### (3) 本題材をふりかえって

学校と美術館の連携事業は第2章で述べた、A型の美術館主導型になりがちであると筆者は考えていた。それは、学校数に対し美術館数が圧倒的に少ないため<sup>148</sup>、学校から美術館に連携の依頼をしても対応してもらうのは困難であろうという思い込みがあったからである。だが、本題材の企画・実践を通して、学芸員が「児童・生徒の美術を愛好する心情を高めたい」という想いを共有する仲間であり、教員が持ち得ない資源（経験、能力、人的ネットワーク）を持つメンターであることを実感した。また、生徒の実態に合った学校と美術館の連携事業の実現には、教員は能動的に（主導権を持ち）美術館（学芸員）に働きかける連携事業（第2章で述べたB型の学校と美術館協働型）のさらなる題材開発が必要であることを実感した。

学校と美術館の連携事業対象者は児童・生徒であり、彼らにどのような教育的効果をもたらすことができたか評価できて始めて、その後の事業改善が期待できる。そのためには、教員は生徒の様子を美術館（学芸員）に伝え、学芸員は学校でどのような教育活動が展開されているか情報を掴もうとする姿勢が必要である。そのために教員は美術館の各種事業に対し興味を持ち、可能な限り参加し研究を深めなければいけない。

本題材では、教員、学芸員、アーティストそれぞれの協力関係が構築され、スムーズな題材開発・展開へと結実した。人的ネットワークを活用することの可能性を強く感じた。

## 第5節 残された課題

展示した作品の次年度以降の扱いについても検討が必要である。画像データや写真として残し、作品は廃棄してしまうのでは惜しい。可能なら、毎年制作された作品を蓄積、展示していくことで、在校生、卒業生、地域住民もより楽しめる体育祭にできるものと考えらる。

また、本研究では、教員（学校）と学芸員（美術館）が連携（お互いの力を補完し合う）した題材の可能性について考察してきた。教員が主導権を持ち、教員と学芸員がもつ強み

を中学校美術科の授業に活かすことで、アーティスト作品を活用する場面を盛り込んだ題材が実現した。しかし、一題材だけでは一過性、一面的な評価しかできないのも事実である。また、教員と学芸員による偶発的に生じた協働により実現した点が否定できない。一過性で終わらせないための手立てを講じる必要がある。この点については、終章で述べることとする。

そして「体育祭マッチフラッグ」の美術科の学びとしての意義について、生徒の変容を詳細に観察する必要もある。

## 第5章 複合的資源を活用した事例 (中学校美術科と地域の自治組織の連携)

### 第1節 研究の目的と方法

屋外でのインスタレーション制作活動、美術館での鑑賞活動など、学校から飛び出し地域に活動の場を求めると生徒の姿が生き生きする。中学校美術教員として、直感的にそこに活動の意義を感じてきた。だが、具体的にどのような意義が存在するのか問い直すと判然としない。

地域を活動の場とした教育活動の必要性を教育法制度に求めると次の2点があげられる。

1つは2006年改正教育基本法第13条である。「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」の必要性が明記され、学校、家庭、住民その他の関係者が教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚し、相互の連携協力を努めることが規定されている。地域の子どもの教育環境にふさわしい場を創造することもこれに含まれると解される。もう1つは平成20年告示中学校学習指導要領（以降本章では、指導要領と記述）である。指導要領第1章第4の2の(14)に「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること」、指導要領第2章第6節第3の2の(1)のエに「表現の材料や題材などについては、地域の身近なものや伝統的なものも取り上げるようにすること」と明記されている。

新潟市中学校教育研究会美術部会が毎年発行する『指導のアイデア集』<sup>149</sup> 過去3年（2009年～2011年）分によると美術の授業や美術部による活動で生徒が地域に出かけ表現活動する題材は、全157事例の中で6事例（うち3事例は同一教員による実践<sup>150</sup>）であった。地域を活動の場とした美術の表現活動は中学校美術教員にとって興味の対象となっていないか、活動の方法が手探りの状態である。その背景には中学校美術教員に「地域を活動の場とした中学生による表現活動の準備には多大な労力が要求されるのではないか」という不安があり、さらにその奥底には教員の多忙感が潜んでいる。

中学校及び中等教育学校前期課程の教員を調査対象として実施されたOECD国際教員指導環境調査(TALIS)2013年調査結果の要約<sup>151</sup>によると、教員1人あたりの1週間の仕事時間の合計は日本53.9時間、参加国平均の38.3時間を大幅に上回り参加国で最も多い<sup>152</sup>。だが授業に費やしている時間を見ると17.7時間と参加国平均19.3時間を下回っている<sup>153</sup>。

授業以外の仕事で参加国平均を上回っているのは学校運営業務への参画に使った時間 3.0 時間（参加国平均 1.6 時間）、一般事務業務 5.5 時間（同 2.9 時間）、課外活動の指導に使った時間 7.7 時間（同 2.1 時間）である<sup>154</sup>。我が国の中学校教員は本務の授業よりも授業以外の業務に多くの時間と労力を費やしている、或いは費やさざるを得ない実態が浮き彫りとなった。現状では限られた時間の中で題材開発、教材研究を行わざるを得ない状況にある。地域を活動の場とする学びが普及するためには活動の意義が何かを明らかにし、中学校美術教員がそこに価値を見いだすだけでなく、どうすれば学習が成立するかある程度の道筋が見えるようにする必要がある。

そこで本章では、はじめにさまざまな実践例を概観する中で活動の方向性を探る。地域を活動の場とした美術作品制作を題材とした実践を通して、中学生による美術作品制作の意義を明らかにすることを目指す。実践する上で地域住民の理解と協力を得ること、中学校と地域の自治組織との連携を意識的に取り入れることを考えている。よって本章における「地域」の範囲を中学校区とする。

## 第 2 節 公共の場における美術作品制作の概観と実践の方向性

### 1. 公共の場での美術作品制作におけるアーティストと市民の位相

2012年に新潟市で開催された第2回水と土の芸術祭<sup>155</sup> ディレクター丹治嘉彦は芸術祭を振り返り「市民運動的な盛り上がりや市民が作家のプロジェクトをこれからどのようにハンドリングしていくかについての動きが出てきた」<sup>156</sup>とし、藤浩志（アーティスト）の事例を取り上げ次のように述べる<sup>157</sup>。

手部（市民サポーターを巻き込んだ組織）を作って作品制作をした。会期終了後、手部は藤の手から離れ、部員がオリジナルの活動を行っている。またナデガタインスタントパーティー（アーティスト集団が中心となり市民を巻き込んだ組織）<sup>158</sup>は旧新潟市立礎保育園を会場とし、焼き物ワークショップを行った。会期後、その場を残し、市民で運営するまでに変わってきた。

丹治は市民が美術作品やアーティストに対し、受け身でなく能動的に働きかける動きが生じている点と、公共の場での美術作品制作の継続的实施によって市民参加型の制作形態

が市民の意識に変容をもたらしている点を指摘した。市民の受動的参加から能動的参加へシフトしたということだ。これは、地域を活動の場とした美術作品制作活動が持つ可能性と方向性、継続的实施の意義を示唆している。

林容子はパブリックアートが街作りに与える効果の1つに、「アートの社会化。アートへの関心度のアップ（一部の人にとっての趣味の対象でなく、アートは社会一般の人々にとって生活の一部になりつつあるし、なるべきである）」<sup>159</sup>を挙げている。つまり、美術作品は厳重な管理下にある美術館に展示され美術を愛好する者のためだけにあるのではなく、日常生活の中にも存在するということを市民が認知するのに、パブリックアートが重要な役割を果たしているということである。

川口宗敏はパブリックアートのあり方について「初期構想段階から市民が参加できるようにし、設置後も維持・管理に市民が参加できるようなプログラムの必要性」<sup>160</sup>を主張し、「『アート』の部分の重視から主体的参画者の『パブリック』の部分の意義の問い直しを行うべき」<sup>161</sup>とし、市民参加型への転換を示した。

アーティストが自分の芸術性を第一に考えた美術作品を地域に設置する様相から、市民が地域のアート設置に能動的に関わる様相へのシフトが起きている。すなわちアーティストと市民（パブリック）の位相の問い直しである。川口の指摘は地域を活動の場とした美術作品制作のあり方を考える上で示唆に富んでおり、美術教育の文脈の中で教員、学芸員、アーティストなどの授業者（講師）と生徒（受講者）の立ち位置を考える上で傾聴に値する。

地域を活動の場とした中学生による作品制作活動も、将来的には中学校美術教員主導の活動でなく、中学校・中学生と地域住民が協働的な活動を通して絆を深め、美的観点で共に能動的に地域環境を「創る」活動へシフトすることが目指すべき姿である。

## 2. 地域を活動の場とした美術作品制作の意義

本節では、先人の言説の中から、地域を活動の場とした美術作品制作の意義の所在を探ることとする。

イギリスの政治学者バーナード・クリックは民主主義社会における中等教育で生徒に身につけさせたい能力について「公共生活に影響を及ぼそうとする意思を持ち、その能力を有し、またその技能を備え、発言したり行為したりする前に事実に基づいて熟考する批判的能力を備えた、積極的な市民」<sup>162</sup>であるようにすること、「若者一人ひとりがコミュ

ニティへの新たな関わり方を大胆に発見し、自分たち自身で行動してゆくようにすること」<sup>163</sup>とした。生徒が自分たちの住む地域の環境（コミュニティーの現状）に目を向け、評価し、自分たちがのぞましいと考える姿へ変えようとする力を育むことは、我が国の中等教育にも当てはまる。また、ヴィゴツキーは公教育における芸術教育の意義について「美の教育を生活そのもののの中に持ち込むことに重要な意義がある」<sup>164</sup>とした。これらは生徒らの活動を単に実生活場面の中に落とし込むだけでなく、社会のニーズの中に位置づけることの意義を示唆している。また、ハーバード・リードは「中等学校のカリキュラムは、常に、地域的関連性とでもいうべきものを、持つべき」<sup>165</sup>とし、地域の要求に応えることの必要性を主張した。生徒の学習について、ヴィゴツキーは日常生活との関連、リードは地域のニーズとの関連を持たせることの必要性を述べている。

中学生による地域を活動の場とした美術作品制作では、地域が抱える問題の解決に中学生が共感し、能動的に活動を組み立てようとする意識が芽生えれば理想的である。そのためには、企画段階から中学生と地域住民が交流しながら活動展開される必要がある。

### 3. 継続性の確保

地域を活動の場とした中学生による美術作品制作の事例はすでに報告されている。例えば川崎市立臨港中学校は文部科学省『豊かな体験活動推進事業』の委嘱を受け「総合的な学習の時間」として、2002年度はJR貨物線下トンネル壁画制作、2003年度は駅のホームへの壁画設置を実施した<sup>166</sup>。生徒が主体的に活動している場面も報告<sup>167</sup>されており、全校生徒、中学校職員、地域住民など大勢の人々を巻き込んだ、地域を活動の場とした中学生による美術作品制作活動の先進的な取り組みである。だが、事業委嘱を終えた2004年度以降活動が途絶えており一過性の取り組みとなった。文部科学省の研究指定終了後も継続的に実施するための活動の構想、補助金がなくなっても継続できる仕組みづくりが欠落していたからである。活動を展開する際、さまざまな組織に性急な凝集性を求めることは中学生、学校職員、地域住民にとって負担感が大きく継続性を失う要因となる。

地域を活動の場とした中学生による美術作品制作を継続的な活動とするためには、地域のニーズが活動の起点となり、緩やかな凝集性のもと学校と地域が連携し活動を展開していくべきである。中学校美術教員又は中学生が地域の課題を探り、それを解決する活動の一つとして美術作品制作を位置づける。すると地域は中学生の地域貢献による恩恵を得、中学校は地域を教育の場として活用できる恩恵を得る互惠関係が生じ、継続の実施が期待

できるようになる。

### 第3節 実践題材「中学生によるトンネル壁画制作」の概要

本節では、前節まで述べたことを踏まえ実践した題材の概要を述べる。筆者勤務校（新潟市立大形中学校，生徒数 417 名，学級数14学級，本務教員数29名，2012年 5 月 1 日現在）美術科と新潟市大形地区青少年育成協議会（以降，育成協と記述）が連携し，実践した題材「国道 7 号線バイパス海老ヶ瀬付近トンネル壁画制作（以下，トンネル壁画と記述）」である。

#### 1. 実践の背景

##### (1) 題材開発のきっかけと題材設定の理由

本題材実現のきっかけとなったのは，2012年 5 月，勤務校学区内にある地域自治組織の一つである育成協の会長と勤務校美術科担当教諭（松木靖裕と筆者の 2 名）による雑談である。育成協会長から「学区内に不審者が出没するトンネルがあるので，そこに絵を描く事で不審者が近寄りにくい雰囲気に変えることができないだろうか」の投げかけがあった。筆者と松木は中学生が地域を活動の場とした美術作品を制作する絶好の機会ととらえ，実現の可能性を美術科担当教諭で検討した。その結果，描画材料予算を 5 万円程度確保できれば夏期休業期間を活用し実現可能と判断し，育成協会長に連絡する。

その後，育成協会長は予算確保とトンネル周辺住民への計画周知を担い，教員側は生徒対応，計画立案，関係諸機関への連絡と助成依頼，道具・材料準備を担当することとし，実施に向け動きだした。

##### (2) 題材への期待

トンネル壁画を描画するのは生徒らにとって初めての経験である。よって，壁画の大きさに躊躇しながらも活動のダイナミックさを魅力的に感じ意欲的に取り組むことが予想される。また，完成した作品は生徒たちの通学時など日常生活の中で地域住民も含め鑑賞可能となる。これらの活動を通して生徒は美術作品が生活を豊かにする役割を果たすことを体感するのも期待できる。

### (3) 目指す生徒像

地域社会のニーズに基づいたトンネル壁画制作を通して、自分たちの住む地域環境を美的観点で評価しようとする生徒。

### (4) 活動の概要

指導者：中学校美術科担当教諭（松木靖裕及び筆者）

実施日時：2012年7月27日，7月30日～8月3日 計6日間 各日9時～11時

参加人数：28人（のべ参加人数131人）

場所：国道7号線バイパス下トンネル38.8m（新潟市東区海老ヶ瀬474番地1付近）

## 2. 本題材における育成協会長の関わり

筆者は生徒と地域（地域住民）をつなぐ上で地域住民の代表である育成協会長が果たす役割は大きいものがあると考えた。

本題材では、3つの場面で育成協会長が関わる。1つ目は、描画材（アクリルガッシュ、マスキングテープ、はけ等）購入のための予算確保である。育成協、大形地区コミュニティ協議会、大形地区防犯組合から合計5万円の予算確保ができた。2つ目は、周辺住民に対する活動への理解の呼びかけである。育成協会長を通して、周辺住民からトンネル壁画制作への理解を得た。3つ目は、活動期間中の中学生の事故防止（交通安全確保、体調管理）への協力である。育成協会長から、事故防止のためトンネル通行車両の交通整理を担当してもらうのに加え、熱中症対策としてトンネル壁画制作現場周辺住民に依頼し水分・塩分補給のための飲食物の準備が可能となった。

## 3. 活動に関わった組織

中学校美術科と育成協が中心となり企画・運営する。

### ・7月10日

国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所からトンネル壁画制作の許諾を得る。

### ・7月17日

大形地区コミュニティ協議会、大形地区防犯組合から予算面での支援を得る。

### ・7月20日



新潟東警察署大形交番に活動場所周辺の定期的な巡視を依頼するとともに、活動場所に隣接する新潟自動車学校から電源、水道、トイレ使用の許諾を得る。

## 4. 実践の経過

### (1) 参加者の決定

教育課程上、本題材を美術の授業として位置づけることができれば地域の中학생全員がトンネル壁画制作を体験できる理想的な題材となる。しかし、計画立案、準備、実行まで約1ヶ月しかなかった。そこで、今回は希望者のみの参加に留め、生徒会朝会において全校生徒に参加を呼びかけたところ、美術部員を中心とする28名が参加を申し出る。

### (2) 図案の決定

作品が、地域環境の一部を形成する美術作品として地域住民に不評な図案とならないためには、時間をかけ中學生と地域住民による図案検討場面設定が必要である。だが、先に述べた通り、日程的に困難であったため、図案検討、活動計画・運営の場面に教員が積極的に関わり、育成協会長から許諾を取り制作に入ることにした。

### (3) 下準備 制作1日目

トンネルはほとんど清掃されてこなかったため、汚れがひどくゴミが散乱していた。壁面への落書きを隠すためのペンキが塗られていたが、塗装が経年劣化していたり蜘蛛の巣があったり壁面と路面の境界に雑草が生えたりしていたため、直ちに制作に入れなかった。そこで、4グループに分かれ清掃活動を行い、グラインダー、サンドペーパー、へらを使い壁面全体の汚れを落とし、地塗り剤を塗布した。(図 5-1)



図 5-1 下準備

(出所 2012 年筆者撮影)

### (4) 描画1 制作2～3日目

生徒たちは教員の考えた図案(図 5-4)を参考に描きはじめた。図案は基底となる線を

トンネル上下部に描き，見る人によって地域の心象風景（樹木や建物）を連想させるような三角，四角，円などの幾何学模様を加えている。育成協会長は当初交通整理に徹し，生徒達に対し遠慮がみであったが，徐々に制作に関わり表現追求を相互に行うようになった。ここでは教員主導の活動である。

（図 5-2）



図 5-2 描画 1

（出所 2012 年筆者撮影）

#### （5）描画 2 制作 4 ～ 6 日目

教師の考えた図案を転写する様相から，生徒は徐々に形と色彩が織り成す表現の面白さを実感しはじめ，自分たちで課題を見つけ相互交流しながら表現する様相へと移行した。この段階では，教師が表現活動に関与する場面はほとんど無くなった。（図 5-3）



図 5-3 描画 2

（出所 2012 年筆者撮影）

#### （6）完成 壁画（高さ 2.6m，幅 38.8m）

図 5-4 は静かな印象を受ける形や色彩の美の構成要素（リピテーション，リズム）で構成されているのに対し，図 5-5 は上段右端にあるように，全体の中で形や色彩の変化や激しい動き（ムーブメント），対比（コントラスト），強調（アクセント）のある場面などで表現されている部分がある。

教員が考えた図案（図 5-4）と完成した壁画（図 5-5）を比較すると，教師の考えた図案が起点となり，生徒たちによって生み出された表現が見られるようになる。



図 5-4 教員が考えた壁画原画

（出所 2012 年筆者撮影）



図 5-5 完成壁画（トンネル壁画を分割撮影しパソコン上で加工。上段：壁面に向かい左側 下段：右側） （出所 2012 年筆者撮影）

## 第 4 節 実践結果

2012年12月10日，筆者による育成協会長へのインタビューを実施する。また，同年12月18日参加生徒（28名）に対しアンケートを実施し，同年12月26日にアンケート内容の確認インタビューを行った。アンケート実施の趣旨は，実践の効果を見極めるためである。本節ではインタビュー回答（育成協会長と生徒の回答はゴシック体で表記）を分析する。

### 1. 生徒の反応

「壁画制作前と制作後とで何か違いを感じますか」の質問（自由記述）に対し「変化が無い」，「悪くなった」など否定的評価は無かった。

「トンネルは薄暗い感じで，少し怖いような，怪しいような感じでした。壁もボロボロで，それがみちがえるほど明るくなり，綺麗な感じになりました。カラフルな円や三角形が描かれていて，気分も元気になるようなトンネルになりました」，  
「来年は反対側のやっていない方をやればもっと良くなると感じた」，トンネル周辺に「以前は，不審者がたくさんでいたし，不気味だった。1人で通るのも，2人で通るのも怖かった。小学校の頃，そこを通るのに，親が迎えにきて下校することもあった。それが，壁画を描いて，トンネルの雰囲気が変わった。不気味でなく

なったし、怖さがなくなった」。

薄暗く汚れていたトンネルが清掃され、雰囲気を大きく変化させる形や色彩が施されたことで心理的恐怖や不安を払拭し、気分を高揚させたり、安心感をもたらされたりしたことを述べる生徒や次年度以降の継続意思を示す生徒がいた。活動を通して壁画の形や色彩が環境（場）に与える影響の大きさを生徒らは感じた。

「初めてのことで、全員でできるか不安だったけど、1・2年生が積極的に協力してくれるようになりました」、「2・3年生と交流がなかったのが、声をかけてもらえるようになった」。

全員が、今まで話したことのなかった人と話すようになったと回答した。巨大な一つの作品を制作するためには、制作者どうしイメージを共有する必要がある。今まで交流の無かった者が意見交流する場面が必然的に生じ、お互いの心理的距離が縮まった中で活動展開した。

「大きなキャンバスに描く感覚が分からなくて不安がありました。でも、描いてみたら本当に気持ち良くて、また描きたいと思いました」、「作品を人前に出すことがなかったので、少し物足りなく感じていたけど、壁画をいろいろな人が見られるようになり、開放的な気分を感じるようになった」。

「めんどくさいと思っていたけど、絵の具で塗るのが予想と違って楽しくていい経験になった。（いろいろな人に教えてもらいながら）前より筆がうまく使えるようになった」。

参加した生徒の感想で最も多かったのが、日頃の美術の授業では制作しない巨大壁画制作の面白さを知ったという回答である。高さ2.6m、幅38.8mの壁面に描く行為が、生徒にとってダイナミックで心引かれる活動であったことがうかがえる。題材の魅力や自分たちの作品が地域住民の目に触れることが制作意欲の喚起、美的要素の発見、筆遣いの巧緻性獲得へとつながったと述べる生徒がいた。しかし、本題材だけでは「発想・構想の能力」「創造的な技能」などの観点で生徒の能力の変容について見とることは困難である。今後

の実践の中で検討する必要がある。

生徒に対する追加インタビューでは「街中にある美術作品を立ち止まり、その良さや改善すべき点を考える（評価する）ようになりましたか」の質問をした。その結果、評価するようになったと回答した生徒はいなかった。そこで「壁画などがあるといいなと思った経験がありますか」の質問をしたところ「家族と車で出かけトンネルを通ったとき、このトンネルだったらどんな絵が描けるか考えた」、「学校の廊下を通るとき、ここの壁に自分たちが描いたような壁画があるといいなと思った」と回答した生徒が2名いた。

場（環境）に働きかける意識を抱く生徒がわずかだが出現した点は成果といえよう。だがほとんどの生徒は、地域や街中にある美術作品や場（環境）を評価する意識が芽生えるに至らなかった。それは地域内の美術作品との関わりの不足ともとれる。この点はさらなる改善の余地がある。

## 2. 育成協会長の反応

育成協会長からは「場の変化」、「壁画の内容」、「育成協にとってのメリット」、「今後について」回答を得る。

### (1) 場の変化

描いていただいて明るくなったし、子どもさんも、大人の方も、セーフティースタッフさんも自治会の役員さんも非常に喜んでいるという声を聞きます。住んでいる方からは、トンネルが明るくなったという話を聞くし、マイナスな話は聞こえてきませんね。以前は小学生が車に監禁されたり、中学生が体を触られたりという事件があった。今の所変な車は見かけなくなったし、相対的に見てトンネル内で停車している車は減りましたね。それから以前はトンネル内でゴミを捨てる人もいて、まるっきり無くなったわけではないけど減りましたね。ゴミを捨てづらい雰囲気になったんでしょうかね。

トンネル壁画が、育成協会長だけでなく多くの地域住民から好意的に受け止められていることが分かる。また、トンネル壁画が描かれた後は不審な車両やトンネル内のゴミが減るなど、防犯対策や環境改善に貢献していることが分かった。

## (2) 壁画の内容

先生方が中心となってそれをもとに生徒さんたちが臨機応変に描いていくスタイルが良かったと思います。地域と学校が1つになって動くというのが良かったです。大形独自の活動として定着するといいなと思っています。他の地域では花を植えるとかいう話は聞くけど、このようなのは聞かないですね。事前に広報を流せば、地域の方で活動に加わりたいという人もいるかもしれない。そういう取り組みができるんだというのを地域の役員、お年寄りも衝撃を受けたんじゃないでしょうかね。

トンネル壁画が地域の環境を形成する絵画としてふさわしいものとなるよう、教員の指導が入った点は良い評価として受け止められた。しかし、学校と地域が連携し運営される大形地区独自の活動としてより発展させるためには、地域の風土や歴史をより詳細に調査し図案に盛り込むべきではないだろうか。そのためには、中学生がより前面に出て住民へのインタビューや資料調査を行う場面の確保が必要と考える。

## (3) 育成協にとってのメリット

今回の壁画制作で地域の名前も、防犯組合も、コミュニティ協議会も新聞に載って名前が売れたので良かったです。活動の様子を具体的な形にしてもらったのを喜んでいます。学校の子どもたちだけでなく、地域の活動をPRできましたね。ここまで活動を大きくしてもらって良かったです。

学校と地域の自治組織が連携したことで活動が膨らみ、外部にPRできたことへの感謝の気持ちが述べられ、相互の開かれた関係の推進をより期待しているととることができる。

## (4) 今後について

他にも暗くて雰囲気の良いところがあり、やりたいところはたくさんあるので、今後も継続的にできるといいです。防犯上、すぐにやりたいところは2ヶ所です。

余裕があればあと何ヶ所か。描いたのも劣化するので、数年周期で塗り直すようにできれば理想的ですね。予算は学校の PTA や、地域のいろいろな組織から出して、どんどん活動の輪を広げて将来的にこのような活動を通して地域がつながるといいですね。毎年あせらず少しずつ活動を広げていけばいいですね。中学生が地域の中でこうやって活動ができるのがいいと思うんですよね。今回、中学生が入ってくれたのが何よりよかったです。

一過性で終わるのではなく、活動を継続したいという意味と、そこに中学生が加わることで地域内の異年齢集団で活動することへの期待感が述べられている。拙速に活動を広めるのではなく、徐々に地域に根ざした活動の輪が広がることを期待していることが分かる。

### 3. 育成協会長のコメントに対する生徒の反応

「育成協会長のインタビューを読んでの感想を書いて下さい」の質問に対し、生徒たちから以下の回答（自由記述）を得る。

「地域みなさんが喜んでくれて本当に良かったです。トンネルでの不審者、ポイ捨てする人が減ったので、活動したかいがありました。たぶん、美術部ができてから一番大きな活動だったと思います。この活動が最後でなく、ここからこの活動がスタートし、だんだんと広がって、市や県などで不審者被害、ポイ捨てをする人が減っていってくれればいいと思います。1,2年生は力を合わせて来年も実施して素敵なトンネルを増やしてほしいです。私は、この活動ができて地域のため、人のためになることができて本当に良かったです」, 「1～3年生みんなでつくる大きな作品ということで、とても楽しく、良いものができたと思う。それが防犯に役立ったり、雰囲気良くなったと言ってもらえると嬉しい。他にもやりたい場所があるのなら、ぜひやってみたい」。

生徒たちは、地域貢献できたことと、自分たちの活動が地域住民に好意的に評価されたことに対し達成感を感じている。また、次年度以降も活動を継続し、より豊かな制作活動と地域をさらに良くしたいという意思が表明されている。



#### 4. 生徒の周囲の反応

生徒アンケートの自由記述の中から家族、友人の発言に関するものをあげると以下のものがあつた。

「お母さんと見にいったとき『本当に明るくなった。地域の人が自慢できるトンネルになってよかったね』と言ってくれました」、「友達から、『あのトンネル通るのが怖かったけど、今は通るとなぜか元気になる』と言ってもらえました」、「家の近所の人から『すごいね』『いいことしたね』と言ってもらえました。私自身、いろんな人からいい反応が来て嬉しかったです」。

いずれも好意的に受け止める意見であり、トンネルの変容を注視していたことが分かる。

### 第5節 実践題材の成果と意義

#### 1. 教育的意義（美術教育）

##### (1) デザイン学習として

壁画制作後、生徒や地域住民からバイパス下トンネルの環境が良好なものへ変容したとの回答が出てきた。また、育成協会長のコメントにも地域の防犯上の問題、美化環境の変容についてのコメントが述べられた。これらのことから生徒は制作を通して、壁画が場に与える影響と自分たちの表現が持つ力を感じ取ることができたのが分かる。

生徒のコメント「次年度以降も継続して実施したい」、「地域のみなさんが喜んでくれて本当に良かったです」、「トンネルでの不審者、ポイ捨てする人が減ったので、活動したかいがありました」の言葉の裏には、無意識の中にも美術が持つ力を感じとったことが分かる。それは、美術作品を媒体とし、自分たちが住む地域を変化させることが可能なこと、形や色彩がもたらす新たな空間創造が、地域の抱える課題解決につながる可能性の発見である。さらに言えば、生徒にとって実生活場面における美術の存在意義の認識へとつながるのである。生徒は活動を通して、単に実生活の場でダイナミックな美術作品を制作できた達成感だけでなく、地域とのつながりを実感し、活動の意義を見いだした。自分たちの活動や作品が地域に響くことや、人々と共鳴することの醍醐味を味わうことができた。



これは、プロフェッショナルなデザイナーの仕事と類似している。

本章で取り上げた実践題材は「デザイン」の構成要素を学ぶための事前又は事後学習として位置づけることが可能である。

## (2) 教材として

バイパス下トンネルという巨大キャンバスに描く活動は、生徒にとってダイナミックで魅力的な活動であった。魅力的な題材が生徒の活動意欲を喚起するのは当然のことである。本実践題材では具体的に何が要因となっていたのだろうか。それは、活動後の生徒のコメントに「作品を人前に出すことがなかったので、少し物足りなく感じていたけど、壁画をいろいろな人に見られるようになり、開放的な気分を感じるようになった」とあるように、作品又は活動そのものがリアルタイムで地域住民（育成協会長も含む）による評価対象となっていた点にある。地域（身近な現実世界）の中で、自分たちの制作した美術作品が、地域住民から好意的、又は厳しい評価を受けることを前提とし活動が遂行され結果が生まれる。本実践題材で生徒は自己満足やファンタジー（虚構）としての制作活動ではなく、リアリティー（現実）として制作活動の世界へ否が応でも引っ張り出される。それが、生徒の活動への意欲につながるとともに、取り組む姿勢の真剣さを引き出す要因となった。

また、活動を通して「前より筆がうまく使えるようになった」と述べる生徒がいた。ほとんどの生徒にとって刷毛を使って壁画を描くことは初めての経験であった。また、1年生はマスキングテープの使用は初めての経験であった。作品制作する際必ずしも否定すべきものではないが、時として美術室内の授業では断片的に「技能」を指導してしまうことがある。創造的な雰囲気の中であったからこそ、生徒らは自らの表現に必要な技術（「創造的な技能」）を習得しようとする姿が見られたのである。

## (3) 地域を活動の場とした共同制作における学び

本実践題材では、制作する上で必要な創造的な技能（刷毛や筆の使い方、マスキングテープ、描画のための手の巧緻性）習得の問題がほとんど生じなかった。同学年生徒間、異学年生徒間で用具の使い方等を教え合う姿があったからである。筆者の日頃の美術室での授業を振り返ると図 5-7 において、プロット B'（教員主導による活動）になることがある。本題材では当初はプロット B（教員主導の活動）であった。だが、徐々にプロット A（生徒や住民主導の活動）に移行していった。オープンな雰囲気の中で活動することで、

生徒どうしの学び合いの場面が生まれたものとする。オープン（創造的）な雰囲気を作り出す上で学校を飛び出し地域に活動の場を求めるのは有効な手だての一つとなりえる。

なお本実践は育成協会長と美術科担当教員との雑談

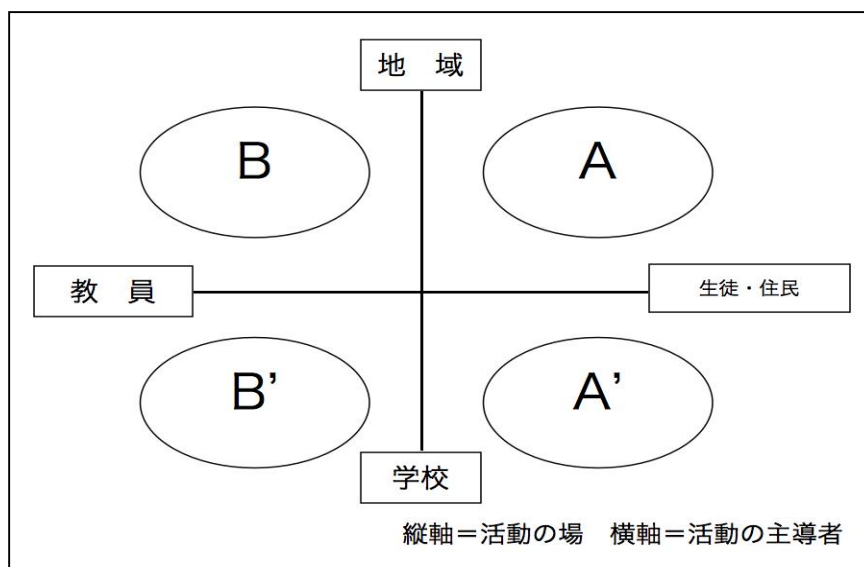


図 5-7 活動の場と主導者を軸とした授業形態のプロット  
（出所 筆者作成）

がきっかけとなり実現に至った。それは偶発的かもしれない。だが、日常的、継続的に筆者と育成協会長が雑談できる人間関係が構築されていたのは偶発的ではない。地域を場とした活動を実現するためには、まずは教員が地域に飛び出し、地域住民と日頃から関わり相互の信頼関係を構築する必要がある。

## 2. 教育的意義（生徒指導的機能）

前節でも触れたように、生徒は「自分のため」だけでなく「地域のため」の視点で活動に取り組み、他者（地域住民）を納得させる作品を完成させることができた。それは、社会の中における自己存在感（自分の存在意義の自覚）へとつながるものである。日頃の教育活動の中で自己肯定感の低い生徒（「自分はいなくてもいい」、「自分は何の役にも立たない存在」など自分を否定的に評価している生徒）にとって、社会に関わり貢献できることを実感する活動となり得る。また自分たちの手で地域を変えることができるという実感もあり、よりよい社会を創り上げようとする意識を醸成する題材となった。

また活動を通して新たな人間関係が生まれた生徒がいた。類似した活動を学校の中で行う場合、生徒を評価する人間は生徒と教員となりがちである。すると、評価される生徒に心理的な甘えが生じ、他人任せの言動をする生徒が出現し、チームワークがうまくとれないことがある。本実践では6日間活動をともにした育成協会長以外にも近隣住民や通りがかりの人が差し入れをしてくれたり、励ましの言葉をくれたりした。そのことで、生徒はより多くの人から評価されていることを実感した。個々の生徒は自分の言動に責任を持つことが求められるようになり、チームワークが円滑に運び心理的距離が縮まる要因となっ

た。6日間に渡り、ほぼ同じメンバーで制作する地域における活動が、生徒指導的観点から意義ある活動であった。

### 3. 実践題材の意義

「総合的な学習の時間」における地域の事業所での職場体験活動や、各教科での学習支援ボランティアなど、地域の教育力を活用した事例は多い。勤務校でも地域の教育力がさまざまな場面で活用されている。大きくは「学校のニーズが起点となり学校が地域から支援を受ける形態」と、「地域のニーズが起点となり学校が地域に貢献する形態」に分けることができる。本実践題材は後者の形態であった。中学生による美術作品制作を通して、地域の防犯、地域環境の改善につながった。中学校における美術教育においても地域貢献型の活動をさらに模索すべきである。学校と地域住民が課題を共有し、解決に向けることを美術作品制作の中に求めることは、中学校における美術教育の意義を浮き彫りにし、それが管理職や他教科教員による美術科への理解につながり、活動の幅をさらに広げることになると考える。

中学校と地域それぞれの持つ強みを活かすことで、今後さらに多様な展開を進めることが可能と考えられる。教員が持つ強みとは「作品制作に必要な知識・技能」、「中学生への対応能力（学習指導的観点）」、「授業実践経験の豊富さ」、育成協会長が持つ強みは「予算確保力」、「地域住民との交渉力」、「日常生活において生徒達と関わる能力」である。さらに、地域の自治組織が、地域住民に対し中学校の活動に対する理解を得るための役割を果たすことを再認識できた。

育成協会長が美術科担当教員との雑談の中でトンネル壁画制作を中学校に投げかけてきたことや、インタビューで「中学生が入ってくれたのが何よりよかった」と回答したのは、中学生（中学校）が地域に関わることを期待するとともに、地域住民によって地域の中学生を育てたいという意思の表れである。また、地域住民の反応に、地域の環境（場）の変化を歓迎するコメントが述べられている。さらに、それらを受け生徒からは次年度以降も同様の取り組みを続けたいという意思表示が示された。新聞によって活動が取り上げられ、外部にPRされた<sup>168</sup>ことも今後活動展開する上で、勤務校の教員・生徒、地域住民に対する活動への理解と協力を得るのに有効に働くだろう。これらは、活動を継続する上で大きな原動力となるものである。活動方法に改善の余地が残るものの、今後継続実施できる可能性も確保できた。

以上のことや、3章(1)での生徒の反応や育成協会長が今後の展開について述べた「中学生が地域の中でこうやって活動ができるのがいい」から、「生徒が地域によって育てられる」ということが言えよう。また、育成協会長が「地域みなさんが喜んでくれて本当に良かった」や「中学生が入ってくれたのが何よりよかった」と述べたことから、「地域の美的環境、生徒に対する地域住民の意識が変容する」ということが言えよう。

「生徒が地域によって育てられる」ということと「地域の美的環境、生徒に対する地域住民の意識が変容する」ということが循環しながら、生徒と地域が年々より良い方向に変容し、図5-7のプロットA「生徒・住民が中心となって地域の中で行う制作活動」へとシフトする可能性が見えてきた。それが、本実践題材を通して見えてきた特筆すべき意義である。

## 第6節 残された課題

最後に残された課題に触れ本章の締めくくりとする。

活動の前半（図案検討の場面）で教員主導となった点が最大の課題として残った。先に触れたように生徒が地域（地域住民）と関わり、その地域ならではのテーマを見だし、地域住民と自分たちの想いを交流させる場面を活動に盛り込むと、日常生活における美術作品を含むさまざまな場（環境）を評価する視点がいっそう養われるはずである。次年度以降の実践では、生徒が地域住民と直接やり取りする（生徒を前面に出す）場面設定が必要である。

生徒がトンネル壁画の図案を考えること（「発想や構想の能力」を高める場面）を保障するための手だての一つとして、美術の授業とリンクさせることが考えられる。具体的には、平成20年版第1学年の学習内容「目的や条件などを基に、美的感性を働かせて、構成や装飾を考え、表現の構想を練る」<sup>169</sup> 題材としての位置づけである。また、地域のニーズや歴史、風土を発想の起点とするなど授業展開上の工夫も加味する。その後、壁画制作に関わることが可能な生徒と地域住民が話し合う場面設定をし、作品のイメージをブラッシュアップし原画を完成させる。

また、地域を活動の場とした際、中学校美術科に求められる学び（形や色彩、材料、光などの性質の理解）がどの場面で形成されていくかに焦点を当てた検討、例えば、トンネル壁画の変容が生徒の「鑑賞の能力（美的観点）」にどのような学びをもたらすかについ

での検討も必要である。

今後は課題を踏まえた教材研究をし，さらなる実践と結果の考察を行いたい。

## 終 章

本章では全体を通しての結論として地域の教育資源を活用した中学校美術教育のシステム構築の方法と要因、今後の展望を述べる。

### 第1節 全体を通しての結論

#### 1. 地域の教育資源を活用した美術教育のシステム構築のための方法

##### (1) 継続的な活動とするために

中学校美術教育の活動に地域の教育資源を活用することで、学校や地域が抱える課題解決になったり、美的環境が良いものへと変容することへつながったりするとともに、中学生の美的な学び（美的感性）が育まれるシステム開発を目指してきた。このシステムが第4章の実践事例のように一過性で終わる場合と第2章と第5章の実践事例のように継続的に続く場合がある。

一過性の活動として終わらないためには「地域住民や社会教育施設などの活用可能性を探る」、

「地域、美術館・博物館が学校と連携・協力す

ることで活動に関わる者が自分たちの地域（組織）が改善されるのを実感できる」、 「組織と組織の関係が深まる活動となる」といったことが必要である。

地域が中学校美術教育の学習に教育資源を提供することで、中学生の美的感性が育つと

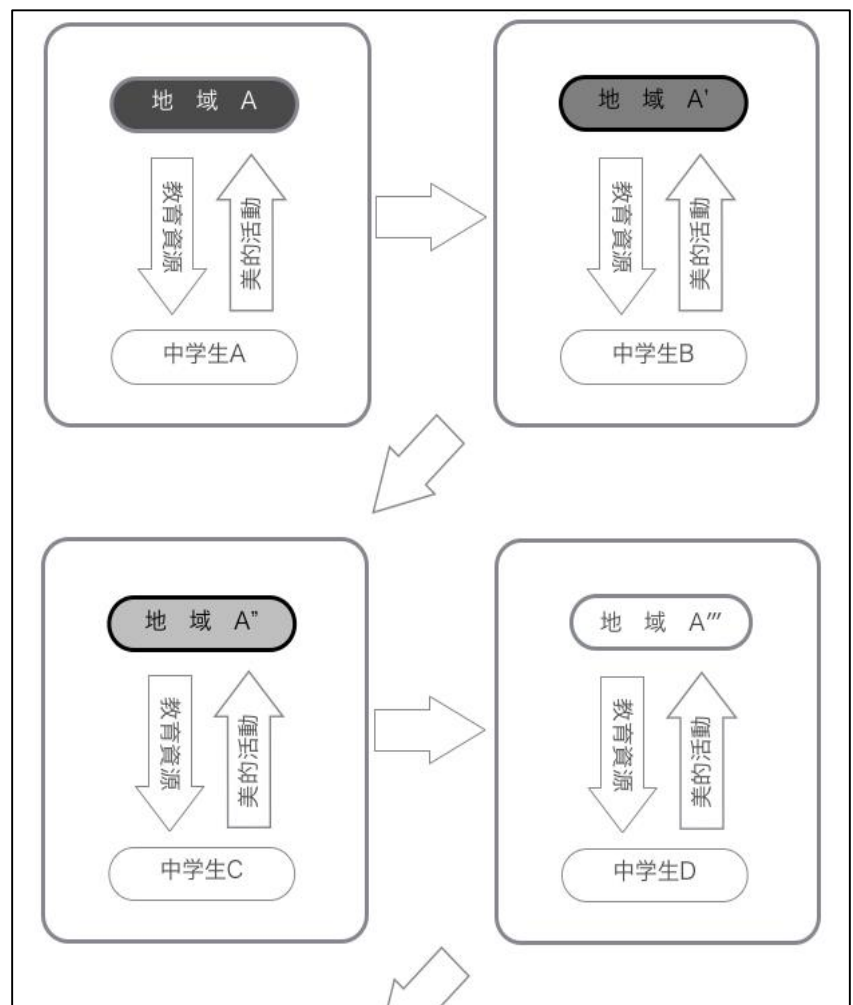


図 6-1 中学校美術教育における地域内循環発展システム

（出所 筆者作成）

ともに、地域が抱える課題や問題が改善される。その具体的システム像のイメージを図で示すと図 6-1 となる。これは、地域の教育資源を活用した中学校美術教育が継続発展可能なシステム（以降、「地域内循環発展システム」と記述）をイメージしたものである。地域 A が中学生 A の集団に対し教育資源を提供することで、中学生 A には美的活動を通しての学びがもたらされる。そのことで、地域 A が抱える問題や課題が改善され地域の様相が変容し地域 A' となる。美的活動に参加する中学生は進級又は卒業とともにメンバーが変わっていくが、地域の教育資源は継続的にもたらされるとともに、地域の様相はさらに良い方向へと変容し地域 A'' となっていく。さらに年度が変われば参加する中学生も変わるが（図 6-1 では中学生 B，中学生 C，中学生 D として表記），このサイクルが続くことにより，中学生の学びの質がさらに洗練されたものへとすることが期待できる。

この観点をもとに第 1 章の中で「地域活用提案期」と「美術館・博物館活用提案期」として提示した昭和 22 年版，昭和 26 年版，昭和 33 年版を改めて見直すと次のことがいえる。

昭和 22 年版から昭和 33 年版では地域の教育資源を活用した中学校美術教育が提示されたが中学校美術教育の中に根付かなかった。その要因は第 1 章でも記したように戦後間もない時代であったことによる教育現場の混乱，物的・経済的困窮のため，教員（学校）は地域住民や社会教育施設などの活用の可能性を探ることができなかったからである。今，戦後間もない時期の教育の混乱は無い。また，高度経済成長期と比較すれば経済成長率が停滞しているとはいえ，物的に困窮している状況でもない。教員の多忙感が増すのではないかという不安はあるが，昭和 22 年版，昭和 26 年版，昭和 33 年版の時期はできなかった地域の教育資源を活用した中学校美術教育が実践できる環境は整っている。あとは我々中学校美術科教員がいかに関心を持ってそれらを活用するかである。

以降，システム構築のための具体的な方法を示す。

## (2) 教育課程全体の枠組みで

先にも述べように，地域の教育資源を活用した中学校美術教育を実現するためには，3 年間の美術の総授業時数 115 時間の中で成立させるのは困難である。よって，図 6-2 のような教育課程上の構造となるのが現実的である。

「総合的な学習の時間」を支える基盤として美術科を位置付けた中で指導計画を作成することで，美術科で学習する美的な造形要素が断片的な知識や体験で終わるのではなく，生活の中で生き生きとした姿で活用されていることを生徒たちが実感できることが第 2 章の

実践題材で分かった。これとは逆に「総合的な学習の時間」で体験したことを踏まえた美術の指導計画を作成することで、生徒の中に同様な学びが形成されることもあり得る。

なお、現行の中学校学習指導要領では「総合的な学習の時間」の指導計

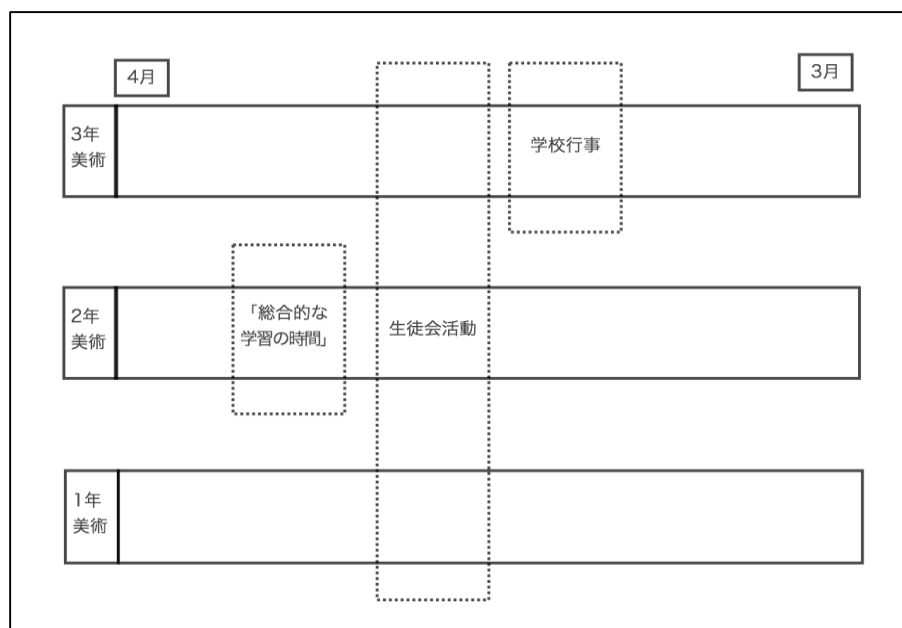


図 6-2 地域の教育資源を活用した中学校美術教育を実現するための教育課程のイメージ (出所 筆者作成)

ることの一つに「地域や学校、生徒の実態等に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な学習、生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うこと」<sup>170</sup>とされており、指導要領が求めている部分と合致している。

第4章での実践題材では美術の授業と体育祭（学校行事）の中で実践することができた。この実践では、美術の授業が展開していくにつれ生徒の手により作品が徐々に形作られていった。それと同時に生徒の体育祭に対する期待感が高まることに結びついた。そして最後は、生徒の作品が体育祭を彩り、行事を盛り上げる役割を果たすこととなった。

第5章の実践題材では実践初年度であったため準備期間が極めて短く美術の授業と生徒会・部活動（特別活動）とのつながりの中で実践することはできなかった。だが、この経験を通して第2学年の平面構成（デザイン）の学習とのつながりの中で活動を展開できることが分かった。地域の課題を解決するデザインを考える題材を美術の授業で第2学年の生徒全員で実施する。鑑賞活動でデザインコンペをするなどしてよりよい図案を決める。現場での制作は決まった図案をもとに長期休業を利用し実施する。

### (3) 人的資源をメディアとして活用する

第4章でも述べたように、学芸員は教員が不慣れなアーティストとの交渉を補うことができる。教員とアーティストをつなぐメディアとなり得る。また、第5章の実践題材で言えば、育成協会長は中学校美術教員と地域が所有する予算など（物的資源）、地域住民



(人的資源), 地域の問題(情報の資源)をつなぐメディアの役割を果たした。

地域の人的資源とつながりが生まれることで、中学校美術教員がすでに

持ち合わせている物的資源A, 人的資源B, 情報の資源A(図6-3)だけ

でなく、地域の人的資源が持つ物的資源B, 人的資源B, 情報の資源B

(図6-4)も活用できる可能性が生まれ、結果的に題材開発や教材研究の幅が広がることになる。

つまり、地域の人的資源は中学校美術教員と新たな地域の教育資源をつなぐことのできるメディアである。それらの構造を表すと図6-5となる。

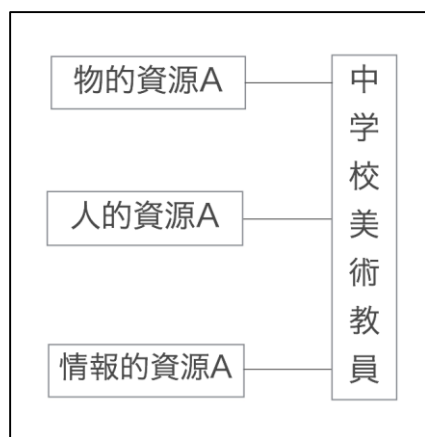


図 6-3 中学校美術教員が持つ資源 (出所 筆者作成)

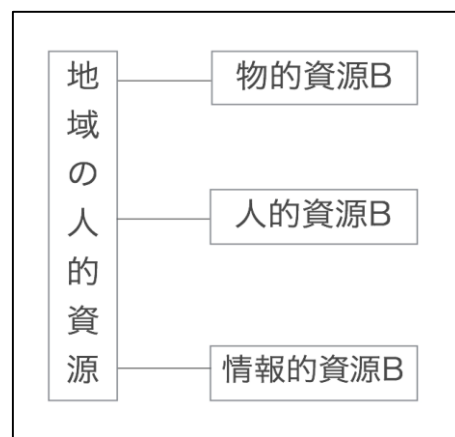


図 6-4 地域の人的資源が持つ資源 (出所 筆者作成)

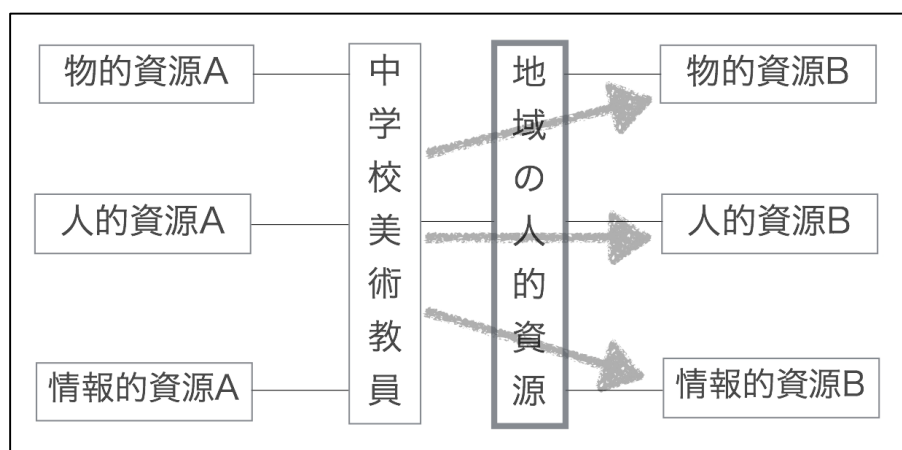


図 6-5 メディアとしての地域の人的資源の概念 (出所 筆者作成)

## 2. 地域の教育資源を活用した美術教育のシステム構築をするための要因(中学校美術教員に必要な力)

### (1) 多様な資源の存在を敏感に感じ取る力

中学校美術教育を実践する上で、人的資源を活用するのであれば著名なアーティスト、物的資源を活用するのであればアーティスト作品、情報の資源を活用するのであれば伝統行事や祭礼が活用できれば理想的である。本物のアーティスト、実物の美術作品、生活に直結する情報の資源はそれだけで生徒の活動意欲を引き出すことができるからである。だが、必ずしもそれらの資源が地域に用意されているとは限らない。だとすると、どのような

教育資源を活用するのが現実的なのかという疑問がわいてくる。

鶴見俊輔は芸術を3つのカテゴリー「純粋芸術」、「大衆芸術」、「限界芸術」に分類した<sup>171</sup>。純粋芸術は「専門的芸術家によってつくられ、それぞれの専門種目の作品の系列に対して親しみをもつ専門的享受者をもつ」<sup>172</sup>のものであり、絵画を例示している<sup>173</sup>。大衆芸術は「専門的芸術家によってつくられるが、製作過程はむしろ企業家と専門的芸術家の合作の形をとり、その享受者は大衆」<sup>174</sup>とし、紙芝居、ポスター、錦絵が例示されている<sup>175</sup>。限界芸術は「非専門的芸術家によってつくられ、非専門的享受者によって享受される」<sup>176</sup>とし、らくがき、絵馬、羽子板、しんこざいく、風絵、年賀状、流灯を例示した<sup>177</sup>。

鶴見の限界芸術のとらえ方は、我々の身近な生活場面に視線を下ろしたときに見える芸術の風景を語ったものである。地域の教育資源を活用し中学校美術の資源発掘をする際の視線も同様に我々の身近な生活に下ろすことで、題材開発の可能性が大幅に広がる。人的資源について言えば、中学校が所蔵する美術作品の作者に働きかけることで、著名ではないアーティスト又は非専門的芸術家かもしれないが、身近な地域に住む人材が活用できるようになる。また、物的資源では、純粋芸術だけでなく、大衆芸術や限界芸術の美術作品に光を当てることで実物の美術作品を教材として活用できる可能性が広がる。限界芸術の美術作品として第2章では服飾店で販売されている商品、第3章では著名な芸術家だけでなく地域にゆかりのある多数の非専門的芸術家の作品、第4、5章では生徒作品を扱った。これらのほとんどは著名な美術作品はなく、生徒の身近な場所で息吹いている美術作品である。

冒頭で述べたように伝統行事や祭礼のような情動的資源が地域に伝わっていないことも想定される。そのような地域ではそれぞれが抱える課題や解決できない問題が活用できることがある。第5章の地域の問題を起点とした題材のように、日常生活に目を向けることで地域の情動的資源を掘り起こすことが可能となる。それは学習活動を始める上で強い動機付けとなるだけでなく、第5章で示したような教育的効果を十分期待できるものとなり得る。

地域を活動の場とし、地域の美的環境の改善を目指そうとするとき、中学生が地域や教員の下働き役とならないように留意しなければならない。そのためには、地域の課題を企画者や指導者と生徒が共有することで、生徒の主体的な参加が促されるとともに、完成したときに生徒が達成感を味わうことにつながる。

私たち中学校美術教育が地域の教育資源の発掘，教材研究をすすめるためには，鶴見が限界芸術を眺めるときのように目線を下ろし，多様な資源の存在を敏感に感じ取る力が必要である。

## (2) 人的ネットワークを構築する力

筆者は中学校美術教員になって10年以上，美術の授業を展開するためには自身の教員としての能力を高めることこそが，いい授業を作るための近道と考えてきた。それはもちろん大事な要因であるが，他者から協力を得る力も中学校美術教員に必要な力である。第2章では服飾店の店長，第3章では同一校種間の美術教員，第4章では美術館学芸員，第5章では育成協会長との人的ネットワークを築くことができたからこそ，実践或いは調査活動を円滑にすすめることができた。それは偶発的な面もあるが，偶発的だったからこそ発展できた。

自戒の念も込めて言えば，地域の教育資源を活用した中学校美術教育のシステムを構築するためには，日頃接する人はもちろん，さまざまな場面で出会う人との出会いを大事にする資質・能力（人的ネットワークを構築する）力が中学校美術教員に必要である。

## 第2節 今後の展望

地域の教育資源を活用した中学校美術教育のシステム開発をすすめる中で4つの事例を示した。しかし，美術教育のすべてを網羅しているわけではない。ここでは4事例以外の部分を提示し本研究の締めくくりとする。

### 1. 歴史的研究

第1章では，学習指導要領（試案も含む）をもとに，地域と中学校美術科の関わりを探った。これをさらに充実させるためには，学習指導要領以外での歴史的研究が必要である。

昭和22年版，昭和26年版では文部省の検定を経た教科書が存在しなかった。中学校の教育課程は教育現場の裁量が大きく，当然のことながら中学校の美術科も現場の裁量に任されていた。したがって，全国各地では多様な授業が展開されていたことが予想される。わずかだったかもしれないが，それらの中には地域の教育資源を活用した題材があった可能性がある。教科書の検定がなかった時代の実践を調査することで，現代の中学校美術教育

に示唆を与えてくれるものが存在するかもしれない。調査方法として、学制改革直後に開校した中学校が保管している文献等の調査や昭和20年代に中学生だった方への聞き取り調査が考えられる。今後は校舎改築等に伴う資料の破棄、散逸がさらに進むとともに、当時の中学生の高齢化に伴い聞き取り調査が困難になっていくことが予想される。したがって、これらの調査は急を要す。また、明治期以降の美術教育や諸外国における地域の教育資源を活用した事例も確認するなど、先人の足跡をたどることで歴史的研究がより充実する。

## 2. 情報的資源の共有

研究2「中学校間の連携」では、中学校美術科における実物の美術作品を用いた鑑賞の授業の充実を図るため、中学校所蔵美術作品活用の可能性を探った。新潟市を題材とし、市内中学校全てを対象に、アンケートを通して中学校所蔵美術作品を調査し、データベースを作成した。その中から、他校へ貸出し可能な美術作品を選び出し、中学校美術科における鑑賞の授業実現の可能性を検討した。結果、地域内中学校には活用可能な美術作品が充分あり、それらを活用した鑑賞の授業が実施可能できるとの結論を得た。

筆者は2011年11月に調査結果を新潟市立中学校及び公立美術館（新潟市立新潟市美術館、新潟市立新津美術館、新潟県立万代島美術館）へ提供した。しかし、その後新潟市立中学校間で美術作品の貸借が行われている様相はない。原因として考えられるのは、筆者が提供した情報は美術作品のリストのみであったため、各中学校がどのような美術作品を所蔵しているのか具体的な姿を教員が把握できないことにあるものと考えられる。作品の文字データだけでなく画像データも含め各中学校間で情報共有できる必要がある。加えて作品を使ってどのような授業が可能で、生徒にどのような学びが形成されるかも含めた実践に関する情報共有も必要である。

学校間での美術作品貸借の輪は広がっていないが、美術館での活用が始まった。筆者が情報提供した翌年（2012年）、新潟市新津美術館は館が所在する新潟市秋葉区内に所在する学校や公共施設が所蔵する美術作品の詳細な追加調査を行い、校長室や旧町長室などに一般公開されていない美術作品が多数あることを突き止めた。それらを活用し2013年2月2日から3月24日まで「秋葉区の隠れた名品展」の企画展が開催されることとなった。また、翌年には江南区の調査を行い、結果をもとに翌年2014年1月25日から3月25日には「江南区の隠れた名品展」の企画展が開催された。

学校が所蔵する美術作品が美術館で活用されることにより、それらについての研究が深

まり、その成果が中学生も含む地域住民に還元された。今後、学校所蔵美術作品の調査、活用の方策を考える上で中学校間だけでなく美術館との連携の必要が生じている。

### 3. 人的資源としての美術館学芸員との連携

研究3「中学校美術科と美術館の連携」では、我が国における中学校と美術館の連携事業の事例を概観した上で、教員と学芸員の人的ネットワークを活用する題材の立案と実践を行った。教員が主導権を持ち、学校と美術館の人的ネットワーク（教員と学芸員）を活用することで、教員又は学芸員だけでは実現しなかった題材が可能となり、美術の授業に広がりが見られることが分かった。

しかし、第4章第4節の3.でも述べたように一過性の題材となった点が課題として残った。要因は、この題材を通して生徒が何を学んだのか、学校がどのように変容したのか、学芸員（美術館）にとってのメリットは何か、地域にどのような影響を与えた或いは与える可能性があるのか、について学芸員（美術科）、地域住民、管理職や他教科教員に明示できなかった点にある。

単年度のイベント的題材として終わらせないためには、生徒や地域、学校（教員）と美術館（学芸員）それぞれが何を求め、どのような資源を持ち、地域内にはどのような実践例があるのかなどのデータベースの構築と共有化、それらの価値を訴えるための情報発信が必要である。すると関係者の理解を得ることができ、継続的な実践が可能となるとともに、活動の輪が広がり、活動内容に深まりが見られることが期待できる。

### 4. さらなる題材開発を目指して

研究4「中学校と地域住民」では、地域を活動の場とした中学生による美術作品制作を行った。その結果、地域における中学生による美術作品制作活動を通して生徒と地域住民相互にメリットが生じるとともに、美術教育、その他の教育的観点で意義を見いだせることが分かった。また、活動を通して、美術に関する生徒の諸能力の変容について明らかにすることが今後の課題として残った。

次年度、本題材を実施するために育成協が準備した予算が増額され、より多くの画材を準備することができた。また、卒業生や美術部以外などの生徒も参加し、参加者数が増加した。加えて、周辺住民からの熱中症対策としてのお茶やお菓子の差し入れが大幅に増え、地域住民の注目度の高まりと期待が高まったのが分かる。

さらにその次の年度は、下絵の段階から生徒たちの手により描かれるようになり、活動を主導するのが教員から生徒や地域住民へさらにシフトしてきた。活動が始まり3年経ち、本題材における地域内循環発展システムが実現しつつあるといえよう。その要因は「地域が防犯の観点からも美的観点からも改善されてきているのが明確に示された」、 「中学生が地域貢献しているのを管理職も含め他教科教員にも認められている」ということにある。

地域内循環発展システムを意識した題材開発、題材の見直しをすることにより、地域の教育資源を活用した中学校美術をさらに充実させることにつながる。

今後も地域がかかえる課題や問題を起点とした新たな題材の発掘をすすめ、中学生の美的感性を高めるとともに、さらによりよい地域環境作りに中学校美術教育が貢献できるよう研究を進めていきたい。

- <sup>1</sup> 井上隆二・山下富美代 著『社会心理学』図書印刷株式会社，2001，p.48.
- <sup>2</sup> 同上。
- <sup>3</sup> 同上。
- <sup>4</sup> 教育基本法第十三条には「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」と明記された。
- <sup>5</sup> 指導要領第1章第4の2の(14)には「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること」、指導要領第2章第6節第3の2の(1)のエに「表現の材料や題材などについては、地域の身近なものや伝統的なものも取り上げるようにすること」と明記された。
- <sup>6</sup> 平成22年（2010年）4月に「子ども・若者育成支援推進法」が施行されたことを受け同法に基づき、『子ども・若者白書』（法定白書）が、新たに作成された。『子ども・若者白書』は、昭和31年から作成されてきた『青少年白書』（非法定白書）の構成を基本的に踏襲している。
- <sup>7</sup> 内閣府，前掲，p.93.
- <sup>8</sup> ベネッセ総合教育研究所 HP  
[http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/houkago/2009/soku/soku\\_14.html](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/houkago/2009/soku/soku_14.html)  
 2014.12.3 最終閲覧
- <sup>9</sup> 2014年12月6日開催，新大美術教育研究会における村上尚徳の講演より
- <sup>10</sup> 新潟県教職員名簿編集委員会『新潟県教職員名簿』新潟県学校生活共同組合，各年。
- <sup>11</sup> 2011年5月現在新潟市が設置する中学校。これには1991年及び2001年5月時点で新潟市と合併する以前の地方公共団体として設置されていた中学校を含む。
- <sup>12</sup> 分校計上せず。臨時免許による教科担任は美術科担当教員として計上。
- <sup>13</sup> マネジメント研修カリキュラム等開発会議『学校組織マネジメント研修～すべての教職員のために～（モデル・カリキュラム）』文部科学省，2005，p.1-2-3.
- <sup>14</sup> 橋本忠和「幼小連携におけるカレンダーづくりの教育的効果の研究」『美術科教育学会誌(26)』美術科教育学会，2005，pp.303-317.
- <sup>15</sup> 上浦千津子「社会に拓かれた美術教育の可能性3：高大連携を基軸としたアート・ワークショップの実践事例を通して」『美術科教育学会誌(27)』美術科教育学会，2006，pp.121-133.
- <sup>16</sup> 宇多秀士「図画工作・美術科教育における＜小中連携／一貫教育＞の現状と課題」『美術科教育学会誌(29)』美術科教育学会，2008，pp.103-116.
- <sup>17</sup> 同上，p.103.
- <sup>18</sup> 鳥賀陽梨沙「思想を伝える視覚メディアとしての現代美術 教育的アプローチ：龍谷大学・滋賀県立近代美術館連携事業『福岡道雄プロジェクト』についての一考察」『美術科教育学会誌(31)』美術科教育学会，2010，pp.99-112.
- <sup>19</sup> 奥本素子「つなげる鑑賞法を用いた博学連携の実践と評価：美術鑑賞における事前学習の効果と館内学習の効果の分析」『美術科教育学会誌(33)』美術科教育学会，2012，pp.149-158.
- <sup>20</sup> 同上，p.149.
- <sup>21</sup> 同上，p.149.
- <sup>22</sup> 津屋有李「滋賀県におけるNPOがつなぐ美術館・芸術家と学校の連携」『美術教育学会誌(30)』美術科教育学会，2009，pp.241-252.
- <sup>23</sup> 同上。
- <sup>24</sup> 柳沼宏寿「シネリテラシーの教育的意義：シネリテラシーフェスタin新潟の取り組みを中心に」『美術科教育学会誌(32)』美術科教育学会，2011，pp.429-439.
- <sup>25</sup> 同上，p.429.
- <sup>26</sup> 同上，p.438.
- <sup>27</sup> 木岡一明 編『学校を取り巻く環境の把握と地域協働』教育開発研究所，2003.
- <sup>28</sup> 松本敏「地域資源の発掘と開発を推進する学校の基本デザイン」同上，pp.180-185.
- <sup>29</sup> 五島政一「地域教材の活用」同上，pp.198-201.
- <sup>30</sup> 長谷川総一郎・福山博光・山田一美編『地域文化と美術教育』長門出版社，1995.
- <sup>31</sup> ふじえみつる「美術教育を軸とした学校と美術館の連携について」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』第46輯，愛知教育大，1997，p.158.
- <sup>32</sup> 長谷川総一郎・福山博光・山田一美編，前掲，pp.141-123.
- <sup>33</sup> 同，pp.124-134.
- <sup>34</sup> 葉山正行「昭和22年版『学習指導要領』図画工作編（試案）作成経緯についての考察」『美術科研究5巻』大阪教育大学・美術学科，2008.
- <sup>35</sup> 杉浦宏編『日本の戦後教育とデューイ』，世界思想社，1998，p.220.

- 36 国立政策研究所『教育課程の改善の方針，各教科等の目標，評価の観点等の変遷－教育課程審議会答申，学習指導要領，指導要録（昭和22年～平成15年）－』2005，p.16.
- 37 文部科学省HP  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/idea/1304378.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/1304378.htm)  
2014.8.2 最終閲覧
- 38 文部科学省HP  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/)  
2014.8.2 最終閲覧
- 39 昭和22年版，第十四章，単元四，図案（二）教材例
- 40 同年版，同章，単元十（二），2.
- 41 昭和26年版，第Ⅰ章，第2節，1
- 42 同年版，第Ⅰ章，第2節，2
- 43 同年版，同章，同節，2,1)
- 44 同年版，同章，同節，2,1), (1)
- 45 同年版，同章，同節，2,1), (3)
- 46 同年版，第Ⅱ章，第1節，1, (3)
- 47 同年版，同章，同節，2,1), (2)
- 48 同年版，同章，同節，2,2), (6)，〔指導内容〕「生活図案」第3学年
- 49 同上。
- 50 同年版，同章，同節，3,2), (4)，〔指導内容〕「地域社会の生活に必要な配置配合」，第3学年
- 51 同上。
- 52 同上。
- 53 昭和33年版，第2章，第6節，第2，〔第3学年〕，1, (4)
- 54 同年版，同章，同節，同項，〔第3学年〕，2,A表現，(美術的デザイン)，(2)
- 55 同年版，同章，同節，同項，〔第3学年〕，3, (6)
- 56 昭和44年版，第2章，第6節，第2，〔第2学年〕，2,B鑑賞，(2)，イ
- 57 平成元年版，第2章，第6節，第3,2, (1)
- 58 平成10年版，第2章，第6節，第2〔第2学年及び第3学年〕，2, (2)，エ
- 59 同年版，同章，同節，第3,2, (4)
- 60 同年版，同章，同節，第3,5
- 61 平成20年版，第2章，第6節，第2〔第1学年〕，2, (1)，イ
- 62 同年版，同章，同節，第2〔第2学年及び第3学年〕，2, (1)，イ
- 63 同年版，同章，同節，第3,2, (1), エ
- 64 昭和26年版，第Ⅲ章，第2節，8
- 65 昭和33年版，第2章，第6節，第3,9
- 66 昭和44年版，第2章，第6節，第3，3, (5)
- 67 平成元年版，第2章，第6節，第3,4
- 68 平成10年版，第2章，第6節，第3,2, (5)
- 69 平成20年版，第2章，第6節，第3,2, (2)
- 70 新潟市中学校教育研究会美術部会に所属する美術科担当教員によって投稿された実践事例をまとめた冊子。1人1事例を原則とし発表している。
- 71 酒井忠康 ほか『美術1』光村図書出版株式会社 2011，p.8-9.
- 72 同上，p.14-15.
- 73 同上，p.54-55.
- 74 酒井忠康 ほか『美術2・3上』光村図書出版株式会社 2011，p.24-25.
- 75 同上，p.26-27.
- 76 酒井忠康 ほか『美術2・3下』光村図書出版株式会社 2011，p.22-23.
- 77 同上，p.26-27.
- 78 同上，p.32-33.
- 79 代表著作者 春日明夫 長田謙一 大橋功 小泉薫 小澤基弘 泉谷淑夫『美術1』日本文教出版株式会社 2011，p.10-11.
- 80 同上，p.32-33.
- 81 同上，p.36-37.
- 82 同上，p.46-47.
- 83 代表著作者 春日明夫 長田謙一 大橋功 小泉薫 小澤基弘 泉谷淑夫『美術2・3上』日本文教出版株式会社 2011，p.10-11.
- 84 同上，p.28-29.
- 85 同上，p.30-31.
- 86 同上，p.34-35.



- 87 同上 , p. 40-41.
- 88 同上 , p. 46-47.
- 89 代表著作者 春日明夫 長田謙一 大橋功 小泉薫 小澤基弘 泉谷淑夫『美術 2・3 下』日本文教出版株式会社, 2011, p. 22-23.
- 90 同上 , p. 26-27.
- 91 文部科学省 HP  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/05/1295041\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/08/05/1295041_1.pdf)
- 2014.8.15 最終閲覧
- 92 酒井忠康 監修『美術館と建築』青幻社, 2014, p. 133-134.
- 93 根津美術館 HP  
<http://www.nezu-muse.or.jp/jp/about/history.html>
- 2014.12.14 最終閲覧
- 94 同年版, 第 X 章, 第 5 節, 1, 2)
- 95 同上。
- 96 文部科学省 平成 23 年度社会教育調査表 1 - 2 種類別博物館数の推移より
- 97 同上。
- 98 同上。
- 99 平成 18 年改正教育基本法第 12 条の 2
- 100 文部科学省 HP  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/week/index\\_e.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/week/index_e.htm)
- 2014.12.14 最終閲覧
- 101 平山修一「地域活性化に関する新しい視点 : ソーシャルキャピタルの育成と地域活性化との関係性の分析を通じて」『人文科学 no. 19』大東文化大学人文科学研究所 2014, p. 15.
- 102 同上。
- 103 文部科学省 HP 2014.10.13 最終閲覧
- 104 同上。
- 105 宇賀神俊彦「『お気に入りのイスをつくろう - 積層技法を活かして - 』からの一考察」『教育美術 2006 年 5 月号』 2006, p. 52.
- 106 同上。
- 107 加藤克彦 藤田雅也 西村志磨 樋口一成「地域との連携によるものづくり教育活動の考察 I」『美術教育学』美術科教育学会, 2010.
- 108 前掲, pp. 149-158.
- 109 同上。
- 110 アンケートの質問内容は「地域の教育的資源（美術館、公民館、アーティストや学芸員、商業施設、大学、高校、小学校などの異校種、中学校など）を活用した学習活動で実践していることがあったら御記入ください。また、2 年以上継続し現在も行っている（本年度行う予定も含む）実践については実施何年目になるかも御記入ください」である。
- 111 金山和彦「鑑賞学習領域の変遷と学習環境・教材の現状について - Analyzed by JavaScript - STAR を用いた x 自乗検定の結果について -」『新見公立短期大学紀要』第 25 巻, 2004, p. 42.
- 112 担当美術科教員によると開設された日時は不明とのことである。
- 113 新潟市美術館 HP <http://www.ncam.jp/outline/outline.htm> 2011.7.16 最終閲覧
- 114 新潟市美術館（北上あつ子 佐藤央）『新潟市美術館企画展図録 まなびやのコレクション展』島津印刷株式会社新潟事業部, 1993.
- 115 参考文献 同, pp. 50-51.
- 116 参考文献 京都市学校歴史博物館（大杉隆一 ほか）『我が国の近代教育の魁 京の学校・歴史探訪』京都新聞社, 1998.
- 117 2014 年 5 月 14 日, 筆者による京都市学校歴史博物館学芸員へのインタビューより
- 118 新潟県内の小・中学校, 高等学校, 大学を対象とし, 郵送によるアンケート調査を実施する。
- 119 新潟市立中学校の美術科担当教員で構成される研究団体
- 120 新潟市美術館（北上あつ子 佐藤央）, 前掲, p. 50.
- 121 福本謹一「鑑賞教育再考 - 学校と美術館を取り結ぶもの」（福本謹一他編『美術フォーラム 21』第 11 号）醍醐書房 2005, p. 84.
- 122 真鍋一男・宮脇理、監修『造形教育辞典』建帛社 1991, p. 237.
- 123 <http://www.ncam.jp/outline/outline.htm> 2012 年 2 月 26 日最終閲覧
- 124 博物館法第一条「総務省が運営する総合的な行政ポータルサイト」  
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S26/S26H0285.html> 2010. 1 .10 最終閲覧
- 125 独立行政法人国立美術館法第三条 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H11/H11H0177.html> 2010.

- 1.10 最終閲覧
- <sup>126</sup> ふじえみつる「美術教育を軸とした学校と美術館の連携について」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』第46輯，愛知教育大，1997，p.158.
- <sup>127</sup> 前掲『中学校学習指導要領解説 美術編』，p.84.
- <sup>128</sup> 新潟県立近代美術館「新潟県立近代美術館協議会評価報告書（概要）」  
[http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML\\_Simple/384/729/kyouiku998\\_sl\\_1.pdf#search=](http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Simple/384/729/kyouiku998_sl_1.pdf#search=)新潟県立近代美術館 %20 出前講座' 2012. 9. 29 最終閲覧
- <sup>129</sup> 新潟県立近代美術館 / 新潟県立万代島美術館編集『平成21年度新潟県立近代美術館 / 新潟県立万代島美術館 年報』2011，pp.106-107.
- <sup>130</sup> 2010年7月14日上越市立小林古径美術館笹川修一学芸員へのEメールでの取材より
- <sup>131</sup> 世田谷区立世田谷美術館HP [http://www.setagayaartmuseum.or.jp/collaboration/win\\_class01.html](http://www.setagayaartmuseum.or.jp/collaboration/win_class01.html) 世田谷美術館，2010.1.5 最終閲覧
- <sup>132</sup> 名古屋市美術館HP <http://www.art-museum.city.nagoya.jp/artcard.html> 名古屋市美術館，2010.1.5 最終閲覧
- <sup>133</sup> 国立国際美術館HP [http://www.nmao.go.jp/study/pdf/art\\_card\\_110524.pdf](http://www.nmao.go.jp/study/pdf/art_card_110524.pdf) 2010.1.5 最終閲覧
- <sup>134</sup> 損保ジャパン東郷青児美術館HP <http://www.sompo-japan.co.jp/museum/jonior/index.html> 損保ジャパン東郷青児美術館 2010.1.5 最終閲覧
- <sup>135</sup> 愛知県美術館HP <http://www-art.aac.pref.aichi.jp/educate/index.html> 愛知県美術館 2010.1.5 最終閲覧
- <sup>136</sup> 徳島県立近代美術館HP <http://www.art.tokushima-ec.ed.jp/education/> 徳島県立近代美術館 2010.1.5 最終閲覧
- <sup>137</sup> 岡山県立美術館国吉康雄教材開発研究会『教室でもできる美術鑑賞ガイド』  
[http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/kuniyoshi\\_kyouzai.html](http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/kuniyoshi_kyouzai.html) 岡山県立美術館，2010.1.5 最終閲覧
- <sup>138</sup> 滋賀県立近代美術館HP [http://www.shiga-kinbi.jp/?page\\_id=12540](http://www.shiga-kinbi.jp/?page_id=12540) 2010.1.5 最終閲覧
- <sup>139</sup> 大原美術館HP <http://www.ohara.or.jp/201001/jp/E/E2a.html#section1> 2010.1.5 最終閲覧
- <sup>140</sup> 塚田美紀「世田谷美術館の小学校美術鑑賞教室：美術館と学校の連携をめぐるコミュニケーション構築の視点から」『美術科教育学会誌』第23号，美術科教育学会，2002，p.167.
- <sup>141</sup> 同上，同頁
- <sup>142</sup> HIBINO SPECIAL『MATCH FLAG PROJECT 2010 SOUTH AFRICA OFFICIAL REPORT』財団法人日本サッカー協会，2010，p.1.
- <sup>143</sup> 新潟市新津美術館は平成9(1997)年に開館した，新潟市秋葉区に所在する公立美術館である。
- <sup>144</sup> 日本サッカー協会HP <http://samuraiblue.jp/fanzone/matchflag/southafrica/> 2010.5.1 最終閲覧
- <sup>145</sup> 新潟市新津美術館HP <http://www.naflog.com/nicky.cgi?DT=20101206A#20101206A> 2010.12.10 最終閲覧
- <sup>146</sup> 朝日新聞2010年9月5日(日)12版(新潟)及び，同紙同年12月9日(木)12版(新潟)
- <sup>147</sup> 柴田義松『ヴィゴツキー入門』寺子屋新書，2011，p.167.
- <sup>148</sup> 文部科学省平成20年社会教育調査「種別博物館数」によると、全国の美術博物館・美術博物館相当施設数の内訳は、それぞれ373館，76館であり合計すると449館。全国の中学校数は10,815である。文部科学省HP  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa02/shakai/kekka/k\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2010/04/01/126852\\_8\\_2\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa02/shakai/kekka/k_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/04/01/126852_8_2_1.pdf) 2010.12.10 最終閲覧
- <sup>149</sup> 新潟市中学校教育研究会美術部会に所属する美術科担当教員によって投稿された実践事例をまとめた冊子。1人1事例を原則とし発表している。
- <sup>150</sup> 1人で3事例のものは例外的である。法的に求められているが，このような実践に対する教員が苦手意識を持っている表れといえる。
- <sup>151</sup> 国立政策研究所HP  
[http://www.nier.go.jp/kenkyukikaku/talis/imgs/talis2013\\_summary.pdf](http://www.nier.go.jp/kenkyukikaku/talis/imgs/talis2013_summary.pdf) 2014.12.21 最終閲覧
- <sup>152</sup> 同上，p.23.
- <sup>153</sup> 同上，同項。
- <sup>154</sup> 同上，p.24.
- <sup>155</sup> 新潟市内全域を主会場とし，新潟市主催で開催されている芸術祭・現代美術展である。第1回は2009年に実施された。
- <sup>156</sup> 2013年1月12日筆者による丹治嘉彦に対する「芸術祭に対する市民の関わりはどのような状況がありましたか」のメールによる質問に対する回答より。
- <sup>157</sup> 2013年7月29日筆者による丹治嘉彦に対する「市民の関わりの変容を示す具体的な事例はありますか」のメールによる質問に対する回答より。

- 
- <sup>158</sup> 括弧内は筆者による補足。
- <sup>159</sup> 林容子『進化するアートマネジメント』レイライン，2004，p.202.
- <sup>160</sup> 森俊太 川口宗敏 的場ひろし，「パブリックアートと地域社会に関する学際的研究」『静岡文化芸術大学研究紀要9』，静岡文化芸術大学，2008，p.80.
- <sup>161</sup> 同上。
- <sup>162</sup> バーナード・クリック 訳・解説 添谷育志 金田耕一『デモクラシー』 岩波書店 2004，p.198.
- <sup>163</sup> 同上。
- <sup>164</sup> 柴田義松『ヴィゴツキー入門』 寺子屋新書，2011，p.167.
- <sup>165</sup> ハーバード・リード 訳 宮脇理 岩崎清 直江俊雄『芸術による教育 Education Through Art by Herbert Read』第2版，フィルムアート社，2001，p.276.
- <sup>166</sup> 川崎市立臨港中学校HP  
<http://www.keins.city.kawasaki.jp/3/ke300501/index.html>  
2013.11.1 最終閲覧
- <sup>167</sup> 文部科学省「地域とともに生きる美術教育」『中等教育資料』 文部科学省，ぎょうせい，2006，pp.28-33.
- <sup>168</sup> 活動の様子が2012年8月6日朝日新聞と同年8月16日新潟日報に掲載された。
- <sup>169</sup> 文部科学省『中学校学習指導要領の解説 美術編』日本文教出版，2008，p.80.
- <sup>170</sup> 平成20年告示「中学校学習指導要領」第4章 総合的な学習の時間，第3.1の(2)
- <sup>171</sup> 鶴見俊輔『限界芸術論』筑摩書房，1999，p.014.
- <sup>172</sup> 同上。
- <sup>173</sup> 同上。
- <sup>174</sup> 同，pp.014-015.
- <sup>175</sup> 同上。
- <sup>176</sup> 同，p.015.
- <sup>177</sup> 同上。

# 初 出 一 覧

本稿は既に学術誌，紀要で発表した拙論の一部を改稿したうえで使用している。詳細は以下の通りである。

## 序章

書き下ろし

## 第1章

書き下ろし

## 第2章

単著「地域の教育資源を活かした造形活動 ～地域の服飾店におけるディスプレイ・コーディネート体験を通して美術を身近に感じる生徒の育成～」(『新潟大学美術教育研究会紀要コンコルディア No.29』, 新潟大学美術教育研究会, 2010, pp.12-17. 査読無論文)

## 第3章

単著「新潟市における中学校所蔵美術作品のデータベースの作成 - 学校所蔵美術作品共有による美術の授業の可能性 -」(『現代社会文化研究第54号』新潟大学大学院現代社会文化研究科, 2012, pp.67-83. 査読付論文)

## 第4章

単著「中学校美術科と美術館の連携についての研究 - 人的ネットワーク活用による新しい美術の授業の創出」(『美術教育学第34号』美術科教育学会, 2013, pp.217-229. 査読付論文)

## 第5章

単著「地域を活動の場とした中学生による美術作品制作の意義 - 中学校美術科と地域の自治組織の連携 -」(『現代社会文化研究第58号』新潟大学大学院現代社会文化研究科, 2014, pp. 59-74. 査読付論文)

## 終章

書き下ろし

## 謝辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるに当たり、多くのご支援とご指導を賜りました主指導教官である雲尾周准教授に深く感謝しております。多忙を極める中で指導のために多くの時間を作り丁寧にご指導いただいたこと、またやさしく励ましてくださったおかげでここまで研究を続けることができたとともに、今後研究を続ける上で大きな糧をいただきました。また、副指導教官の佐藤哲夫教授にはやさしい言葉の中にも鋭いご指摘、的確なご助言をいただき学位論文をまとめる上で多くの有益な示唆をいただき深く感謝しております。同じく副指導教官の柳沼宏寿教授には博士課程進学前から多大なご支援、ご指導を賜りました。本研究の遂行だけでなく、日々の実践場面でも多くのご指導をいただき深く感謝しております。新潟大学大学院現代社会文化研究科の諸先生、事務職員の皆様には社会人でも大学で研究活動及び教育を受けることができる環境を整えていただきました。仕事を続けながら研究活動できるすばらしい環境に恵まれたことを深く感謝しております。

新潟市教育委員会とりわけ伊藤充教育政策監には励ましのお言葉、調査活動をすすめる上でのご助言、ご協力をいただき深く感謝しております。新潟市立大形中学校及び新潟市立赤塚中学校の管理職の先生をはじめとする教職員のみなさまには、修士課程を含め6年間の長い年月、仕事を続けながらの研究活動でご迷惑をおかけする場面が多々あったかと思いますが、温かく見守っていただくとともに、励ましの言葉をいただき深く感謝いたします。新潟市東区の事業所や住民のみなさま、新潟市内各中学校美術教員のみなさま、新潟市美術館荒井直美学芸員には研究上の実践場面でのご支援、ご協力をいただき深く感謝しております。

最後に、大学院での研究活動を快く了承してくれた家族に感謝の意を表して謝辞と致します。